

教育実践総合センター年報

滋賀大学教育学部
Faculty of Education



2018年3月 第1号



目 次

教育実践総合センター年報 第1号

1 共同研究事業 ----- 1

- | | |
|---|----------|
| 1-1) 幼小連携に関する研究 | (菅 眞佐子) |
| 1-2) 授業の事例検討による主体的・対話的で深い学びの実践 | (堀江 伸) |
| 1-3) 滋賀県学校安全教育推進プロジェクト | (藤岡 達也) |
| 1-4) 情報教育に関する研究 | (松原 伸一) |
| 1-5) 理科プロジェクト研究 | (藤岡 達也) |
| 1-6) 理科教育に関する研究 | (加納 圭) |
| 1-7) 授業改善で生み出す主体的な学び | (長岡 由記) |
| 1-8) 国語科における授業分析による授業改善 | (長岡 由記) |
| 1-9) 算数・数学科における授業分析による授業改善 | (渡邊 慶子) |
| 1-10) 言語活動を通してともに学び合う子どもの姿をめざして | (渡邊 慶子) |
| 1-11) 「私らって意外とやるやん」と自分に気づくことを目指して | (若林 千春) |
| 1-12) 滋賀県における幼児の運動能力に関する研究 | (奥田 援史) |
| 1-13) 「声」と「言葉」そして「歌」・・・表現の可能性と充実を目指して | (渡邊 史) |
| 1-14) 通級指導教室の子どもに対する協調運動面の指導に関する実践的研究 | (川島 民子) |
| 1-15) 滋賀県内の技術科教員の自主的研究会と大学との連携によるものづくりの教材開発 | (岳野 公人) |
| 1-16) ロボット教材を利用したプログラミング学習の教育効果に関する研究 | (岳野 公人) |
| 1-17) グループワークを軸にしたコミュニケーション能力を育む授業の研究 | (大嶋 秀樹) |
| 1-18) 通級指導教室における効果的な指導・支援のあり方について | (窪田 知子) |
| 1-19) 子どもの造形活動の観察と理解 | (世ノ一 善世) |
| 1-20) コミュニケーション能力の基礎を育む指導を求めて | (大嶋 秀樹) |
| 1-21) 子どもに関わる若手専門家育成のための研修・教育プログラムの開発 | (大平 雅子) |
| 1-22) 美術科における生徒の主体的な学習を促す授業改善に関する研究 | (新関 伸也) |
| 1-23) 学校アート化計画『グリーンちゃんがやって来た』 | (藤田 昌宏) |
| 1-24) 地域協働の中で役立つ自分を感じる生徒を目指して | (若林 千春) |
| 1-25) 幼児の好奇心や探究心を育むための造形表現活動実践 | (村田 透) |
| 1-26) 中高一貫教育校における発信力を高める授業の在り方 | (大嶋 秀樹) |
| 1-27) 思考力・判断力・表現力の育成 | (畑 稔彦) |
| 1-28) 若手・中堅教員を育てる美術科教材開発プロジェクト | (新関 伸也) |
| 1-29) 交流及び共同学習のあり方について | (白石 恵理子) |
| 1-30) 石山っ子わくわく親子で畑体験隊 | (森 太郎) |
| 1-31) 小学校理科天文分野における児童の思考力や活用力を高める教材開発 | (大山 真満) |
| 1-32) 3歳児にふさわしい保育環境開発プロジェクト | (塩見 弘子) |
| 1-33) 学習言語の力を伸ばす算数科の授業づくりとパフォーマンス評価 | (岸本 実) |
| 1-34) 小学校における予防教育プログラムの開発・実践 | (芦谷 道子) |

2	石山プロジェクト	69
3	学力向上プロジェクト	71
4	出前講座	73
5	教職探究講座	82
6	教職臨床研究	84
7	情報教育研究	88
8	教育実習支援（その1）	90
9	教育実習支援（その2）	92
10	キャリア支援の取り組み	94
11	業務報告	96

1 共同研究事業

1-1) 幼小連携に関する研究

1. 事業名および担当者

事業名は、滋賀県総合研究センター 村地和代研究員の研究プロジェクト、《「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた小学校入門期への円滑な接続に関する研究―言葉による伝え合いを軸とした学びを育む「一幼児の遊び・児童の学び―ジョイントブック」の作成―》である。トータルアドバイザーとして委嘱を受けた、滋賀大学教育学部 菅眞佐子が研究支援を行った。

担当者：研究代表者 滋賀県総合研究センター研究員 村地和代

専門委員：滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課指導主事 北原陽子

日野町子ども支援課課長補佐 幸野雅恵

守山市保育幼稚園課幼保指導担当課長 河口智津子

研究委員：日野町立日野幼稚園教諭 位田慎也 日野町立日野小学校教諭 森陽子

守山市立玉津こども園保育教諭 大場直也 守山市立玉津小学校教諭 寺井真理子

研究協力校園：日野町立日野幼稚園，日野町立日野小学校，守山市立玉津こども園，

守山市立玉津小学校

トータルアドバイザー，研究支援 滋賀大学教育学部 菅眞佐子

2. 事業の目的

平成 29 年公示の小学校学習指導要領，幼稚園教育要領等の趣旨を踏まえ，幼小接続期カリキュラムを作成し，言葉による伝え合いを軸とした，主体的・対話的で深い学びの視点を生かした保育・教育における子どもの学びの姿とその手立てについてまとめた「一幼児の遊び・児童の学び―ジョイントブック」を作成し，幼児教育と小学校教育の円滑な接続を目指す。

3. 事業の概要

3 回の専門・研究委員会ならびに公開保育 1 回での討議を柱に，以下の流れで研究を遂行した。

(1) 研究協力校園教員へ質問紙調査

各協力校園の教員を対象に質問紙調査を行い，幼小連携の状況および教員の目から見た接続期児童についての戸惑いや課題，育てたい子どもの姿等について把握した。

(2) 接続カリキュラムの作成

質問紙調査の結果から地域における課題や育みたい子どもの姿を協議・共有し，その姿を接続の軸として接続カリキュラムを作成した。作成にあたっては，①カリキュラム枠として，幼児期の終わりまでに育てたい姿」と「第 1 学年の終わりまでに育てたい姿」を具体的に記載する箇所を設け，②幼稚園等における 5 歳児の 1 年間の教育・保育カリキュラムをアプローチカリキュラム，小学校第 1 学年で取り組む教育活動のカリキュラムをスタートカリキュラムとし，2 年間を接続期としてとらえて継続的に子どもの育ちと学びを育むための手立てとした。また，③接続期カリキュラム枠は，目指す子どもの姿に関わる教育・保育のねらい及び内容を 3 段で設定し，中段の 5 歳児 3 月と 1 年生 4 月の間に「幼児期の終わりまでに育てたい姿」を記入する箇所を設けることで，指導者が幼児教育と小学校教育のつながりをより意識できるものとした。

(3) 接続カリキュラムに基づく保育・教育実践とその振り返りを通したカリキュラムの更新

2つの地域の研究協力校園で接続カリキュラムを実践し、言葉による伝え合いを軸とした、主体的・対話的で深い学びの視点を生かした保育・教育の取り組みを次のような手順で進めていった。

① 1学期終了後にそれまでの取り組みをまず一度振り返り、幼・小で互いの教育内容・方法や子どもの姿を具体的に共有した。振り返りにはPDCAシートを利用し、写真やキーワードを活用しながら協議した。その結果、幼・小それぞれにおける取り組みを確認・共有することができた。また幼・小共通の取り組みとして行われてきた「振り返り」が学びの自覚や次の学びに向かう意欲を引き出していること、その振り返りをさらに高めるためには言葉での伝え合いが重要になってくるという共通理解が得られ、そのことが2学期の保育・教育の改善にさらに生かされることとなった。

② 2学期には、各校園の保育者・教師が1学期の取り組みを通して得た気づきや学びを踏まえて、各校園で目指される子どもの姿に迫るための取り組みをさらに深めていった。地域の異なる2つの校園では目指す子どもの姿自体に相違のあることから、取り組みにおける教育的配慮もそれぞれ独自の観点から設定されていたが、1学期からの取り組みを通じて「幼児期の初めまでに育ってほしい姿」を接点として幼・小が語り合ってきたことで、いずれの校園でも、接続期の子どもの姿を明確に捉え、自らの専門性を生かしながら互いの取り組みや指導法の良さを取り入れた保育・教育実践を目指すことができた。

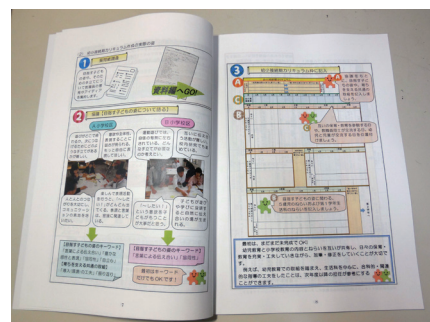
(4) ジョイントブックの作成

実践事例から明らかになった幼小連携の具体的な姿や子どもの学びの姿、そのための取り組み等について「一幼児の遊び・児童の学びージョイントブック」として冊子にまとめ、幼児教育と小学校教育の円滑な接続に生かすことのできる資料とした。今回提案された「幼小接続期カリキュラム」についてその枠を示し、幼・小で協力して実際にカリキュラムを作成していく具体的な方法について実践事例に裏付けられた解説を示すとともに、今回の指導要領・教育要領等の改訂で示された「主体的・対話的で深い学び」の観点から接続期の子どもの姿や取り組みを幼・小の双方に関してとりあげ、接続についての理解を深める資料として提供した。

4. 今後に向けて

今回作成した「一幼児の遊び・児童の学びージョイントブック」について、その活用され方や利用による効果等を今後調査することで、さらに活用しやすいものとなるよう改善を図っていく必要がある。

また、今回、実践事例で接続の接点となった「目指す子どもの姿」は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のなかでも、「言葉による伝え合い」、「協同性」、「豊かな感性と表現」、「自立心」といったものに近い。これら以外の側面での姿を接点とした運用も試みるなどして、今回提案された接続カリキュラムの有効性を確認し、改善を図っていく必要がある。



(菅 眞佐子)

1ー2) 授業の事例検討による主体的・対話的で深い学びの実践

1. 事業名および担当者

授業の事例検討による主体的・対話的で深い学びの実践研究

—児童生徒の能動的で深い学びを支える要素と条件の追究—

堀江 伸, 畑 稔彦(以上2名 学部教員)

楠本 晃久, 藤岡 香織(以上2名 滋賀県総合教育センター研究員)

2. 事業の目的

「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりを追究し、事例検討を連続させ、授業に求められる要素と条件を追究する。参加する小・中学校教員10名とともに児童生徒の能動的で深い学びの実現を目指し、教師たちの授業力を高めるとともに児童生徒の学びを質的に豊にしていく可能性に迫る。

3. 事業の概要

a. 追究する課題と目的

小学校・中学校次期学習指導要領(2017.3)が公示され、第1章総則の中で「主体的・対話的で深い学び」の授業像が提起された。この次期学習指導要領の先行実施が進む中で、「主体的・対話的で深い学び」の実現のためには何が求められているかという課題意識を持ってスタートした。

こうした課題には、従来の講習型の研修や多人数での事例検討ではなく、参加者が自分自身の授業実践をデザイン・実践し、互いの実践を省察しあうことが必要だと考えた。教師自らが「主体的」になり、協働で学び合い、児童生徒の学びの姿に「深く」迫る体験を中軸にすること、そして少人数10名による研究修養の場として「実践研究」型の研修を企画し追究することにした。

b. 研究の方法と計画

1 研究の方法

(1) 「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりについて、講師等からの講話、先進的な授業研究の参観やトータルアドバイザーの助言から授業分析の方法について考察する。これまでの各自の実践を振り返り、本研究の目標を共有する。

(2) 参加者各自が挑戦したい単元・題材を決定し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりと授業実践を進める。

(3) 各自の授業を他の参加者全員で参観し、授業分析を通して「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりの視点を見いだし、各研究委員が行うそれぞれの次なる実践授業へと生かす。

(4) 授業分析と授業づくりの往還による研究会の経過をもとに「主体的・対話的で深い学び」に迫る授業づくりの視点を実践事例とともにまとめ、事例検討のツールと研究スタイルの可能性をさぐる。

2 研究の計画

4月～6月	研究構想, 研究推進計画の立案, 参加者による先行授業実践小学校の参観・授業分析
8月	1学期の交流・授業づくりの視点の共有し, 2学期の実践に向けての各自の指導案検討
9～10月	参加者の実践授業公開を参観し, 分析・検討する。

c. 研究の成果

本研究では、中教審答申(2016.12)に示されている学びの概念をもとに、実現したい「主体的・対話的で深い学び」の姿のある授業を構想し、検討し、その学びあり方と教師の関わり方を考察していった。第1回研究会の事例検討では、図1のようなY字チャートに表されるような結果となった。

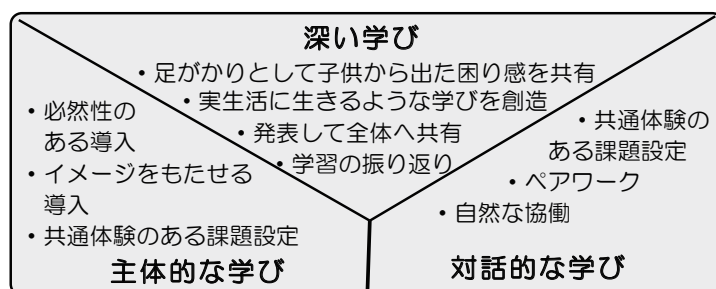


図1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりの視点

第3回研究会では、それまでの捉え方と課題を踏まえ、各研究委員による1学期の実践を交流し合い、授業づくりの視点を検討した。協議する参加者の語りからは、「初めは対話的な学びととらえていたが、知識を関連付けていることから深い学びでもあった」「自分の考えをもつことで、友だちの考えと比較する対話的な学びが生まれる」等児童生徒の学びの姿を捉え直した。また「主体的な学び、対話的な学び、深い学びと3つを切り離して考えるのではなく、絡み合っていると改めて感じた」とか、「1時間の授業の中だけで、単元を通して深い学びに迫っていく」という理解の仕方も伺えた。8月の時点での授業づくりの視点が図2の通りである。

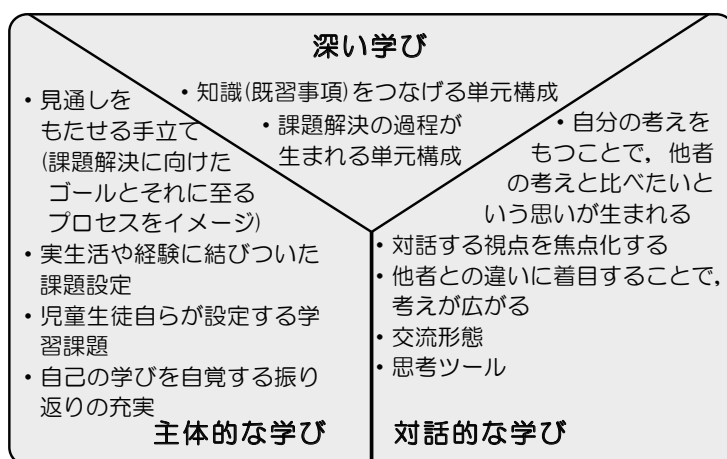


図2 見いだした主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりの視点

第4回、第5回研究会では参加者の授業実践を参観し分析検討した。図2の共通理解のもと、教科特有の質と教材固有の内容の可能性を大切にしながら、子どもたちの学ぶ姿と事実在即して考察した。単元の中での子どもたちの変容と教師の関わり方や方策の選択が理解でき、その事例について考えられるとともに、授業づくりの視点についての理解や汎用的な方策の知見をえることができた。

4. 今後に向けて

小・中学校教員10名が各自授業の題材と追究する課題を持ち授業実践し、その各事例を毎回参加者同士が授業分析することを通して授業づくりの視点を追究し、次なる実践へと連続させてきた。10名とは言え、一人ひとりが十分に学ぶことができ、お互いに学び合えたことの多い「実践研究」型の研修会だったといえる。

分析検討のツールの可能性も明らかにできた。これらのツールを使った授業の研究会をさらに重ねて、校内授業研究会で活用できるツールと検討のスタイルを確立させていくことは今後の課題といえる。そのための土台は創れたのではないかな。

(堀江 伸)

1-3) 滋賀県学校安全教育推進プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名は滋賀県学校安全推進プロジェクトであり、担当者は以下のとおりである。

教育学部：藤岡達也（代表者）

滋賀県教育委員会保健体育課：北川英樹（指導主事），鈴木伸哉（指導主事）

彦根市教育委員会保健体育課：上村聡（指導主事）

近江八幡市教育委員会学校教育課：菅原奈美（指導主事）

2. 事業の目的

滋賀県における学校防災を中心とした学校安全を推進するための教育内容，方法，さらにはそのシステムについて，県内の市町の事例の収集・分析等をもとに各学校への指導・支援を通してアクションリサーチ的に探る。特に平成 29 年度は本学に設置された教職大学院学校経営力開発コースの「地域協働実習」の一環としても地域連携の強化を図った。今年度も平成 26 年度から刊行している「滋賀県防災教育資料集」し，「滋賀県防災・安全教育資料集」を作成，関係機関，学校等に配布し活用を意図する。

3. 事業の概要

昨年度に引き続き，県教育委員会事務局保健体育課，近江八幡市教育委員会学校教育課，彦根市教育委員会保健体育課等と連動して，滋賀県内の学校安全の推進・啓発を目指し，地域の様々な機関等と連携した災害安全（防災），生活安全（防犯を含む），交通安全の内容，指導法について，実践的な取組を行ってきた。その一つとして，平成 29 年度に作成した「滋賀県防災・安全教育資料集」の事例を各学校現場において具体的な方法を示した。

本学にとって，本年度の取組が昨年度までと大きく違うのは，教職大学院に所属する派遣された現職教員に対する「地域協働実習」の場として学校安全や防災教育に関する実習の場として位置付けたことである。4 月に実施された「トップセミナー」（右写真）では，県下の学校長が一堂に会し，学校危機管理の研修を行う場と言える。

ここに，本学教職大学院「経営力開発コース」の 5 名の現職教員が教育委員会との連携のもと，研修の組立や当日の運営等を学ぶことができた。つまり，本学に派遣された管理職候補者が，学校長とともに，危機管理の状況を他県の実態をもとに学んだり，現在，管理職にどのような内容の研修が求められ，教育委員会はどのように運営するのかを直接意識したりすることが可能となる。また，9 月に開催された「学校防災教育コーディネーター講習会Ⅰ」や「滋賀県子どもの安全確保に関する連絡協議会」等にも同様に出席し，「地域協働実習」の一環として取組を行ったことも付記する。



1 共同研究事業

本年度も、近江八幡市などにおいて、避難訓練や地域と連動した学校安全の取組について、その実証的な検証を行ない、その都度アドバイスをを行った。また、教員研修についても、教育委員会保健体育課と進めている。特に各学校レベルの実践においては、市教育委員会との連絡の下、地元の危機管理課や消防署、さらには地域の自治会やコミュニティセンターと連携した活動もこちらがアドバイスするだけでなく、地域の具体的な実態を学ぶ点で重要な意味があった。特に教職大学院で、「学校危機管理」や「学校安全」等を実施する中で、滋賀県の事例分析として取扱うことができたのは、本学にとってもプラスになったと考えられる。

その中でも特に近江八幡市の小学校での実践について、一例を挙げてみたい。滋賀県は平成 29 年度も文科省「防災教育を中心とした学校安全総合支援事業」に採択されている。近江八幡市は県のこの事業の一環として取り組んでいる。



写真は研究協力校での取組を示したものである。具体的に、平成 29 年 1 月に実施された防災教育と避難訓練について触れたい。

写真（左上）は、1 月 17 日（阪神淡路大震災 23 年目）に合わせて、避難訓練等が実施された八幡小学校での様子である。阪神淡路大震災を知らない子供達にこの震災を風化させず、伝えようとしている学校長の姿勢は防災教育にとっても重要である。写真（右上）は、1 月 19 日に桐原小学校で実施された保護者、地域との防災訓練の一コマである。この日は地域の参加者も考え、土曜日に防災教育を取扱った授業やコミュニティセンターの協力者が関わった取組が行われた。

4. 今後に向けて

滋賀県においても防災教育を含む学校安全、学校危機管理は喫緊の課題である。しかし、学校、教育行政、地域と一体となった取組は、今後ますます重要視され、本学にとっても連携の意義は大きい。

特に、平成 29 年 4 月からスタートした教職大学院のカリキュラムにおいても、「学校安全・防災教育」等の授業は今日重要な意味を持っている。本学教職大学院設置を機会に、今後一層、滋賀県の教育行政や学校と連動した活動・実践等にも取り組む予定である。

（藤岡 達也）

1-4) 情報教育に関する研究

1. 事業名および担当者

本事業は、滋賀県総合教育センターの「情報教育に関する研究：小学校におけるプログラミング教育のあり方～プログラミング的思考を育む授業パッケージの開発を通して～」の研究事業において、理論的・実践的な側面より専門的知識等の提供や指導助言を行うに当たり、松原研究室との共同研究として位置づけられるものである。

その組織と役割分担との関係は、表1の通りである。なお、松原は、滋賀県総合教育センターの「情報教育に関する研究」におけるトータルアドバイザーである。

表1 共同研究事業の組織と役割分担

協同研究事業の組織	役割分担
松原研究室 (滋賀大学教育学部)	担当者：松原伸一 (滋賀県総合教育センター、トータルアドバイザー) ・ 小学校におけるプログラミング教育に関する知識・技術の提供 ・ 授業パッケージの開発における ICT 活用に関する指導助言 ・ その他、本事業のトータルアドバイス
情報教育に関する研究 (滋賀県総合教育センター)	担 当 者：野阪健太郎（滋賀県総合教育センター 研究員） 専門委員：松宮孝明（大津市立下坂本小学校 校長） 皆川健人（滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課指導主事） 研究委員：永井太一（大津市立堅田小学校 教諭） 竹端 淳（草津市立老上西小学校 教諭） 見館健太郎（豊郷町立日栄小学校 教諭） 他に同センターの関係者数名 ・ 本研究事業の企画・推進・評価を行う。

2. 事業の目的

小学校学習指導要領（平成 29 年 3 月公示）第 1 章総則には、情報活用能力の育成を図るために「児童がプログラミングを体験しながら、コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身に付けさせる学習活動」を各教科等の特質に応じて計画的に実施することが記されている。また、小学校学習指導要領解説総則編（平成 29 年 6 月）には、「教科等における学習上の必要性や学習内容と関連付けながら計画的にかつ無理なく確実に実施されるものであることに留意する必要があることを踏まえ、小学校においては、教育課程全体を見渡し、プログラミングを実施する単元を位置付けていく学年や教科を決定する必要がある」を記されている。

そこで、本事業では、プログラミングの考え方に触れながら進める教科の学習と、プログラミングを体験する活動を組み合わせた授業パッケージを開発・展開するとともに、小学校におけるプログラミング教育のあり方を示すことを目的としている。

1 共同研究事業

3. 事業の概要

本事業の概要は、研究協力校の3校（小学校中学年1校，小学校高学年2校）において、小学校におけるプログラミング教育のあり方について、具体的な視点で検討し、授業実践を踏まえて、プログラミング的思考を育む授業パッケージの開発を行うために本事業に関係して実施した項目は下記の通りである。

（1）小学校教育におけるプログラミング教育の意義について … [松原研究室]

松原研究室におけるこれまでの研究成果をもとに、既に蓄積した知識・情報を整理・分析し、授業展開と教材開発のための支援を行った。その主な内容は、次の通りである。

①小学校におけるプログラミング教育の意義について⁽¹⁾

②情報学・次世代教育としてあり方⁽²⁾

（2）「プログラミング的思考を育む学習パッケージ」の開発支援 … [松原研究室]

作成された教材を対象に、適宜、評価を行い、利用しやすい形態にするための支援を行った。その主な内容は、下記の通りである。

①プログラミング的思考を育む授業のあり方

②プログラミング的思考を育む授業内容の妥当性

③プログラミング的思考を育む授業方法の妥当性

④その他、プログラミング的思考の教育に関わる諸事項

（3）授業実践 … [滋賀県総合教育センター，専門委員，研究委員，協力校，松原研究室]

作成された教材は授業実践にて利用・活用され、評価を行った。詳細については、滋賀県総合教育センター紀要を参照されたい。

4. 今後に向けて

プログラミング教育が学校教育における全課程において重要な学習内容である。今後は、小学校での教育を拡張・深化させるとともに、中学校や高等学校におけるプログラミング教育とも連携しする必要がある。筆者は、情報学・次世代教育のあり方として、感性・理性・知性にリンクする情報メディア教育（プログラミング教育を含む）を提案し、さらなる発展を予定している⁽³⁾。

参考文献

- (1) 松原伸一：作曲とプログラミング：Score（楽譜）とCode（プログラム）～プログラミング教育ポリシーの拡張と深化～，情報学教育論考，第4号，pp.19-26，2018.
- (2) 松原伸一：情報学・次世代教育の新しい展開～情報学教育ポリシーの拡張と深化～，情報学教育研究，（通算13号），pp.17-24，2018.
- (3) 松原伸一：人間性を取り戻すためにICT活用を！～教育の新ルネサンス：感性・理性・知性の拡大と深化のために～，EEPニューズレター第9号，p.2，2018.

（松原 伸一）

1ー5) 理科プロジェクト研究

1. 事業名および担当者

事業名は、理科教育に関する実践的研究であり、担当者は以下のとおりである。

教育学部：藤岡達也（代表）

滋賀県総合教育センター：不破徹也（係長）、森井貴士（研修指導主事）、中島真奈美（研修指導主事）
堀道雄（研究員）

2. 事業の目的

今年度は、これまでの取組を超え、各校種を対象とした理科プロジェクトでなく、小学校から高等学校までを見据えた授業づくりを意図したものとする。つまり、県下の小・中・高校の教員を含めたプロジェクトチームをつくり、児童生徒の姿から「深い学び」の実現を目指す授業の開発とその実践、評価活動を中心におく。

方法としては、従来と同様に指導案に基づいた実践授業を複数回行なう。特に新学習指導要領のねらいを踏まえた授業の改善を追究し、それらを小学校から高等学校までの学校の理科教員で共有する。その成果は、教育センター及び関係教員・所属学校だけにとどまらず、広く県内外に紹介し、本県の理科教育の振興につながるように配慮する。

3. 事業の概要

滋賀県総合教育センター及び県内の小学校から高等学校において、同研究員及び教育センター研修指導主事等と新学習指導要領も含め、今日求められる資質・能力育成観点から理科教育の在り方の検討を進めてきた。つまり、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」を育成するために「主体的、対話的で深い学び」な学習方法となる指導計画を作成し、単元を選定し、実践授業を開発する。プロジェクトに参加した教員自身が、期待される力の育成に取り組んだと言える。



1 共同研究事業

研究成果は公開授業、教育センターでの研究発表大会での報告、論文として公刊、ホームページでの掲載を行うなど、広く批評を仰ぐ。実践授業では、主体的・対話的な活動を行なう場面を効果的に設計し、児童生徒による深い学びの実現を目指す取組を実施する。

以上、小学校から高等学校の各学校において、プロジェクトメンバーが、児童生徒の「主体的、対話的で深い学び」となる授業を実施し、その前後に滋賀県総合教育センターでPDCAを繰り返す。また、文科省など、新学習指導要領に携わった有識者から、改訂のねらいの講義を受け、質疑応答を行った。



＜プロジェクト成果を取り入れた県下への還元について＞

現学習指導要領から、理科においては、4領域を踏まえた小学校～高等学校の系統性が明確になった。しかし、実際の教育現場では、小学校・中学校の義務教育段階に限っても、内容の連続性を意識した取組は少ない。確かに小学校において、学年や単元を考えると理科指導は容易ではない。しかし、一度系統的に教材研究を行うと、むしろその後の取組の負担は軽くなる。

また、平成29年度では、本学の教職大学院科目「地域協働実習Ⅱ」において、総合教育センターのスタッフと研修運営に携わった。今後の教職大学院の取組に示唆を与えられるだろう。



4. 今後に向けて

新学習指導要領に則った授業研究が期待されている。しかし、かつてと違い、学習指導要領の改訂時、10年ごとに、授業改善が考えられていたのが、現在では毎年のように授業改善が期待されている。また、取組の結果も求められている。特に滋賀県では「全国学力・学習状況調査」における理科の成績には厳しいものがある。平成30年度の結果を踏まえて、新たな取組も余儀なくされることが考えられる。

(藤岡 達也)

1－6) 理科教育に関する研究

1. 事業名および担当者

事業名：理科教育に関する研究

「科学的に探究するために必要な資質・能力の育成を目指した中学校理科の授業改善」

－「レディネス学習」を取り入れた科学的に探究する学習活動の充実－

担当者：滋賀県総合教育センター 研究員 阿武 朗広、滋賀大学教育学部 加納 圭

2. 事業の目的

本研究では、科学的に探究する学習活動のさらなる充実を図るために、生徒の実態に応じた「レディネス学習」を取り入れ、単元計画を開発する。生徒は、「レディネス学習」に取り組むことにより、自然の事物・現象への気付きから、問題を見だし課題を設定したり、これまでに身に付けた資質・能力を活用して見通しをもって検証できる仮説を設定したりすることができるようになる。このように、「レディネス学習」を取り入れることで探究の過程の導入部を充実させることにより、生徒が探究の過程全体を主体的に遂行することができ、科学的に探究するために必要な資質・能力の育成につなげる。

3. 事業の概要

(1) 本研究で重点とした科学的に探究するための資質・能力

理科においては、課題の把握（発見）・課題の探究（追究）・課題の解決という探究の過程を通じた学習活動を行い、それぞれの過程において、資質・能力が育成されるよう指導の改善を図ることが必要である。

平成 27 年度全国学力・学習状況調査【中学校】理科では、自然の事物・現象から問題を見だし、それを基に適切な課題を設定することや、課題を解決するために、予想や仮説を立ててそれを検証する実験を計画することが課題となっていた。そのような背景から、本研究では、「自然事象に対する気付きから、問題を見だし課題を設定すること」や、「これまでに身に付けた資質・能力を活用して、見通しをもって検証できる仮説を設定すること」に重点をおいて研究を進める。探究の過程の導入部を「レディネス学習」によって充実させることにより、生徒自身が、探究の過程全体を主体的に遂行するようになると考えた。

(2) 「レディネス学習」とは

本研究では、「レディネス学習」を、生徒の主体的な学びを支え、より充実させるために必要な準備を整える学習と定義した。「レディネス学習」により指導者は、生徒の実態として、「既習事項をどの程度習得しているか」や「自然の事物・現象に対してどのような素朴概念をもっているか」等を把握することができる。また、生徒にとっては、学びに向けての興味・関心あるいは動機付けを行うもので、学習前にもっている自然の事物・現象に対する素朴概念を自ら把握し、課題設定につなげることや、既習事項を想起し、仮説の設定や検証計画の立案につなげることを目指す。

(3) 「レディネス学習」の効果

本研究で用いる「レディネス学習」として、最初に「授業前に考えてみよう」シートを作成した。家庭学習として取り組む「授業前に考えてみよう」シートは、自然事象と出会うきっかけをつくるものであり、その中で得た気付きから、生徒の興味・関心や疑問を引き出したり、自己の考えを形成したりすることができた

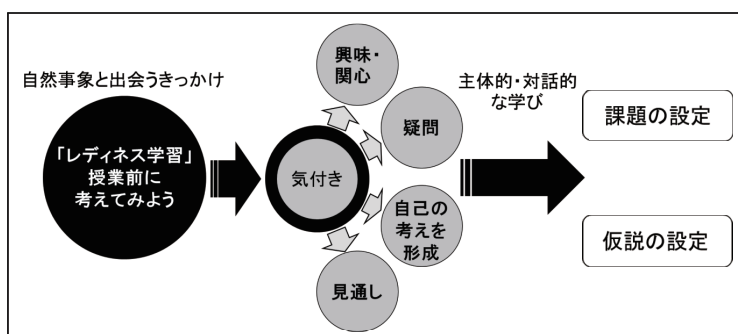


図1 「授業前に考えてみよう」シートのイメージ

(図1)。自己の考えを形成することは、意見交換や議論を通して、より妥当なものにしたり、広げ深めたりする「対話的な学び」を充実させることにつながった。さらに、考えや疑問を共有する中で、生徒が主体的に課題を設定することや、課題の解決に向けて見通しをもって検証できる仮説を設定することを目指した。

次に、単元を通した学びのつながりや科学的に探究する学習過程の連続性を意識し、「授業後に考えてみよう」シートを作成した。このシートは、授業の終末に実施し、授業の前後における自己の考えを比較し、学びを振り返ったり、学んだことをさらに深めたりするために活用するものである(図2)。これに取り組むことで、生徒自身が自己の学びや変容を自覚し、次の学びに主体的に取り組めるようになった。また、探究の過程の中で生まれた新たな気付きから問題を見いだすことで、次の課題設定につながることができ、指導者は、このシートの取組を継続的に実施することで、授業における生徒の変容を適切に評価し、その後の指導に生かすことができた。

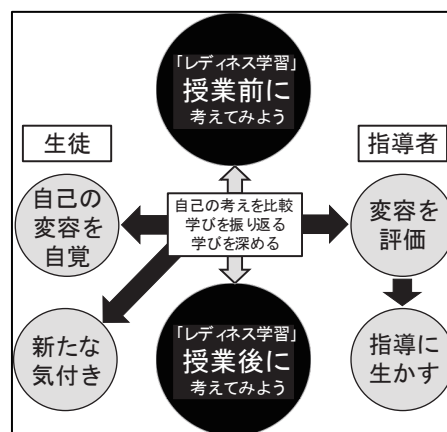


図2 「授業後に考えてみよう」シートのイメージ

4. 今後に向けて

「レディネス学習」を取り入れ、探究の過程の導入部を充実させたことで、「自然事象に対する気付きから、問題を見いだし課題を設定すること」や、「見通しをもって検証できる仮説を設定すること」ができ、探究の過程全体を主体的に遂行する生徒の姿が見られた。また、「レディネス学習」を取り入れることで、生徒の興味・関心や疑問を引き出し、自己の考えを形成することができた。自己の考えを形成することにより、意見交換や議論を活発にし、学習活動を充実させることができ、科学的に探究するために必要な資質・能力の育成につながったと考える。今後、さらに「レディネス学習」の効果を高めるためには、生徒の実態に応じて、短時間で取り組めるもの、生徒の負担にならないもの、複数の考えが出てくるものとなるよう工夫をしていく必要がある。

(阿武 朗広・加納 圭)

1ー7) 授業改善で生み出す主体的な学び

1. 事業名および担当者

事業名は、「授業改善で生み出す主体的な学び」であり、担当者は次の通りである。

教育学部：長岡 由記

甲賀市教育研究所：太田千加子（課長補佐）

（連携先機関）

甲賀市立甲南第一小学校：福永佐栄子（校長）、甲賀市立希望ヶ丘小学校：青木秀樹（校長）

2. 事業の目的

本事業の目的は、国語科授業において、予習を活かし、児童主体の問題解決型の授業改善を進め、実証授業を通して「聞く・話す・書く」力を高める指導方法の工夫について検証することにある。

甲賀市立甲南第一小学校と甲賀市立希望ヶ丘小学校の2校は、甲賀市教育研究所指定事業（こうかの学び向上事業に係る授業研究会）により校内研究を進めている。両校は、これまで予習を活かし、国語科の学習において課題解決型の授業改善を図ること、予習と学習を結びつけた言語活動の充実を図ることを重点課題として研究に取り組んできた。これまでの両校の研究の成果を踏まえて、本事業では、予習をキーワードに実証授業を行うことで、児童主体の課題解決型の授業改善のための具体的な方法について追究する。

3. 事業の概要

各校において研究授業と授業検討会を行った。

【研究授業Ⅰ】 説明の仕方を考え「へんしんお米ブック」を作ろう

教材名：「すがたをかえる大豆」「食べ物のひみつを教えます」（光村図書，3年下）

（実施日）平成29年11月17日

（場所）甲賀市立甲南第一小学校

授業の概要

単元の目標は、「米作りボランティアの方々にお米のひみつを紹介するために、段落構成を工夫してカードを作ることができる」である。単元は全13時間で、本時は6時間目の授業である。本時の目標は「事例の順には意図があることを読み取り、相手に分かりやすい順番を構成することができる」であり、予習課題は「大豆をおいしく食べる工夫は、どのような順番になっているか考えよう」である。授業は、まず教材文の説明の順序とその理由について考え、次にアンパンマンの登場人物を例に挙げて自分ならどの順序で説明するのかを考えるという内容であった。

授業のめあては「分かりやすくせつ明するための順番を考えよう」であり、授業の前半では、予習課題である教材文の順序についての考えを発表しあい、順序を決める観点を見出していくという内容であった。順序の理由として出てきた意見は、「（目で見て大豆だと）分かりやすい順」「簡単に作れる順」「作るのに時間がかからない順」などである。

これらの理由を考えて交流することで、分かりやすく説明するためには、説明する順序を決める観点があるということを理解する授業展開となった。後半のアンパンマンの登場人物を並べるという活動では、「登場する回数の多い順」「主役のアンパンマンと関係の深い順」「味方と敵」などの順序で並べるという意見が出ており、分かりやすく伝えるためには何を伝えたいかによって観点を定めていく必要があることに気付くような展開となっていた。

他者と交流することによって、予習段階で自分が考えてきた理由では説明しきれないと気付いたときに葛藤が生まれ、さらに新たな観点とその理由を見つけ出そうとする姿勢が見られた。本授業では、複数の理由が考えられるような事例を活用し、各自の意見を表現する場を設定していたことにより、問題を追究し、さらに新たな発見をもたらすような授業展開となっていた。

【研究授業Ⅱ】 美術評論家になろう～きぼ小美術館～

教材名：『鳥獣戯画』を読む」「この絵、私はこう見る」（光村図書、6年）

（実施日）平成 29 年 11 月 24 日

（場所）甲賀市立希望ヶ丘小学校

授業の概要

単元の目標は、以下の二点である。

○文章から要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえたりして、筆者のものの見方を捉えながら読み、自分のものの見方を広げたり深めたりすることができる。

○絵から読み取ったことや自分の感じたことを整理し、絵を見る人に伝わるように表現の効果を工夫して書くことができる。

単元は全 11 時間で、本時は 8 時間目の授業である。本時の目標は「自分が読み取ったり感じたりしたことを表現や構成を工夫して書くことができる」であり、予習課題は「前時のワークシートより、解説文に使いたいものを選んで、短冊プリントに書いてくる」である。

授業のめあては、「読み取ったことや感じたことを表現や構成を工夫して書こう」であり、予習で書いてきた「解説文に使いたい文」をグループで検討し、さらに表現を工夫して書き直すという学習内容であった。教室の壁面には「表現の工夫の仕方」をまとめたプリントが掲示されており、学習者はそれを見ながら考えていた。多くの表現方法が記されているため、学習者は様々な表現法を知ることができるとともに、自分や他者の考えた文にそれらを活用できるかどうかを吟味していた。他者が予習段階で考えてきた表現をより良いものにしていきたいという意欲が高く、表現の工夫の仕方を具体的に指摘できる学習者も多かった。授業では、改善前と改善後の文が一目で分かるような構成のワークシートが準備されており、学習者が考えやすい工夫が盛り込まれていた。また、教科書以外の絵が複数用意されており、学習者が自分の気に入った作品を選択して解説文を書けるようになっていたことも、学習への意欲を高めることにつながっていた。

4. 今後に向けて

学習目標や児童の実態に応じた予習課題の設定を行うことと、予習で取り組んだことの発表にとどまるのではなく、新たな課題追究や発見に結びつくような授業づくりを継続して行う必要がある。

（長岡 由記）

1－8) 国語科における授業分析による授業改善

1. 事業名および担当者

事業名は、「国語科における授業分析による授業改善」であり、担当者は次の通りである。

教育学部：長岡 由記

甲賀市教育研究所：井ノ尾 功（所長）、村山雅彦（研究員）

2. 事業の目的

本事業は、国語科の学習において、学習者自らが課題意識をもって取り組み、確かな力を身に付けるとともに考える楽しさを味わえる授業デザインの方法を明らかにすることを目的とする。

昨年度は、学習者自らが課題を見つけて学習を展開させていく授業の在り方について検討を行ったが、学習が課題解決をする過程でさらに考えを深めたり、他者との意見交流を通して新たな発見をしたりするというような考えの深まりについての検討という点において課題が残った。学習者の考えの深まりを捉えるためには、学習者の言動を学習者個々の実態や学習目標と照らしながら丁寧に捉えていく必要がある。そのため、本研究では、学習者の考えの深まりを捉えること、また考えが深まるような授業作りを行うことを念頭に置きながら教材研究や授業中の発言分析を行い、学習者の考えの深まりについて検討するとともに、考えの深まりをもたらすような授業実現のための方法を見出すことを目的とする。

3. 事業の概要

○学習指導案検討・授業検討会

第1回（4月20日）：研究目的・内容の確認

第2回（7月21日）：授業検討会・改善の方向性

第3回（8月18日）：学習指導案の検討

第4回（1月26日）：研究のまとめ

○授業研究 ※全て5年生を対象とした授業である。

第1回：6月16日、第2回：6月23日、第3回：7月7日、第4回：10月24日（研究授業Ⅰ）

第5回：10月27日（研究授業Ⅱ）、第6回：11月10日（研究授業Ⅲ）

【事業の実際】

研究授業Ⅰ：人物の生き方を学ぼう（教材名「百年後のふるさとを守る」光村図書）

本時の目標は、「儀兵衛の行動を支えた考え方についてまとめ、自分と重ねて考えることができる」であり、予習課題は「津波後の儀兵衛のことについて読み、心に一番残ったことに線を引こう」である。本授業は、「心に一番残った箇所とその理由」を全員が発表し、それをもとに儀兵衛の行動とその考えについて意見を交流し、最後に儀兵衛の行動や考えと自分の考えとを比較してまとめるという内容である。

考えを深めるための手立てとして、授業では、グループで話し合ったことをキーワード（例：勇気・未来・希望）でまとめて発表するという方法が取り入れられた。このキーワード化により、各グループの意見の共通点と相違点が捉えやすくなっただけでなく、キーワードが全て感情につながるものであることが導き出された。授業では「なぜ自分のお金を出してまで村を守りたかったのだろうか」という疑問について話し合いが行われ、その中で「村人になんとしても希望と気力を取り戻してほしいから」という意見が出た。その際、「気力」という語の意味を辞書で確認した上で、上記の場合の「気力」の意

味を考える機会を設定したことにより、「村を守ろうとする強い気持ち」についてさらに考えることへとつながった。授業の振り返りでは、題名に着目して「命をつなぐためという友だちの考えを聞いてすごくその言葉がいいなと思いました」という意見が出ており、予習段階で着目していた箇所だけでなく教材文の他の箇所や他者の発言と自分の考えとを結びつけて考える姿が見られた。

研究授業Ⅱ：目指せ！説明名人！！～説得力のある説明のしかたについて考え話し合おう～

(教材名「天気を予想する」光村図書)

本時の目標は、「筆者が説明に表やグラフを用いた意図を読み取り、それらの効果についての自分の考えをまとめることができる」であり、予習課題は「筆者が、教科書 138 頁の説明に表を用いた理由を考えるーあるときとないときの違い、グラフと表を比べたときー」である。授業は、予習で考えてきたことを交流して表の良さを確認した上で教科書 142 頁の教材文の内容にふさわしい資料を考え、説明に表やグラフを用いる効果について考えるという内容である。

考えを深めるための手立てとして、授業では「A：筆者が使ったグラフ」「B：筆者のグラフを再構成したグラフ」「C：数値を表にまとめたもの」の 3 枚のグラフ・表を提示して比較検討ができるようにする工夫が取り入れられた。また、資料の違いだけに着目するのではなく、使用する意図や効果について考えられるようにするために、授業は筆者の主張を捉えながら資料を検討することを軸に展開していった。複数の資料を比較する学習を行ったことにより、どのようなグラフや表であれば活用する効果があるのかという点についても学習者は言及していた。また、各自が選んだ表やグラフの特徴について交流することにより、他者の意見を聞いてより効果的なグラフや表を選ぶ姿も見られた。

研究授業Ⅲ：めざせベストセラー！人物の心の動きをとらえ、スピンオフ作品を作ろう！

(教材名「大造じいさんとがん」光村図書)

本時の目標は、「文章全体の『大造じいさんの心の動き』が分かる表現を比較したり結び付けたりしながら、『次の冬に大造じいさんが残雪を撃つのか、撃たないのか』を判断し、想像を広げながら読んでいる」であり、予習課題は「大造じいさんの『よろこび』と『しんけん』を見つけてくる」である。授業では、「なぜ大造じいさんは銃を下ろしたのか」という問いについて考えるための手立てとして、「銃を下ろしたその時間は長いのか短いのか」「『下ろしました』と『下ろしてしまいました』の違いは何か」「ねらったときにどんな気持ちだったか」「残雪を撃ち殺す気はあったのだろうか」という小さな問いについて考えることで大きな問いに迫っていく流れが取り入れられていた。また、考えたことを言語化する際の手がかりとして「国語用語カード」が壁面に掲示されていた。さらに、全文に番号を振ることで、個々の学習者がどの叙述をもとに自分の考えを述べているのかが明確になっていた。

授業では、予習課題である大造じいさんの「よろこび」と「しんけん」が分かる箇所を出し合うことによって、教材文全体の流れを踏まえながら大造じいさんの心の動きについて考えていた。

4. 今後に向けて

授業中の話し合いの場面では、多様な考えに触れて自分の考えを見つめ直す学習者の姿が見られた。今後も、授業時の発話記録をもとに授業者の思いと実際の授業内容とを照らし合わせながら授業検討を行うことによって、学習者の考えの深まりについて検討する取り組みを継続して行いたい。

(長岡 由記)

1－9) 算数・数学科における授業分析による授業改善

ー子どもたちの確かな力がつき、考える楽しさを味わえる授業作りー

1. 事業名および担当者

事業名は、「算数・数学科における授業分析による授業改善」であり、担当者は次の通りである。

教育学部：渡邊慶子

甲賀市教育研究所：井ノ尾功（所長）、早川和彦（課長補佐）、太田千加子（課長補佐）、
村山雅彦（研究員）

2. 事業の目的

子どもたちに確かな力が付き、且つ、彼らが考える楽しさを味わえる授業を作るために、教師は自身の授業を反省し改善し続けなくてはならない。本事業では、算数・数学科において、教師の授業分析の方法を模索することにより、具体的な授業改善の方法論を構築することを目的とした。

3. 事業の概要

本研究では、これまで、子どもたちに確かな力が付き、彼らが考える楽しさを味わえる授業を目指して、授業改善を行ってきた。その際に重要となるのが、教師たちが「授業をいかに分析するか」であった。そこで、これまでの本研究の成果を踏まえて、本事業では、教師集団による授業分析ならびに授業改善の方法を構築することをねらいとした。そのために、本年度前期では、子どもたちが面白さを感じて算数・数学に自ら取り組み、既習事項を活用しながら思考する授業展開の特徴を、これまでの成果を基に明らかにした。この授業展開の特徴を上述の暫定的な「授業改善の方法の指針」として、本年度後期では、それを実践して反省し、先の暫定的方法を修正した。本事業は、甲賀市と大学の連携によって、同市の授業研究体制を構築するための取組としても進められてきた。

(1) 研究推進委員会と授業研究会の開催

研究推進委員会は次の通り4回開催された：

第1回・・・研究の方向性の確認、第2・3回・・・1学期の授業分析と学習指導案の検討会、
第4回・・・研究の成果と課題分析

また、研究推進委員による研究授業は、8授業行われた（1学期に4回、2学期に4回）。

(2) 事業の方法

- ①本年度前期（1学期）に、授業者と研究所職員とで指導案検討を行い、授業研究会を4回行う。
- ②1学期の研究授業の授業分析を行い明らかになった成果と課題をふまえて、夏期休業中に、研究協力委員、専門委員1名、研究推進委員5名、研究所職員4名で2学期の指導案検討会を行う。
- ③本年度後期（2学期）に、授業研究会を4回行う。
- ④本年度末（3学期）に研究推進委員会で、研究の成果と課題分析を行う。

(3) 事業の実際

①土台作り

1学期の授業研究会での授業分析から子どもたちが考える楽しさを味わえるためには土台として次のような数学的な思考力や表現力をつけていく必要があることが分かった。

・言葉や数、式、図、表、グラフなどの相互の関連を理解し、それらを適切に用いて問題を解決したり、自分の考えを分かりやすく説明したり、互いに自分の考えを表現し伝え合ったりする

こと。

- ・根拠を明らかにし、筋道を立てて体系的に考えること。

②教師の言葉がけや働きかけ

授業展開の中で子どもが面白さを感じて算数・数学に自ら取り組み既習事項を活用しながら思考する場面というのは、子どもが考えを広げ深めている場面であることも授業分析から分かってきた。この場面では、子どもが考えを広げ深めることにつながる教師の言葉がけや働きかけが必要であることも分かった。

【導入段階】既習事項を活かす 既習事項とのずれに気付くことにつなげる

- ☆「前の問題とどこが違う」☆「これまでの学習で分かったことで使えそうなことはないかな」
- ☆「どこを解決すればいいのかな」

【展開1】理解をうながす

- ☆「○種類考えがあるよ」（交流時に分類しながら聞く）
- ☆「○○さんの言いたいことってどんなこと」☆「○○さんの考えに納得できたかな」

【展開2】分類・比較・まとめをさせる

- ☆「同じところ、ちがうところ、似ているところはどこかな」
- ☆「出てきたことをまとめるとどんなことが言えるかな」☆「分かったことは何かな」

【まとめ】【振り返り】次の学習につなげる・広げる

- ☆「こんな場合はどうかな」☆「どんな時に使えるかな」

上記①と②の1学期の研究授業の授業分析結果をふまえ、土台作りや子どもの考えを広げ深められるような授業展開の工夫を続けた上で行った2学期の研究授業では、次のような子どもの姿がみられた。

◎Cわたしは1マスが1 cm²だと分かるのでマスの考え方にしました。マスを数えれば、求められると思いました。(小4年：面積) →根拠を挙げて説明する姿

◎T：同じところ、似ているところがあるかな。

C：2つの考え方は、計算、わり算をしているところが似ています。

C：2つとも1人分や1枚に○人など1をもとに考えています。(小5年 単位量あたりの大きさ)

→出てきた考え方を比較したり、まとめたりする姿

◎（ふりかえりの場面で）代表選手を決めるなど、何かを決める時には、与えられた資料だけから判断するのではなく他の資料や試合などの条件も合わせて考えることが必要だ。(小6年 資料の調べ方)

→学んだことを次の学習に活かそうとする姿

4. 今後に向けて

課題を解決できたとき、「解ける楽しさ、分かる楽しさ」を子ども自身が感じることで次の学習への意欲となる。この意欲は、算数・数学の基礎的・基本的な知識・技能の背景にある「数学的な概念」を構築する過程によって保証される。子どもたちの基礎的・基本的な知識・技能の現状を把握し、彼らに確かな力と考える楽しさを体得させる授業を支えるのは、教師自身の数学的な思考力や構想力、そして表現力である。今後、そのような教師の力を評価し、さらなる向上を実現する取組について研究を続ける必要がある。

(太田 千加子・渡邊 慶子)

1-10) 言語活動を通してともに学び合う子どもの姿をめざして ー算数科を窓口にして自分の考えを表現したくなる授業づくりー

1. 事業名および担当者

事業名は、算数科における自分の考えを表現したくなる授業づくりであり、担当者は次のとおりである。

教育学部：渡邊慶子

甲南中部小学校：小西喜朗（校長）、西谷 淳（教頭）、上杉伸彦（教諭）

2. 事業の目的

本研究では、算数科において「友達の考えを聞き、自分の考えを表現し、ともに学び合う児童を育成したい」と考えている。そのために、これまで、児童たちが自分の考えを明確にもって授業へ臨む習慣を「予習（家庭学習）」を通して育んできた。本事業では、「予習」への取り組み、授業での「思考」、「学び合い」、そして「振り返り」を一連の学習活動とし、児童たちの確かな学力の獲得を促す授業づくりの特徴を「言語活動」に焦点を当てて明らかにすることを目的とした。そのために、本事業では、先述の学習活動が実現できる授業を計画して、その授業を授業研究会の場で「児童たちと教師の言語活動」に焦点を当てて評価した。

3. 事業の概要

本事業は、全9回に及ぶ授業研究会の実施により遂行された。

(1) 第1回研究会(4月19日)：算数科において自ら考え表現し学び合う子どもの姿を明確にするとともに、予習を活かし、評価の計画に基づいて単元を構成し、指導力の向上と子どもの学力の相互作用を見ていくことを、研究目的達成のための取組内容とした。

(2) 第2回研究会(5月24日)：研究授業1年「いくつといくつ」の授業研究会を行った。課題に合わせたヒントカードがあり、つまずきの見られる児童もそれを使って自分の考えを表現することができた。また、ペア学習を取り入れると多くの児童が自分の考えを伝える場が確保できた。1学期でも学習時の「きまり」が定着しており、この学習規律も子どもの「表現したくなる」状況を作り出していた。

(3) 第3回研究会(6月19日)：研究授業5年「小数で割る計算を考えよう」の授業研究会を行った。教師は、「予習」によって家庭で準備された児童の疑問や「困りごと」をもとにして「本時のめあて」とした。また、ホワイトボードの使用は、限られたスペースで自分の考えをまとめる力や児童どうしで考えを整理して伝え合う力の育成に有効であった。これらから、言語活動の充実には、「児童が自分の考えを書く活動」が重要であると思われる。

(4) 第4回研究会(9月27日)：研究授業6年「速さ」の授業研究会を行った。学習指導の基本的な流れ「め・じ・と・ま・よ（めあて / 自分で考える / 友達と考える / まとめ / 「予習」の問題）」が定着した児童と教師は、見通しをもって学習・指導を進めていた。教師は「予習」によって得られる児童のアイディアや理解の状態を把握しており、それによって意図的に児童を指名したり、児童の多様なアイディアを引



1 共同研究事業

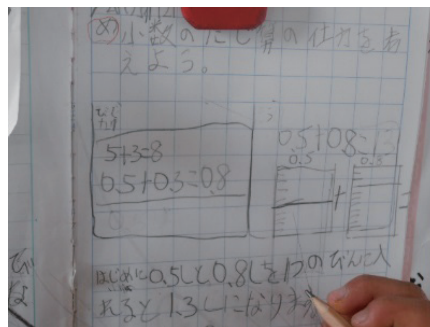
き出したりした。このような多様な児童のアイデアを授業で取り扱う際、教師は児童の説明の曖昧な点に注意を払い、「式中にみられる数値が何を表しているのか」等の発問によって、その曖昧さを童たちに常に意識させる必要があることを学んだ。

(5) 第5回研究会(10月18日): 研究授業4年「式と計算」の授業研究会を行った。教師は、ある児童の発言が他の児童に理解されていないと感じた時点で、発問によってその児童が言いたいことを別の表現で言い換えさせていた。「書く活動」の充実に関係して、本時では電子黒板を使用した。児童が書いたものを大きく見やすく映せるという「提示機能」は多様な児童のアイデアを共有するのに有効に機能した。一方、児童のノートへ反映しにくい点や限られたアイデアしか扱うことが出来ない点で課題も残された。

(6) 第6回研究会(11月10日): 研究授業2年「かけ算」の授業研究会を行った。これまでの学習の足跡を教室に掲示することによって、学習の流れが見てわかり、本時の学習に既習の内容を生かすことができた。既習の内容を確認しながら説明できたために、児童たちは、記憶や用語使用に対する不安を排除でき、生き生きと自分のアイデアを発表していた。

(7) 第7回研究会(11月20日): 研究授業3年「小数」の授業研究会

を行った。「予習」の段階で、児童たちは絵図に加えて、言葉を書いている子が多い教材であった。本時では、「予習」の取り組みを通して、児童たちの多くが、2学期半ばにして、自分の考えを言語化できるようになってきたことが確認できた。このとき、本時中の「友達と考える」場面では、図や数直線を指し示しながら相手にわかってもらおうと自分のアイデアを説明する児童の姿が見られた。一方で、「小数点をどこに付けるか」という「数学的な表現とその意義」に関しては、課題が残された。教師は、「0.1のいくつ分」ということが鍵となるという「授業の中で児童たちに見いださせたいこと」を明確にしておく大切さを実感した。



(8) 第8回研究会(1月29日): 研究授業特別支援学級生活単元・自立活動学習「えんぴつ屋さんをしよう」の授業研究会を行った。本時では、各児童の「めあて」をそれぞれに黒板に掲示することで、折に触れめあてに立ち戻り、活動を進めることができた。本時では、児童に気付かせて活動させることと、写真の活用、色分け等でより具体的な視覚支援が大切であった。



(9) 第9回研究会(2月5日): 今年度の研究の成果と課題をまとめ、次年度の研究について話し合った。また、今年度の研究の成果物として研究紀要を作成した。

4. 今後に向けて

反省的なサイクルとなる複数回の授業実践と授業研究会を通して、自分の考えを表現したくなる授業づくりの研究を深めることができた。特に、「学び合い」を深める表現活動について、「児童が自分のアイデアをかく活動」を重視したり、教室掲示などによって「既習事項と本時の学習の関係を意識」させたりすることが、より良い言語活動に通じていたことが明らかになった。今後は、「話す」「聞く」活動が算数科授業における言語活動に及ぼす影響を明らかにしたい。

(上杉 伸彦・渡邊 慶子)

1-11) 「私らって意外とやるやん」と自分に気づくことを目指して ～仲間とともにいろいろな人と繋がる経験を通して～

1. 事業名および担当者

「私らって意外とやるやん」と自分に気づくことをめざして

～仲間とともにいろいろな人と繋がる経験を通して～

担当者 滋賀大学教育学部附属特別支援学校 若林千春 福谷芳恵 成田豊

大津市立唐崎幼稚園 村上 淳子 鈴木 愛

2. 事業の目的

自閉症スペクトラム児に自己肯定感を育むため、地域協働の視点で地域の幼稚園児とかかわる中で、「私らって意外とやるやん」と感じられる中学部生徒の姿を目指す。地域とかかわる中でこそ得られる相互の学びの深まりと、教育的支援の方法を探り、検証する。

3. 事業の概要

研究経過

滋賀大学教育学部附属特別支援学校中学部では、「自閉症スペクトラム児にとっても、集団への安心感が自己肯定感を育むための大切な要素になる」という近年の実践研究成果を踏まえ、安心できる集団を校内だけではなく地域の様々な住民との関わりへ広げること、その経験を通して「自己理解」をさらに深めることを目的とし、実践研究を継続・展開してきた。生徒に「私らって意外とやるやん」と自己肯定的な理解が芽生え、自信を積み上げていくことは、学部目標に掲げる「社会人として生活する基礎的能力を養う」ことや、「仲間とともに生き生きと取り組める」ことを具現化するものである。

本報告では、幼稚園交流を中心に取り上げるが、この取り組みが単体として意義ある取り組みにできたわけではない。日々の仲間関係や・集団作り、地域との関わりを日常の学習活動と連動させ、必然性と一貫性のある取り組みとして展開してきたことが前提となっている。

このような経過を踏まえて今年度は、①新しく迎えた新入生とともに、自分たちの学校の地域を改めて知る（唐崎タウンウォーク）活動を通して仲間のことも互いに知り合うこと、②日頃の学習で取り組んでいる作業製品を媒介にして地域と交流し、地域の方に喜んでいただける実感により、日々の活動の価値に気づき直すこと、③異年齢との交流～近隣の幼稚園交流～において、どのようにしたら園児が楽しんでくれるかを、自分の役割を意識し仲間と協力して取り組む中で実感することの3つを計画して取り組んだ。

研究計画

1 学期 新しい仲間・・・唐崎タウンウォーク（町探検、工場や店舗の見学、公園でみんな遊び）

作業製品交流・・・近隣の公共施設や店舗に作業学習で製作した製品を届ける

2 学期 運動会交流・・・唐崎幼稚園児による中学部運動会練習の見学

スマイル広場・・・遊びの広場へ唐崎幼稚園 5 歳児の招待

遊びの広場「スマイル広場」に向けての相談・準備・練習

遊びの広場「スマイル広場」での交流、遊びの店の運営

3 学期 中学部フェスティバルリハーサル・・・中学部生徒による劇発表と唐崎幼稚園 5 歳児による

見学と感想による交流

生徒 A の姿から見てきたこと

生徒 A は、自分から集団活動に積極的に参加することは少ない。しかし 4 月に新しい仲間と取り組



写真1 唐崎タウンウォーク

んだ唐崎タウンウォーク（写真1）では、グループの仲間と町探検を楽しんだ。今年から新しく取り組んだ陶工の作業学習では、指示や例示を見て、皿や小鉢などを製作した（写真2）。

製品届けの役割分担の相談の際には、地域の

施設に届ける代表に立候補した。「作業の時間に皿を作りました。使ってください。」と練習した通りに言葉を添えて手渡すことはできた。しかし、そこに自分の思いを込めることはできず、言われたことをこなしたにすぎなかった。手渡した製品が実際に使ってもらえる場面を直接目にすることもできず、ただ求められたことをしただけの活動に止まった（写真3）。



写真2 陶工作業



写真3 製品届け



写真4 鬼ごっこ

7月には近隣の公園で、生徒の相談でみんな遊びを計画して楽しんだ（写真4）。手にうちわを持つ人が鬼ごっこの鬼になることで、遊びの意味がAにもわかりやすくなった。同時に他の生徒にも関係性がわかりやすくなり、鬼ごっこの遊びそのものを一緒に楽しめた。その面白さが、Aの表情にも体の動きにも、また友達との距離感や関係性にも、心地よい変化をもたらした。

9月には、運動会の練習見学を皮切りに、唐崎幼稚園5歳児との交流が始まった。11月、スマイル広場の取り組みでAは、安心して関われる4名のグループの中で、「サーキットがしたい」と発案した。それが仲間に認められて嬉しい気持ちの中で、箱に画用紙で仕切りを作り、ビー玉を転がすサーキット風の迷路を熱心に作った。また、園児にプレゼントするビー玉を入れる袋をガレージに見立て、得意の車の絵を、一心不乱に50個描き上げた。当日園児が訪れると、作業製品届けの際の無表情な姿ではなく、自分の思いのこもったビー玉（車の絵）を選ぶ園児や、自分のサーキットで遊ぶ園児の様子を、柔和で満足感に満ちた表情で、程よい距離感で優しく見守った（写真5）。



写真5 僕のサーキット

対人交流に困難さのあるAにも、自分の活動が集団の中に意味付き、思いが実現する喜びが感じられることで、人との関係をつくり、自己理解を深め、自信を育んでいく様子が見えてきた。

4. 今後に向けて

中学部生徒の内面の育ちの過程に焦点をあて、それを集団活動のなかで捉えることに取り組んできた。「何かができた」ということだけではなく、活動への向かい方、人やものとの関わり方、その際の視線や表情、姿勢やつぶやき等にも注意を払い、そこに込められた意味を教員間で語り合い確かめ合ってきた。中学部生徒は自分の言葉や活動を通して自分自身を振り返ること、友だちのいいところにも気づき合うこと、それを発表したり、聞き合ったりすることに時間をかけて、年間を通して取り組んできた。

交流した幼稚園の5歳児にとっても、中学生の運動会演技や劇発表を見て憧れを抱き、自分たちの活動のモデルにしたり、スマイル広場で印象に残った遊びを園に戻って再現したりすることへと発展した。楽しく交流できたとか、誉められてうれしいということだけではなく、思いをこめた活動の中で、互いに発見や感動があり、その共有体験に喜びや価値が感じられることによって、集団への安心感は深まり、その関係の深まりのなかでこそ自己肯定感は育まれていくことが確かめられた。

（若林 千晴・成田 豊）

1-12) 滋賀県における幼児の運動能力に関する研究(平成 29 年度)

1. 事業名および担当者

事業名は、「滋賀県における幼児の運動能力に関する研究(平成 29 年度)」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部：奥田援史 滋賀県教育委員会スポーツ健康課 指導主事 内藤康司

2. 事業の目的

滋賀県内の幼稚園・保育所・認定こども園の園児を対象として、幼児の運動能力について調査する。

3. 事業の概要

1) 実施した内容

①調査実施園及び幼児数

滋賀県内の幼稚園、保育所及び認定こども園の 125 園を実施園とした。測定対象者の園児は 4, 5 歳児クラスに属す、有効測定者数は 7, 599 人名である。

②調査内容： 幼児運動能力テスト

25m 走(秒)、立ち幅跳び(cm)、体支持持続時間(秒)、ボール投げ(m)、両足連続跳び越し(秒)、捕球(回)の 6 種目を実施した。運動能力の測定については、説明会の後、各園で実施した。なお、実施方法に関する DVD を配布し、適宜確認できるようにした。

2) 調査結果

①幼児運動能力テストにおける測定記録の結果について

幼児の運動能力テストの測定記録において、表 1 は男児の結果、表 2 は女児の結果である。昨年度の結果と比較すると、全体的に低下傾向にある。上昇傾向が見られたのは、男児では 4 歳児の 25M 走、ボール投げ、体支持時間、5 歳児では 25M 走である。女児では、4 歳児の両足連続跳び越しだけである(統計的な検討はしていない)。

②合計評定得点の段階別人数について

各測定項目の記録は性や年齢(誕生月)の影響を受けるので、森ら(2008)が用いた幼児の運動能力判定基準に基づいて評定得点に換算した。この評定得点は運動能力の高い方から相対的に 5 点～1 点と得点化したものである。そして、各測定項目の評定得点の和を総合評定得点として、運動能力の優れている方から A～E までランクづけがなされる。したがって、6 つの測定項目の評定得点の和である総合評定得点は 6 点～30 点の範囲となる。

この結果をみても、判定ランク D や E の割合が標準出現割合よりも多いと推察される。

3) 考察

滋賀県の幼児の運動能力は、依然として低水準で推移していると考えられる。幼児の運動能力向上のために必要な事項を以下にまとめる。

各園での取組みとしては、運動量が確保できる運動遊びプログラムを日々の保育の中に計画的に取り入れる必要がある。それに加えて、運動遊びを促す環境構成、運動意欲を高める支援も必要である。さらに、研修を通して運動遊びの指導における保育者の力量を高めることが期待される。

表1 幼児の運動能力テストの結果(男児)

	4歳児				5歳児			
	受験者数	平均値	標準偏差	平均得点	受験者数	平均値	標準偏差	平均得点
25m走(秒)	1,712	7.18	1.03	2.99	2,242	6.36	0.87	3.04
立ち幅跳び(cm)	1,712	90.20	18.85	2.92	2,244	106.70	19.22	2.87
ボール投げ(m)	1,710	5.10	2.10	2.67	2,243	7.20	2.88	2.76
体支持持続時間(秒)	1,714	25.60	22.31	2.87	2,244	43.40	31.13	2.84
両足連続跳び越し秒)	1,707	6.87	2.93	2.92	2,242	5.50	1.45	2.98
捕球(回)	1,710	4.40	2.83	2.87	2,245	6.90	2.63	2.88
総合得点	平均17.3 (SD=3.93)				平均17.4 (SD=4.01)			

表2 幼児の運動能力テストの結果(女児)

	4歳児				5歳児			
	受験者数	平均値	標準偏差	平均得点	受験者数	平均値	標準偏差	平均得点
25m走(秒)	1,564	7.41	0.89	2.98	2,139	6.50	0.81	2.99
立ち幅跳び(cm)	1,564	83.30	17.63	3.00	2,141	99.20	18.27	3.03
ボール投げ(m)	1,565	3.90	1.29	2.83	2,139	5.20	1.75	2.97
体支持持続時間(秒)	1,560	25.10	21.57	2.86	2,138	44.20	30.95	2.86
両足連続跳び越し秒)	1,557	6.83	2.32	2.93	2,140	5.66	2.35	2.97
捕球(回)	1,567	4.00	2.69	3.04	2,136	6.60	2.67	3.06
総合得点	平均17.6 (SD=3.72)				平均17.9 (SD=3.86)			

表3 合計評定点の段階別人数とその割合

	男児				女児			
	4歳児		5歳児		4歳児		5歳児	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)
A	98	5.8	125	5.6	84	5.4	159	7.4
B	381	22.5	578	26	414	26.8	572	26.7
C	503	29.7	618	27.8	441	28.5	657	30.8
D	507	30.0	627	28.2	466	30.2	563	26.3
E	202	12.0	276	12.4	140	9.1	188	8.8

4. 今後に向けて

各園における運動遊びの積極的な実施が必要である。また、家庭における運動遊び活動の啓発も大切である。

(奥田 援史)

1-13) 「声」と「言葉」そして「歌」…表現の可能性と充実を目指して

1. 事業名および担当者

「声」と「言葉」そして「歌」・・・表現の可能性と充実を目指して
渡邊 史（学部教員） 畑 稔彦（学部教員）

2. 事業の目的

教育現場を発信地とし、表現手段である「声」の役割の再認識と、積極的かつ効果的な活用およびその方法の提案を行う。

「声」そして「言葉」は、人間にとって汎用性の高いコミュニケーションツールである。しかし現代社会において、これらが有効に用いられているとは言えず、しかし一方で、近年「声」そして「言葉」に対する興味は高まっている。「声」「言葉」を最も高度に用いた芸術活動である「歌」をとおり、「歌唱」行為の充に至るステップを実地に経ることにより、対象者個々が自らの「表現」の可能性およびその効果を体感する。

教育現場においても「声」「言葉」のツールとしての使用頻度は高く、日々の生活だけでなく、児童生徒の心身発達にあたり重要視されるべきものである。まずは「声」「言葉」それ自体を、個々が意識的に用いようとするための気づき、その啓発を第一歩とし、さらには活用のための具体的な方法を提示・周知していく。この事業を体験した児童生徒が成長したときに、より豊かな自己表現が可能であるように、またさらには、彼らが母体となり、社会において適正に「声」「言葉」が用いられる未来…社会を構成する人材が豊かに表現を用い、それを受け止め、円滑なコミュニケーションが可能な環境…を切に望んで、当事業を計画した。

3. 事業の概要

小学校にて授業を計3回行い、歌唱曲を1曲仕上げる。その成果はひこね市文化プラザ主催にて行われる、ソプラノ歌手・渡邊史コンサートでの共演にて発表した。

事業の連携対象は、豊郷町立日栄小学校5年生（校長：藤谷 忍／担当教諭：岸邊知子）である。連携先学校は「どこでもいい」というわけではない。今回の場合、mustでクリアすべき条件が三つあった。「①小学校四年以上である ②人数の上限はステージに乗りきれ数 ③担当教員だけでなく学校単位での協力が得られる。」これらを最適な形で満たしたのが当該小学校であり、この連携小学校を選定するにあたっては、共同研究者である畑稔彦准教授の功績が大きい。畑准教授は滋賀県において長く教職にあり、県教育委員会の指導主事を経て本年より滋賀大学教育学部にて教鞭をとる、地域に根ざした教育界のエキスパートである。従ってホール周辺の学校現場の様子にも明るく、畑准教授のコネクションにより、今回は最適な学校を連携先としてエントリーすることができた。

授業は全3回。本番が平成29年9月18日であることから逆算し、第1回：7月13日（木）、第2回：8月31日（木）、第3回：9月15日（金）とした。通常授業は45分であるが、小学校からの厚意あるご提案として1回の指導時間枠に60分とっても学校は柔軟に対応できるとのお申し出をいただき、そのように設定した。

小学校での授業計画は以下である。

■第1回：a. 趣旨説明 b. 発声・発音の基礎トレーニング c. 朗読トレーニング読み込み d 詞の解釈について提案

■第2回：a. 声の音色について b. 詞の解釈共有 c. 発声・発音トレーニング d. 実践ステップ

■第3回：総復習

共演楽曲としては『見上げてごらん夜の星を』（詞：永六輔 曲：いずみたく）を選択した。歌詞とメロディ、双方ともに叙情深く、かつ音域も適当である。詞に使用されている語句はいずれも解りやく平易であるが、美しい詩情に富み、可能性に満ちた未来への広い展望を感じさせる。本番ステージでは、共演者として小学生たちと別にホール側選定の混声合唱団がエントリーされており、幅広い世代が「歌唱表現」をとおしてステージにて交流することになった。

結果として、対象者である小学生たちに、表現ツールとしての「声」「言葉」の重要性、それらを意識的に用いることの必要性、そのための方法は十分に伝えることができた。意識的に「使いこなす」までの域には至らなかったが、彼らは初めて、自分たちの表現方法に思い至った。

事業の詳細な内容・経過は、平成30年3月に発行予定の【パイディア vol.26】を参照されたい。

4. 今後に向けて

プロジェクトを終え、自身の持論である「表現力の意志的構築」についての実地検証を教育現場において行い、予想どおりの結果を得られたことは、筆者の研究の裏付けとして大きなサンプルとなった。このような事業プロジェクトを、研究者として今後も積極的に手掛けていきたい。

事業において連携・指導した児童たちは、筆者の発言趣旨・目的を理解し、さらにその意義や成果も受け止めることができていた。また授業の中で用いた朗読・歌唱表現の知識やテクニックについて、日栄小学校の岸邊教諭は「これは国語とか、道徳の授業でも使えることですね」と言われていたが、まさにそれが正解であると思う。

中央教育審議会初等中等教育分科会による平成16年4月以降の審議概要によれば、義務教育の目的に関する議論の中で『義務教育の目的とは、「人間力」を備えた市民となる基礎を提供すること。つまり、社会に生きる市民として、職業生活、市民生活、文化生活などを充実して過ごせるような力を育むこと」と言える。これは、「生きる力」として文部科学省が教育改革の中で提唱してきたことと軌を一にするもの。』『人間が人間として生涯にわたって生き抜く力を育成する基礎教育が義務教育の目的』等の意見が公表されている。つまり教育現場の目指すべき「教育」とは、それを経てヒトが「人」たり得る、その過程をこそ助長するものであり、「生きるための力」を効果的に育むものであるべきだろう。

ヒトはその種の特性から単体では生きられない。生存のために構築している集団＝社会の中で用いるコミュニケーション手段として実用性・汎用性が高いのは、前述したように、「声」「言葉」だ。歌唱とは「声」「言葉」をもっとも高度に用いた行為であり、その結果をより高次にしていったものが芸術性を帯び、「芸」とみなされていく。「高次の歌唱行為」を体験することで、人は自身の表現技術を工夫しつつ自在に使いこなすための努力をするようになるはずであり、豊かかつ自在な表現力はヒトが「人生を生き抜く」上で有効な「ツール」として用いられる可能性が高まるだろうと考える。今後も歌手として、研究者として、表現の可能性を求め、広く社会に周知・還元して行こうと、想いを新たにしている。

（渡邊 史）

1-14) 通級指導教室の子どもに対する協調運動面の指導に関する実践

1. 事業名および担当者

事業名は通級指導教室の子どもに対する協調運動面の指導に関する実践的研究である。担当者は以下のとおりである。

教職大学院：川島 民子○ 奥田 援史

公立小学校通級指導教室：太田 恵 掛田 みちる 小川 絹子

2. 事業の目的

不器用で、運動が苦手と言われる発達性協調運動障害の可能性をもった通級指導教室（等）の子どもを対象に、通級指導教室での学習活動について、実践を通して検討し、協調運動面を向上させる学習活動、指導内容・方法を明らかにする。

3. 事業の概要

通級指導教室の担当教員は、通級指導教室に通う児童に発達性協調運動障害の傾向のある児童が多いのではないかと感じており、そのような児童に対して、適切な学習活動に取り組みたいと考えている。

このようなニーズに対して、感覚統合の視点を取り入れながら実践的研究を行った。これまで地域で実践してきた活動プログラムの蓄積を基盤とした実践的研究を進める。教育課程に位置付けながら、様々な実態に応じたグループ指導における学習活動、指導内容・方法を計画的に実践した。

(1) 活動のねらい

- ・運動遊びを通して友だちと一緒に活動することの楽しさを味わうことができる
- ・いろいろな体の動きに挑戦して成功体験を積むことができる

(2) 活動概要

①活動形態：9月～3月（3月は予定）に月1回実施し、全7回実施した。

小学校体育館を活動場所として、15：30～16：30の時間で行った。

②活動内容：改善を進め、今年度到達した活動内容の指導略案を以下に示す。

第9回 運動遊びグループ指導略案

日 時 2月14日（水） 体育館 15：30～16：30

ねらい

- ・いろいろな体の動きに挑戦しよう
- ・友だちと協力して、活動しよう

学習の展開

学 習 活 動	指 導 の 留 意 点	担当・準備物
1. あいさつ	順番 1～7 ・めあての確認・予定の説明。	・めあて、予定カード ・子ども用名札 ・記録・メモ用紙
2. 3分間走	ねらい：体を温める、ペースを合わせる 2,3周ランニング →大股 →スキップ ※先生を抜かさない / コーンの外側を走る 音楽終了後、最後の一周を歩いてクールダウン。 ※ <u>一列、ライン上</u> に順番（1～7）に並ぶ。	・待機 / 集合場所（児童椅子9） ・CDデッキ ・CD ・ビニールテープ ・はさみ

3. ストレッチ(エアータオル) ～軸つくり運動～ ①背伸び ②前屈 ③後屈 ④屈伸 ⑤長座前屈 ⑥長座ひねり(左右) ⑦立位深呼吸 4. スクーターボード 段ボール箱倒し 2回 ・棒を握って乗り、タイミング良く手を離す  【個人練習コーナー】 はらばい乗り「足はピン」 1. 両手こぎ 2. 交互こぎ レスキュー隊 ・交互に手を伸ばしたぐりよせて進む。 けのび ・足の力で 【チャレンジタイム】 5. 後かたづけ 6. ふりかえり	足の位置にビニールテープ 担当 6(掛田) 7(小川) 2(太田) モデル(掛田) 「タオルはピン」の合言葉、カウント静止 体はまっすぐ「足はペタ」「腕はピーン」 屈伸「おしりをゆっくりおろそう」 ※足首が硬い子は、足を開く - 適切な大きさの段ボール箱を5～6個積んで、体の側部で体当たりして段ボールを崩す。 - コーンをジグザグに回って戻ってくる ※幅、コースに変化をつける。 【分離した動き】はらばい・交互こぎ ・交互に引くことで両手の協調を高める。 力を入れてロープを引く。  - 壁をけて足の力だけでどこまで進めるか。目安のラインにコーンを立てる。 進んだ距離のところにシールを貼って伸びの実感を持たせる。 - どの乗り方で発表するか決める。 ※発表場面を録画 - 使用したものは集めて一か所へ - がんばったことを、発表しよう。 ・次回予告	- スクーターボード5台 12m程度のロープ - 段ボール10～12個 - ほうき、モップの柄 →棒2本 - 三角コーン - ミニ三角コーン - i-Pad/ビデオカメラ - 写真カード - スピーチカード
--	---	---

③主な改善の観点（改善点は指導略案内に示す 例：長座前屈）

- ・どの児童も教師の動きを同じ方向から見られるように、児童は一行に並び、定位置化する。
- ・教師は常に同じ言葉を使用する（合い言葉、シンプルに、カウントかけ）
- ・児童が一つ一つの動きに意識を向けられるようにする。（足を開く位置に印を付ける。上肢のひねりの場合は長座姿勢で行う。）
- ・体幹が弱い児童が多いので「軸を作る」、左右の分離が難しい児童も多いので「分離しなければいけない活動に向かい両側の協調を高める」ことをねらいとした活動を取り入れる。
- ・児童が体を通して体の使い方を学べるようにするために、試行錯誤の時間を作る。

4. 今後に向けて

今年度月1回ではあるものの継続して取り組み、改善を重ねることで、体幹の弱さ、左右の動きの協調が難しい児童に対して、グループ活動の内容をいくつか見いだすことができた。来年度以降も継続すること、他のグループでも実践することができるとよいと考える。

(川島 民子)

1-15) 滋賀県内の技術科教員の自主的研究会と大学との連携によるものづくりの教材開発

1. 事業名および担当者

事業名：滋賀県内の技術科教員の自主的研究会と大学との連携によるものづくりの教材開発

滋賀大学教育学部：岳野公人

「滋賀の技術を語る会」代表 伊香立中学校教諭：光橋正人

2. 事業の目的

中学校の技術・家庭科技術分野（以下、技術科）は、各学校に教員1名配置の現状であるため、授業研究や教材研究は単独で行うことになる。県内の有志で創られた「滋賀の技術を語る会」は、この現状を顧み、教材開発や指導法の検討について研修会を開催している。そこで、本プロジェクトでは、大学との連携によって、滋賀県の技術科教育の質の向上を目指したものづくり教材の開発と指導法の検討を行うことに取り組む。また、滋賀県内の技術科の教員や教育学部に所属する学生が集まって交流することで情報を共有するとともに技術科教員としての資質、能力の向上を図る。

3. 事業の概要

本事業では複数名の技術科教育関係者が集い、技術科の特徴であるものづくり教材の開発について実践を踏まえて取り組んでいる。今回の事業では、技術科の4つ学習内容である“材料と加工に関する技術”、“エネルギー変換に関する技術”、“生物育成に関する技術”、及び“情報に関する技術”に関する教材の製作（制作）および情報交換が実施されている。また、実際に教員がものを製作する時間を利用して、問題意識や指導法についての意見交換や情報交換などを行う。年に8回程度の開催を予定し、本報告では、2018年1月13日に行った技術を語る会について報告を行う。実施時間は13時頃から17時頃までで、主に2つの活動を行った。

1つ目は、平成33年から実施される中学校学習指導要領の“情報に関する技術”の学習内容について新たな項目として追加された「ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミングによって解決する活動」についての議論であった。議論の焦点は「双方向性」をどう定義するのかや、「双方向性」とは具体的にどのような教材が当てはまるのかといったことであった。インターネットでの通信を行う必要があるという意見や入力を行ったときに出力が得られれば双方向性と言えるなど人によってさまざまな意見が出ていた。学習指導要領を参考にするべきではあるが解釈の仕方によって双方向性の定義が異なっており、実際の授業実施ために「ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミングによって解決する活動」を行うために議論を進めて行く必要がある。

2点目は、電子基板にLEDやICなどをはんだづけしてラジオキットを製作する活動であった。ラジオキットはラジオの他にスマートフォンの充電や手回し発電などの機能が備わっており、製品に附属している説明書を見ながら順番にはんだづけを行っていくと完成する。学生は授業以外ではんだづけをする機会が少なく、おそろおそろはんだづけ作業を実施していた。学生は、他の先生方にはんだごての当て方の助言を受け上達していき、無事に時間内にラジオを製作することができた。雑談もしながらの作業だったので比較的和やかな時間を過ごしていた（写真1、写真2）。



写真1 ラジオ制作の説明

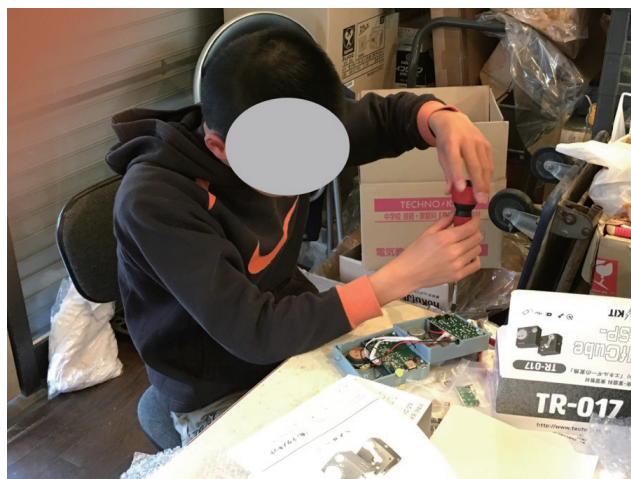


写真2 はんだ作業

4. 今後に向けて

実施された研修会全般を通じてものづくり教材を製作する参加者は、互いに相談し合い、疑問に思うことがあれば話し合うなど活発的な雰囲気に参加していた。その中に、学生に教職を希望する学生が参加することは、将来教員を目指す学生には良い刺激となった。また、これまでと同様に、参加者の中には自らが授業で使用している教材を持ち込む者や、技術科の教材製作に必要な道具・工具を持参する者がいた。そのため、学生にとっては、実際に授業で使用されている教材を製作する上で必要な知識や技能について学ぶ機会となった。参加した学生2名からも、「機会があればまた参加したい」、「働いている教員から生の話を聞くことができて良い経験となった」との意見が得られた。

平成33年より完全実施される学習指導要領にむけて、各方面で研究や研修が重ねられている。特に、本教科は、学校に所属する教員は1名であることが多い、そのため初任者でも教科主任として仕事をすることになる。そのため、本事業のように、教育現場の教員がベテランから若手、さらには学生が参加できる場所は非常に有意義なコミュニティである。今後も、この研究会と連携し地域の技術科を応援したい。

(岳野 公人)

1-16) ロボット教材を利用したプログラミング学習の教育効果に関する研究

1. 事業名および担当者

事業名：ロボット教材を利用したプログラミング学習の教育効果に関する研究

担当者：岳野公人

草津市立老上中学校：斎藤英樹（教諭），辻本長一（校長）

2. 事業の目的

草津市は、ICT 推進地域として全国に先駆けた取り組みを多く実施している。草津市老上中学校は、全国 282 校の 1 校として SoftBank の事業であるスクールチャレンジに採択され、AI やスマートロボットの学習環境を提供されることになった。そこで、本研究では、それらのロボット教材の指導法に着目し、ロボットとインターフェイスとなるタブレットのかつ方法方について、より良い学習機会となるよう授業実践を試みた。

3. 事業の概要

授業実践は、平成 30 年 1 月 11 日と 1 月 18 日に 2 回実施した。対象とした学年は中学校 3 年生であった。
1 回目授業実践：1 月 11 日について 3 年生の技術科の授業として約 30 名の生徒に授業を行った。場所は武道場で、授業内容は① Sphero（球体状のロボット）の演示、② Swift Playgrounds（パズルアプリケーション）の体験、③ ドローンを動かす体験・演示の主に 3 つの内容から構成されている。多くの生徒はプログラミングに関して初学者であり、プログラミングとはどのようなものか分かっていない。そこで、会場に引かれた線（10m 角）に沿って Sphero を動かすプログラムを事前に組み、導入の演示とした。その後解説のためにスライドで説明しながら Sphero を動かしたコードを示すことでプログラミングを使って Sphero を動かすことができることを理解させた。次にプログラミングを体験させるために 4 名に一つ iPad を配り、班で Swift Playgrounds を体験してもらった（写真 1）。Swift Playgrounds とは、プログラミング学習のためにキャラクターに動作を命令してパズル解くのアプリケーションである。Swift Playgrounds の使用方法を実演した後、各班で分かれて Swift Playgrounds を進めさせた。机間巡視をするなかで各班での話し合いの様子を確認することができた。20 分から 25 分ほど時間を取った後に iPad を片付けさせ、Swift Playgrounds のデバイスへの発展としてドローンを紹介した。そして Swift Playgrounds の体験の際に最も良く進んだ班から一名のみを選び出し、ドローンの Swift Playgrounds の「離陸と着陸」のステージを体験させ、実際に一台のドローンを動かした。

授業後に 1 時間ほど授業者と観察者において授業実施に関する反省会を実施した。良い点には、Swift Playgrounds の体験を生徒みんなで話しながら実施するということ意識して伝えることができた、および本時の目標を確認しながら説明することができた、という点が挙げられた。

修正すべき点には、スライドの文字数が多く読みにくい、Swift Playgrounds の説明をもっと丁寧に行った方がよい、ドローンの高さが低いいためもっとダイナミックに動かした方がよい、授業の結びで今回は何を学習することができたのかを話せた方がよい、授業のはじめに実施したアンケートで時間を多く取ってしまい、活動の時間を多く取れなかった、などの意見が挙げられた。

2 回目授業実践：

以上のこのことを踏まえて1月18日にはいくつか授業内容を修正した。主な修正点は、スライドの説明をより簡潔に、文字を大きくすることで読みやすさを重視した。ドローンの動きをその場で動かすのではなく平面の動きを取り入れた。アンケートを事前に実施して授業の時間を増やした。2回目は体育館で行い、全体の流れは1回目とほぼ同じで授業を実施した（写真2）。1回目の問題点は修正することができ、より良い授業に発展させることができた。しかし、Spheroやドローンの実演の際に上手くiPadと繋がらないというアクシデントが発生するという新たな問題点が表出した。事前の準備方法に問題がなかったか再度検討する必要がある。



写真1 Swift Playgrounds に取り組み



写真2 体育館での授業の様子

4. 今後に向けて

プログラミング学習が小学校において必修化されることになっていることから、全国的にプログラミング学習の教材開発や指導法の開発に注目が集まっている。今後は、小学校においてもロボット教材を用いたプログラミングの授業を実施し、中学校と同様にロボットやプログラミングへの関心がどのように変化したのかを調査する予定である。将来的には、小学校、中学校、高等学校を見通したプログラミング教育のカリキュラム開発を実施する予定である。

（岳野 公人）

1-17) グループワークを軸にしたコミュニケーション能力を育む授業の研究

1. 事業名および担当者

事業名は「グループワークを軸にしたコミュニケーション能力を育む授業の研究」で、担当者は以下の通りである。

徳永博紀（滋賀県立甲南高等学校教諭）（研究代表）

大嶋秀樹（大学担当）

辻美也子（滋賀県立草津東高等学校校長、滋賀県高等学校英語教育研究会会長）（研究支援・連携担当）

2. 事業の目的

滋賀県立甲南高等学校の生徒は、自尊心が低い者が多く、また、コミュニケーションに関しても消極的で受け身の生徒が多く見受けられる。卒業後は約6割の生徒が就職するため、社会に出るにあたってはコミュニケーション能力の育成が喫緊の課題である。

また、生徒の殆どが英語に苦手意識を持ったまま高校へ入学してくるのが現状であり、特に、習熟度別授業の下位クラスにおいては、アルファベットが正しく書けない者をはじめ、be動詞や一般動詞の区別や、動詞、名詞等の品詞がわからない者が半数以上を占める。そのような様子から、中学校では英語を積極的に学んできた経験が薄く、英語を使ってコミュニケーションをする楽しさを知らない生徒が殆どであると考えられる。

そのため、本研究ではグループワークを軸にした授業を行い、少しでもコミュニケーションの場を構築することを第一の目的とし、加えて、友人たちと協力をしながら英語に触れることで、英語に対する苦手意識を軽減させることを狙いとした。取り扱う内容も、既習事項を用いたものや、基本事項などできる限り選別して用い、加えて、オーセンティックな教材を提示するなど、取り組みやすくできるよう工夫した。

3. 事業の概要

(1) 研究対象

1年 コミュニケーション英語Ⅰ 習熟度別クラス 下位クラス

1組18名 2組16名 3組18名

(2) 取り組み内容

グループワークは、生徒を成績に応じてグループ間のパワーバランスが均等になるよう、教師がグループ設定をした。その後、班長および班員番号を決め、班員番号順でしか発表できないこととした。正答したグループにはポイントが入り、加えて発言しやすくするために、おいしい回答や、授業内容が深まる回答にも加点をした。ポイントは学期末の成績に反映されるとともに、2学期からは最下位のグループには「学校のためになること」か「英語に関すること」に留意した簡単な活動をするよう決めさせた。グループでの話し合いは随時行ってもよく、回答者はグループで相談した答えを発表することができる。質問は、本文読解に関しては、既習事項や調べてわかるもの既習事項を組み合わせればできるものを扱いグループでの話し合いが進むよう工夫をした。そして、本文読解の後はグループ音読を行った。個別またはペアで音読練習を行ったあと、グループでのスラッシュ音読を行い、発音の間違いはプラス1秒

追加にして読む早さ、正確さを競った。その後、本文のディクテーションを行い、音読の練習が活かされるように工夫した。ディクテーションもグループの平均点で順位をつけ、グループのポイントに加算されるようにした。

また、英語に対する興味を喚起するため、視聴覚教材を準備することにした。本校の教室には、暗幕やプロジェクター等の視聴覚設備が一切無いため、教室で手軽に使用できるモバイルプロジェクターを購入し、使用した。手持ちの携帯電話の画面をそのまま投影、視聴することができ、インターネット上の教材を容易く使用できた。今回は授業で、ワンガリ・マータイさんに関する内容を取り扱ったため、それに関連させる形でセヴァン・カリス・スズキさんの国連でのスピーチの映像を視聴することにした。

(3) 成果

授業中に答えられなければグループに迷惑がかかるため、各クラスにおいて宿題の達成率が上がった。また、グループ間の競争意識から、授業がヒートアップする場面が見られ、今まで手を上げて発表しなかった生徒が、他のグループメンバーに促されて発表する場面が多く見られるようになり、全員が積極的に授業に向かっている雰囲気を感じられるようになった。授業が進むにつれ、授業を先回りして辞書で調べる者や、積極的にグループを引っ張る者が散見されるようになった。

アンケートをとった結果「英語は好きである」の項目に対して肯定的な解答をしたものは35%であったが、「英語の授業を楽しめる」および「英語の授業はためになる」の項目に対して肯定的に答えたものが約70%であり、その理由はほぼ全てが「グループワークが楽しいから」ということであった。また、「グループワークが楽しい／良い」という項目に対して肯定的な解答をしたものは85%を超えた。その理由として主だったものが「わからないところを教えてもらえるから」であり、グループワークをすることによって安心感を持って授業に臨んでいることがわかった。

オーセンティックな教材については、約半数が「ある方が良い」と答え、生の英語に対する興味を持っている生徒が予想以上に多いことがわかった。一方で、「難しかった」と答える生徒もあり、生教材の使用によって英語学習のモチベーションを下げてしまっただけでは本末転倒であると感じ、教材選びには慎重になるべきであると感じた。また、教室で使用したところ、カーテンが薄く、日差しが出ると画面が白飛びしてしまい「映像が見にくかった」と解答した生徒も見られた。

4. 今後に向けて

授業の雰囲気に関しては、これまでにほぼ全員が挙手して発表する機会ができ、積極的な雰囲気を感じるようになったが、やはり普段からコミュニケーションが苦手で、授業にも積極的で無かった生徒は、グループワークを苦手と感じており、英語に関してもポジティブな解答を得られなかった。今後は、このような生徒の人間関係を把握し、よりグループにポジティブに関われるようなグループ作りが必要であると感じた。また、作成したグループの人間関係により、グループワークが上手く進まないところがあり、グループ作成の難しさも感じ、担任と確認をとりながらグループメンバーの相性を精査していく必要があると感じた。

(徳永 博紀・辻 美也子・大嶋 秀樹)

1-18) 通級指導教室における効果的な指導・支援のあり方について

1. 事業名および担当者

事業名は、「通級指導教室における効果的な指導・支援のあり方について」である。担当者は、教育学部：窪田知子、滋賀県 X 市 Y 小学校校長および Z 教諭（通級指導教室担当教員）である。なお、通級指導教室に通っている子どもの個人情報保護の観点から、本誌では連携先学校名、担当者氏名を伏せて報告することをご了承願いたい。

2. 事業の目的

通級による指導とは、通常の学級に在籍し、ほとんどの授業を通常の学級で受けながら、障害の状態に応じた特別な指導を週 1～8 単位時間、特別な指導の場で行うものを指す。言語障害や弱視、難聴、肢体不自由、病弱・虚弱のほか、自閉症や学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）の子どもが対象となる。文部科学省によれば、通常学級において学習・行動面でなんらかの困難を経験していると思われる児童生徒は約 6.5%にのぼると報告されている（文部科学省「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」2012 年）。そこで、特別支援教育の推進とともに、通級による指導は通常学級で学ぶ多様な子どもたちのニーズを受けとめる場の 1 つとしても注目され、その利用数は年々増加の一途をたどっている。現在、学齢児の約 1%が、この通級による指導を受けている。

滋賀県においても、この 10 年間で通級による指導を受けている児童生徒数は約 2 倍になり、1,398 名（小学校 1,226 名、中学校 172 名）が対象となっている（平成 29 年 5 月現在、表 1 参照）。それに伴い、教室数も倍増しているが、それでも通級指導教室が設置されている学校は、小学校で 20%弱、中学校で約 7%にとどまっており、他校の通級指導教室に通って指導を受けざるを得ない子どもが少なくない。

そのような状況の中で、本事業は、平成 29 年度に新しく開設された滋賀県内の通級指導教室において、子どもが学習上で経験しているつまずきや、学校生活の多くを過ごすことになる通常学級において経験している困難さに着目し、自校通級・他校通級を含めた効果的な指導および支援のあり方について検討することを目的としている。

表 1 通級による指導を受けている児童生徒数の推移

年度	児童生徒数		小・中合計	教室数
	小	中		
20	709	39	748	30
21	742	36	778	32
22	880	60	940	44
23	1,020	81	1,101	44
24	1,084	99	1,183	52
25	1,091	97	1,188	55
26	1,096	111	1,207	57
27	1,098	126	1,224	61
28	1,135	148	1,283	62
29	1,226	172	1,398	70

【出典】「滋賀の特別支援教育」（平成 29 年度）より

3. 事業の概要

(1) 共同研究のスタイル

通級指導担当教員である X 市立 Y 小学校の Z 教諭と数回にわたって検討会を行い、読み書きの結果を中心に、子どものつまずきや困り感の見立て、必要な支援の方向性などについて助言を行った。

1 共同研究事業

(2) 研究の進め方

①第1回検討会

平成29年8月25日（金）14:00～17:00、X市立Y小学校通級指導教室において、第1回目の検討会を行った。1年生を対象に1学期末に実施された読み書きチェックの結果をもとに、通級指導教室と連携して、校内でどのようにつまずきの改善を図るかについて検討した。

②第2回検討会

平成29年10月19日（木）16:00～18:00、X市内の公民館において、第2回目の検討会を行った。まず、第1回目で検討した1年生のうち、朝の学習の時間に個別に読み書きの指導を行うことになった5名の状況について確認した。また、2学期から通級指導教室を利用することになった児童の読み書きチェックの結果をもとに、通級でどのような指導を行っていくかを検討した。

③第3回検討会

平成29年12月12日（火）16:00～18:00、X市立Y小学校通級指導教室において、第3回目の検討会を行った。まず、通級指導教室を利用する児童が増えたことに伴い、それぞれの課題について整理した。また、朝学習での個別の取り組みの効果と今後の支援の方向性について検討した。

④第4回検討会

平成30年2月23日（金）午後、X市立Y小学校通級指導教室において、第4回目の検討会を行う予定である。

(3) 結果

Y小学校内に通級指導教室ができたことにより、これまで他校に赴いて通級による指導を受けていた児童にも校内で指導ができるようになった。それだけではなく、1年生を中心に、通常学級の中で読み書きに困難を経験している児童（たとえば、「む」と「ぬ」の読み間違い、特殊音節のつまずきなど）に対して、全校で取り組む「朝の学習」の時間を活用して早期に支援を開始することができた。Z教諭は、「自校だからこそ、困っている子どもに対してフットワーク軽く対応できた」と語っている。読み書きのつまずきは、その後の学習生活の中で大きな影響を及ぼす。そのため、低学年のうちに児童のつまずきに気づき、丁寧に指導を行うことは必要不可欠である。本研究では、通級による指導の効果的な指導・支援のあり方の1つの方向性として、通級指導教室内での指導だけではなく、校内の支援リソースとして通級担当者が積極的に介入することの意義と可能性を確認することができた。

4. 今後に向けて

本研究を通して、通級指導教室が校内の支援リソースの1つとして機能することの意義と可能性が見えてきた。しかしながら、増え続ける通級による指導へのニーズに対して、今日、その受け皿となる教室および担当者の数は圧倒的に足りていない。その中で、一人の通級担当者が、自校と他校の児童の指導を受け持ちながら、自校内の支援を必要とする児童への対応に割ける時間と労力にも限りがある。今後は、通常学級の授業や学校全体の取り組み（とくに低学年）の中で、どうすれば読み書きのつまずきを軽減することができるか、そのために通常学級や支援員との連携を視野に入れながら、通級指導教室の専門性をいかに生かすことができるかを模索していくことが課題である。

（窪田 知子）

1-19) 子どもの造形活動の観察と理解

1. 事業名および担当者

事業名は「子どもの造形活動の観察と理解」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部：世ノ一善生（代表者）、藤田昌宏、村田透

玉川小学校：片山善久（校長）、太田静香、河村佐知子（教諭、図工クラブ担任）

2. 事業の目的

保育や授業に留まらない広い意味での「美術教育」の実践・研究として、教育実習を終えた美術教育講座所属の3回生の学生を中心に、子どもを対象にした造形ワークショップを企画・実施し、学生・現場の教員・研究者がそれぞれの立場で子ども達の協働性や相互行為に触れ、美術教育を深く理解することを目的とする。

3. 事業の概要

草津クレアホールで開催の滋賀大学卒業制作展にリンクさせるかたちで、平成25年度造形ワークショップを企画実践し、翌26年度に玉川小学校との連携を絡ませて本プロジェクトを継続発展させて来た。その中でおよその流れが大学・小学校教員の間で確立され、それに参加する学生にも一定の理解を得るものとなってきた。その流れを継承し、今年度も玉川小学校の図画工作クラブ活動のサポートから子ども達の造形活動時の協働性や相互行為を観察し、造形ワークショップの企画実施に反映させた。

(1) 連携の経過

5月13日（土）10:30～11:30 片山善久校長先生と対談。前年度卒業制作展でのワークショップを報告し、今年度の連携を打診。

8月31日（木）14:00～15:30 小学校を藤田が訪問、河村先生と具体的なスケジュール等を打合せ。連携は、大学側が秋学期学部授業の「基礎造形2」（月曜4限3回生5人）で、小学校側は月曜の5時間目に不定期で年間15回開催されるクラブ活動「工作クラブ」（4～6年18人）と関わっていくこと、また例年12月であったワークショップ実施は、今年度は小学校の都合で1月とした。

11月6日（月）14:00～17:00 工作クラブの活動を学生5名と藤田が参観。太田先生指導の砂絵のキット教材を使った工作に取り組む子どもたちを学生がサポート。授業後、WSの試作をプレゼン、討議。

その後、大学での授業で協議し、参観で感じた子どもらの技量やニーズ、河村先生らからの助言をふまえ、①カラフルに彩色した段ボール箱を各自が選び、②モダンテクニックで学生が手作りした色紙で目鼻口などを切り出し、貼付けて自分の顔を造形。③できた箱の顔でトーテムポール状に天井まで積み上げる内容に決定。試作を重ね、クラブ活動に合わせ1時間のプログラムにまとめた。

1月15日（月）13:30～17:00 ワークショップ『カオカオの塔』実施

玉川小学校図工室（参加 児童4～6年生18名、大学生6名、大学教員2名、学校教諭2名）を黒板側の作業スペース、カラー段ボールと出会い、塔を積み上げるスペースを後側に確保。児童は3つのテーブルで学生がそれぞれに1人サポート。顔を作る活動では、「寂しがりやの顔」「じゃ私、驚いてる顔にする!」、切り出す作業の中ではヒゲや蝶ネクタイが出てきたり、変なカタチの切り紙に「目にしたらええやん!」と言った声が聞かれ、30分足らずの制作だったがユニークな顔が18個出来上がった。

1 共同研究事業

顔を積んでいく作業では、「こっちの顔を前にしたい!」「絶対倒れるで!」とドキドキしつつバランスをとりながら子どもと学生が協力して天井ぎりぎりまで積み上げ3本のカオカオの塔が完成した。



写真：(上段) 玉川小学校での活動風景 (下段) 卒業制作展での制作風景、カオカオの塔部分、会場風景

(2) 卒業制作展でのワークショップの記録展示および展開

1月17日(水) クレアホール学芸員の端さん、澤館長にワークショップの全容を伝え、玉小での作品展示を打診。年齢制限なし、随時参加自由でワークショップを予定し、①玉川小学校での記録映像及び作品展示、②顔の制作の後、箱を積んで記念撮影。③カオカオの塔を増やしていく展示で構成。

2月18日(日)「滋賀大学卒業制作展 2017」の最終日、10～15時にワークショップを開催。玉川小学校の児童だけでなく近隣の幼稚園児や親子連れら、割と低年齢の子どもの参加が多く、学生のサポートで入れ替わり活動に取り組んでくれた。学生らも少しずつ声掛けやサポートに慣れていったようで、ハサミが難しい幼児はちぎるなどの手法を助言。図工クラブとは違って個々のペースで、保護者と一緒に楽しんでいた。ヒゲ面の顔や可愛いリボンがついた顔だったり忍者の顔だったり、小学校高学年とはまた違った色々な表現が見られ、次々とカオカオの塔が出現、視覚的にも雰囲気的にも楽しい空間となった。玉川小学校の関係者や参加児童園児の保護者だけでなく、卒業制作展を観覧下さった学校教員の方々や一般のお客様にも、そして企画した学生自身にとっても、その空間はなにがしか感じるものとなったのではないだろうか。

4. 今後に向けて

この四年の取り組みから、大学教員や玉川小学校の先生方の中で、子どもらの造形活動の観察と理解は深まっていると感じる。参加者の保護者や玉川小PTA会長、クレアホールの学芸員からも本プロジェクト継続に期待する声を聞いた。参加学生や卒業生の反応からも、この活動を継続発展させる必要があると感じる。これらの期待に応え、今後も地域と連携して模索を続けたい。

(藤田 昌宏)

1-20) コミュニケーション能力の基礎を育む指導を求めて

1. 事業名および担当者

事業名は「コミュニケーション能力の基礎を育む指導を求めて」である。

担当者は、以下の通りである。

平山美穂（滋賀県大津市立晴嵐小学校教諭）（研究代表）

高原透（滋賀県大津市立南郷小学校校長、滋賀県小学校外国語活動部会会長）（研究支援担当）

大嶋秀樹（大学担当）（滋賀大学教育学部）

2. 事業の目的

本事業では、小学校外国語活動（英語）における「コミュニケーション能力の基礎を育む指導」について、研究代表者が中心になり、滋賀県、および大津市の公立小学校で、外国語活動に携わる教員と共同で、授業をととした実践的研究を行うことを目的とする。

3. 事業の概要

平成 23 年 4 月の現行学習指導要領の全面実施を受け、英語教育（外国語活動）が小学校で初めて導入されて以来、現在まで、小学校では高学年（5, 6 年生）を対象に週 1 時間の外国語活動が実施されている。外国語活動では、コミュニケーション能力の素地を養い、聞くこと・話すことの音声面を中心にした英語に慣れ親しむ活動（アクティビティ）に重点が置かれている。評価は、態度面について実施され、いわゆる成績評価は行っていない。導入以来 8 年目を迎え、現在、小学校での英語教育は教育課程に正式に位置づけられ、小学校の教育活動として定着している。

昨年度末（平成 30 年 3 月）に告示された改訂学習指導要領では、現在、週 1 時間の高学年での外国語活動を、週 2 時間相当の教科としての英語科に位置づけられ、さらに、小学校中学年（3, 4 年生）での週 1 時間の外国語活動の実施が盛り込まれ、高学年では、聞くこと・話すことの音声を中心とした英語教育を軸に、アルファベットの大文字・小文字を読むこと・書くこと、英語で書かれたことばを書き写したり、音声を聞きながらことば（文字）を読んでみるものが新規に導入され、また、3 段階での成績評価も導入されることになっている。改訂学習指導要領は、平成 32 年 4 月に完全実施が予定され、それに先立ち、平成 30 年 4 月からは、現行の学習指導要領のもとでの教育課程の枠の中で、3 年生から 6 年生までの各学年で、年間当たり 15 時間相当の英語教育の先行実施が始まることが決まっている。

本事業では、小学校の英語教育が、現行学習指導要領から次期学習指導要領のもとでの英語教育に移行する過渡期を迎え、次期学習指導要領の先行実施、その後の全面実施に向けた、小学校外国語活動の授業を通じた実践的研究を、平山を中心に進めてきた。具体的には、現在の外国語活動の教材『Hi, Friends!』と来年度からの次期学習指導要領の先行実施に向けた教材『We, Can!』（高学年用）、『Let's Try!』（中学年用）を活用した小学校の英語教育の実践について、月 1 回の公開授業を実施し、事後の研究会・検討会を行った。

1 共同研究事業

事業を通して得た成果については、平成 30 年度 11 月に滋賀県で行われる「全英連（全国英語教育団体連合会）第 68 回全国大会」での授業公開（平山が担当），ならびに，分科会での研究発表で，全国に向け，滋賀発の英語教育の実践成果として，公開・発信することになっている。

4. 今後に向けて

事業では、平成 23 年度から始めて小学校で導入された外国語活動の 8 年間の取組を踏まえ、平成 30 年 4 月からの次期学習指導要領のもとでの中学年・高学年での英語教育の先行実施と平成 32 年 4 月からの全面実施に向けた、小学校での英語教育の授業の実践的研究を中心とした、児童の「コミュニケーション能力の基礎を育む指導を求めて」の研究を進めてきた。今後は、本年度の研究をもとに、来年度 11 月の滋賀県で開催の全英連全国大会に向け、さらに発展的に、小学校での英語教育の授業の実践的研究を中心とした、児童の「コミュニケーション能力の基礎を育む指導を求めて」の研究を継続することを計画している。

（平山 美穂・高原 透・大嶋 秀樹）

1-21) 子どもに関わる若手専門家育成のための研修・教育プログラムの開発

1. 事業名および担当者

事業名は、子どもに関わる若手専門家育成のための研修・教育プログラムの開発であり、担当者は以下のとおりである。

教育学部：大平雅子（代表者）

みのり保育園 園長：ラッドキ岸本妃咲

すぎのこ保育園 園長：柴田絢子

2. 事業の目的

近年、子どもを取り巻く環境は刻一刻と変化しており、それに付随して子どもの健康課題も徐々に変化している。このような多様化・複雑化する子どもの現代的健康課題に対処するためには、専門的な視点や知識に基づいた対応が必要である。そこで、本事業では、「子どもの専門職」に対して、健康課題に対処するための研修・教育プログラムの開発を目指す。

3. 事業の概要

(1) ワークショップの実施

本事業では、「子どもの専門職」を対象にした講演会及びワークショップ（今年度のワークショップのテーマは「発熱」および「睡眠」に設定）を開催した。「発熱」のセッションでは、発熱した幼児を保護者が預けようとする事例を紹介し、①その際に園や保育士がどのように対応するべきか、②そうした事例をなくしていくために園で取り組むことが出来る短期的・長期的アプローチについてのディスカッションを行った。「睡眠」のセッションでは、睡眠習慣に問題のある幼児の生活への介入の仕方についてのディスカッションを行った。

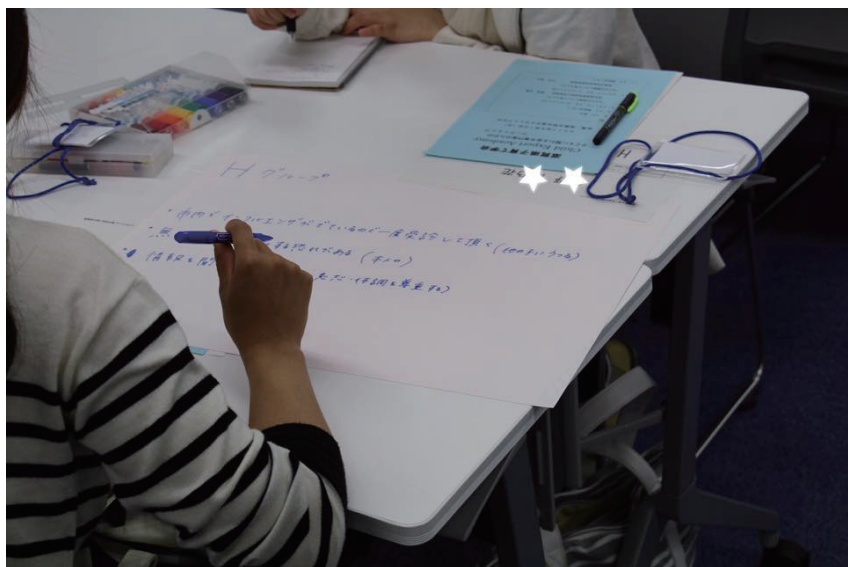
また、プログラムへの参加者には、ワークショップの内容についての質問紙調査を実施した。質問紙調査の内容を精査することで、今後継続的に実施可能な研修・教育プログラムの開発を目指す。尚、本セミナーは担当者以外に、ファシリテーターとして済生会滋賀県病院の小児救急救命医や滋賀医科大学の看護師長の協力を得て実施した。



(2) 質問紙調査の結果

今回のワークショップには、主に保育士を中心に40名の参加があった。参加者の47.5%（18名）がワークショップの内容について非常に満足していると回答し、残りの52.5%（22名）も満足していると回答した。

ワークショップ後の質問紙では、「発熱」のセッションについては、「子どもの発熱の事例を通して、



他園ごとの対応や他の人の意見ややり方が自分の身になる新しい発見になりました」「発熱のあった子どもを預けに来る保護者は園でもある話なので、対応について見直したり、園で統一していくことが大切だと改めて感じた」「保育園で登園される子どもを受け入れる際、保護者と何を話すかがとても大切だと感じました。子どもの姿を把握することができるよう、ひとつひとつの行動にしっかりと目を向け

ていきたいと思います」等の意見が寄せられた。「睡眠」のセクションについては、「睡眠の良し悪しについて考えることが普段なく、良い睡眠とは何かとは考えることのできる良い時間をもつことができた」「よい睡眠は長い間寝ることが全てではないと分かりました。子どものことを考え、よい環境づくりに努めたいと思いました」「他の園での午睡の様子や取り組みについても知ることでよかったです」等の意見が寄せられた。

ワークショップ全体を通しては、「ディスカッションをすることで色々な考え方、やり方を自分のものにすることができた」「自分の考えだけでなく多くの周りの意見・案を聞くことができ、とても勉強になった。発熱面・睡眠面は身近な事例なので園内で話してみても、共通理解ができたと思った」「発熱・睡眠共に、意見を出し合うことで、自分の考えとは違う意見がたくさん出てきて学ぶことがたくさんありました。またその考えをより深く考えることができ、自分の中で少し見方・考え方が広がったように感じました」等の感想が寄せられた。講演会形式ではなく、専門家がファシリテーターを務めるワークショップ形式による研修・教育プログラムを実施することで、より実践的な知識を身につけることができたのではないかと考えられる。

4. 今後に向けて

本事業では、「子どもの専門職」に対して、健康課題に対処するための研修・教育プログラムを実施した。今年度の取り組みだけでは、確立した研修・教育プログラムを提案することはできないが、プログラムの内容や進め方についての方向性を明らかにすることはできた。来年度以降も、異なるテーマでワークショップを継続的に行っていくことで、子育てに携わる専門職の人々が「地域の子育て力」を築くために集まり、ともに話し合い、考えあう、交流の場を提供することを目指していきたい。

(大平 雅子)

1-22) 美術科における生徒の主体的な学習を促す授業改善に関する研究

1. 事業名および担当者

事業名は、美術科における生徒の主体的な学習を促す授業改善に関する研究であり、担当者は次のとおりである。

教育学部：新関 伸也

大津市立志賀中学校：植田 公威（校長）、堤 祥晃（教諭）

2. 事業の目的

生徒が思いや目的を持って主体的に表現活動に取り組むためには、どのような条件が必要かを検証し、授業改善を行う。

3. 事業の概要

（1）研究の目的

小学校高学年から中学校にかけて、図工・美術の授業が好きだと答える生徒の比率が低下していく傾向があり、特に中学校ではその傾向が顕著に表れる。そのため、造形的な表現活動に対する興味・関心が高い幼児や小学校低学年とは異なり、適切な設定をすれば活動が始まるといった展開はあまり期待できない。そこで、生徒に対して「技能が身についた」という実感や「満足のいく表現ができた」という達成感を持たせるなど、中学校では、題材設定においてより一層の工夫と指導が求められる。

以上のことをふまえて、本研究は、中学校美術科の授業において、生徒が意欲的、主体的に表現活動に取り組む題材を開発し、実践によって検証することを目的としている。

（2）実践事例 1

○題材名 『私の木』～絵画（中学1年）～

○授業の概要

本題材は、校庭で生徒がお気に入りの木を見つけ、選んだ木の一部分を拡大して、ポスターカラーでケント紙に描くというものである。本題材では、写実的な描画表現以外に様々な試みをしている。特に技法的な面で、混色や筆のタッチを生かした多様な描き方があることを例示することで、見たものの再現だけにとらわれずに、自分の実感に基づいた素直な表現ができるように工夫しており、美術が得意な生徒も得意でない生徒ものびのびと表現することができる。さらに、作品を制作させる際に、五感を使って自分が感じたことや考えたことを素直に表現するということに重点を置くことで、見たものの再現よりも、感じたことの表現に自然と意識が向くように指導している点が特徴である。それにより、より写実的に描くことが良い作品であるという価値観を崩し、個性的な表現をお互いに面白いと感じ合えるような授業を目指している。



木の感触やにおいを確かめる

○成果と課題

のびのびと楽しんで制作している生徒の割合が多く、表現することを楽しむという目的はおおむね達成されたと感じる。そのことは作品完成後のアンケートで、自分なりに満足 of いく作品ができた生徒の割合が多かったことでも裏付けられている。また、制作後に相互鑑賞を行った際に、写実的な技巧以外の要素に触れている生徒も多く、様々な表現の面白さを素直に感じている様子であった。課題としては、周りの生徒に影響を受けて同じ様な描き方をしてしまい、色の塗り重ね方やタッチを工夫して自分なりの表現を追求するまで至らない生徒も少なからず見られた。

（3）実践事例2

○題材名 『流木から生まれた新しい生命体』～彫刻（中学3年）～

○授業の概要

本題材は、流木の形をもとに「もしも、この流木が見たことがない新しい生き物の一部だったら…」という設定で、流木と粘土を使って新しい生命体を生み出すものである。まずは五感を使って自然が生み出した流木を観察し、その生命力や形の面白さを感じとり、そこからイメージした生き物を色や形を工夫して表現する。制作段階では、粘土で造形する部分と流木の形を上手くマッチングさせられるかが大きなポイントとなっている。作品完成後には、生命体が実際に生息している様子を想定してデジタルカメラで撮影する。未知の生命体というテーマは自由度が高く、技術的な巧拙に捕らわれずにお互いの発想の面白さを認め合えるため、共感性を高めることができる題材となっている。



流木と粘土で「新しい生命体」

○成果と課題

この題材では、教師が集めてきた流木の中からお気に入りの木を選んでいる。しかし、授業のねらいをふまえると、生徒が自然の中で、自分で流木を見つけるという行為が非常に重要ではないかと考えている。そのことが、授業の中で流木が本来持っている形の面白さを十分に生かし切れていない生徒が少なからずいた一因ではないかと分析している。

しかし、おおむね生徒の作品は、個性にあふれた仕上がりで、ほとんどの生徒が意欲的・主体的に取り組めていたので、今後改良を重ねれば、可能性が広がる題材であると考ええる。

4. 今後に向けて

本実践から、改めて意欲的で主体的な学習活動には、生徒の身体による行為や五感を刺激する活動、さらに色や形、イメージによる再発見に至るような活動が必要であることがわかる。今後は、直接的な表現活動だけでなく、自然物に直接触れたり、材料を選択収集したりする行為もまた、美術の活動に含まれているというような意識付けも、指導の中に織り込んでいただきたい。

（新関 伸也）

1-23) 学校アート化計画『グリーンちゃんがやって来た』

1. 事業名および担当者

事業名は「学校アート化計画『グリーンちゃんがやって来た』」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部：藤田昌宏（代表者）

附属小学校：小橋良平，木村仁，山田和美（教諭，図工科担当）

青山小学校：中川理恵（教諭，図工主任） 志津小学校：中西さおり（教諭，図工主任）

2. 事業の目的

本プロジェクトは、子どもたちが多くの時間を過ごす学校という空間をアート作品で“異化”するもので、数年来藤田が『グリーンちゃんプロジェクト』と銘打って取組んできた活動の学校版。アート作品の存在で学校探索から学校の怪談？へ、子ども等が身の回りの様々な事象を再発見することを促す。そして、そこから生まれる色々な反応に呼応する形で、教員が教科に留まらない日常の中の学びに展開し、アートの可能性を広げることを目的とする。

3. 事業の概要

親しみやすいヒトガタの立体作品『グリーンちゃん』と『ミドリグマ』，そこから発展した造形物やタペストリーなどを，各学校園の行事予定（文化祭や作品展など）に合わせ実施時期を設定し，学校の構内に各校それぞれ月曜から金曜までの5日間，日替わりで設置する場所（グラウンド，体育館，図書室など）を変えて展示する。また，それに合わせて各学校の教員に本プロジェクトの意図を伝え，展示中に起る子どもたちの反応を観察してもらい，連携担当の先生を中心に，反応の聞き取りやそこから生まれた活動を記録していく。（具体的には，青山小は11月校内アートフェスティバルに，附属小学校は2月末の附小っ子表現フェスティバルにあわせて実施。志津小は今年度，日程調整がつかず未実施。）

(1) 連携の経過 - at 青山小学校

5月に青山小学校中川理恵先生と連絡，前年度の振り返りから今年度の展開を検討。

10月9日（月）11:30～13:30 青山小学校を藤田が訪問，中川先生と具体的なスケジュールや展示方法等を打合せ。グリーンちゃんの仲間達の高さ3m強の巨大なタペストリーを体育館・階段室などに展示，子どもらが巨人に囲まれる空間を作る。また，地面に潜っているように見える7つのクマのヘッドを星に見立て，5日間で校内の「星の広場」へ少しずつ移動させ，北斗七星を構成する展示を計画。

10月27日（金）～11月2日（木） 青山小学校の先生方にタペストリーの仕込みや，クマのヘッドの移設など協力を得て，毎日タペストリーを増やして階段室及び体育館に設置展示，クマのヘッドも配置計画に基づき校内を移動させながら設置。先生方の振り返りから以下のような報告を受けた。

「ノートにクマの居場所を友達とメモする楽しい場面に出会いました（1年）」「休み時間教室で過ごすことが多い児童も，クマを探しに外へ行って楽しんでいた（2年）」「明日はどんな女の子かな，とタペストリーを楽しみにしていました（4年）」「星の広場に日毎集まって来るクマ達を窓から覗き込んでました（5年）」「増えていくタペストリーに『サソリちゃん』『リンゴちゃん』と名前をつける子ども達がいたり，『この子浮いてるねん！』と細かい所に気づく姿がありました（6年）」etc.



写真:上段 青山小学校の展示風景 左より 児童用玄関階段室 体育館 星の広場(いずれも最終日の様子)
下段 附属小学校の展示風景 左より 作品を掃除する児童 桜の木に集うクマ 階段下設置のミニ・ミドリグマ

(2) 連携の経過 - at 附属小学校

8月19日に附属小学校木村先生、小橋先生と概要の打合せ。2015年に実施したグリーンちゃんプロジェクトの記録を見せ、イメージを持ってもらうことに務めた。

1月5日(金) 13:00～14:30 藤田がチラシなどの説明文とクマのヘッド、ミニ・ミドリグマを持って附属小学校を訪問し、木村先生と展示作品や設置場所の検討。

2月23日(金)～3月2日(金) 連日藤田が夕方17:30～18:30に附属小学校を訪れ、木村先生と相談しながら等身大「グリーンちゃん」「ミドリグマ」と7色のクマのヘッドを日替わり設置、加えて座敷童のイメージでミニ・ミドリグマを日毎、数を増やしつつ展示(月曜1体、金曜には全部で10体)。等身大グリーンちゃん達の土埃を掃除してくれる児童がいたり、ミドリグマの出現ポイントのマップ作り予想を立てる児童もいたようだ。特にミニ・ミドリグマは、初日に玄関のガラスケースに、二日目以降、物置の上や階段下の狭い空間、図書館のカウンターや職員室の窓、植え込みの中に現れ、探し回る子ども達の様子を、夕方に作品を移動させる作業中、多くの先生方から教えていただいた。敷地のつながる附属幼稚園や中学校の子どもの中にはこれらの姿に気づいたものも多く、ある中学生には2015年の展示を記憶していて「グリーンちゃんですよね?」と話しかけられたりした。前回の展示も知る山田先生は、クマのヘッドやミニ・ミドリグマの展示でより不思議さがアップしたとの感想をいただいた。

4. 今後に向けて

三年前に自作の等身大フィギュアを附属小学校に出前展示することがきっかけで始まった『学校アート化計画』だが、昨年度と今年度の取り組みから、概ね活動の流れは担当者の中で見えてきたと考える。青山小学校では去年のプロジェクトでその意図が多く先生方に伝わり、作品設置などにも協力、お声掛けいただいた。可能であれば、この流れを来年度も継続し、本年度実施には至らなかった志津小学校や、出前講義で何度も伺っている堅田小学校へも本企画を働き掛けていきたい。(藤田 昌宏)

1-24) 地域協働の中で役立つ自分を感じる生徒を目指して

1. 事業名および担当者

木工おもちゃづくり～自発性の開発をめざして～

担当者 滋賀大学教育学部附属特別支援学校 若林千春、堀口毅、定森多貴、木村明子
大津市立唐崎保育園 大西 知子、保育士：青山、今江、徳永

2. 事業の目的

自閉症スペクトラム児の自己肯定感を育むため、地域協働の視点をもって、地域の保育園児と木工おもちゃを介して交流を持つこととした。おもちゃ作りは親しみやすい題材で、どの生徒も好んで意欲的に取り組み、また交流では園児達が夢中になって取り組んでいる姿が一番の評価となり、役立つ自分を体験的に感じることができると考える。交流・製作過程の両方の取り組みより、「役立つ自分」や「自分らしく生きる」にせまり、地域社会に貢献することで、自己肯定感を育むことをねらう。

3. 事業の概要

研究経過と目的

滋賀大学教育学部附属特別支援学校では、2016年度から2年間にわたり、「自閉症スペクトラム児の自己肯定感を育むための教育的支援に関する研究」～地域協働の取り組みを通して～を全校研究テーマに掲げ、実践研究に取り組んできた。

高等部スピカグループの木工おもちゃづくりは、3年目の取り組みであり、2本の柱を持って自己肯定感を目指している。1つは、「喜んでもらえるおもちゃづくり」を目指してPlan（計画）Do（実行）Check（評価）Act（改善）等の流れを意識して課題解決しながら製作にあたっている。特に今年度は、「企画づくり」に重きを置き、企画以前に対象園児を知るための交流会や、ニーズを知るために保育園の先生にインタビューを持った。また製作過程において、地域協働先とのやりとりの中より、新しい価値観に触れ、話を突き合わせ対話しながら作り上げてきた。2つ目は、「園児達をおもてなしする交流」にて、自作おもちゃをツールとしてコミュニケーションにせまっている。昨年度は、全員同種類のおもちゃでマニュアルを基本に関わったが、今年度においては、グループ毎のおもちゃでマニュアルなしで関わることにした。自分達が考えたおもちゃを、園児達に分かりやすく伝え、喜んでもらうことに役立つ自分を感じられることを目指していった。

研究計画

- 1 学期 ニーズの把握・・・・・・唐崎保育園との年度初め交流、事後インタビュー
企画づくりにむけて・・・・地域の木工所の見学（れもん会社、端材工房、m i y a b i）
企画づくり・・・・・・唐崎保育園に企画を報告し、アドバイスをもらう
- 2 学期 製作、改良・・・・・・グループ別による製作、協働先にアドバイスをもらいながら改良
中間報告会・・・・・・レインボーフェスタ（高等部による祭典）にブースを出店
- 3 学期 お披露目会・・・・・・完成おもちゃ及び、交流での関わり方をプレゼンテーション
保育園交流・・・・・・今までの取り組みを活かして本番

生徒の姿から見てきたこと

今年度は、『企画づくり』から取り組んだことで、より相手に意識を向けることができた。ニーズ調査を生かし企画することは大変だったが、地域協働先との関わりの中でヒントをもらい、友だち、担当教

師、時には教育実習生と共に悩みながら、(写真1)粘り強く考え出すことができた。「どのように遊んでもらおうかな」「この大きさに扱いやすいだろうか」「4歳児さんにあっているかな」等、考えをめぐらせた。アイデアや試作をそれぞれの専門家に見てもらう中で、自分達が考え、作り出したことが認められることを嬉しく感じることもできた。協働先の方のアドバイスを熱心にメモにとり、作品づくりに反映させていった。また、もっと作りたいという欲も出始め、休み時間を使って製作する生徒や、自宅で企画を考え、下準備する生徒、さらには、知り合いの保育士に自らアドバイスをもらう生徒もいた。



写真1 企画を練る

グループは、『七面パズルとまよい迷路』『昆虫射的ゲーム』『ポケモンすごろく』『木のミニカー』の4つあり、各2名で取り組んだ。例えば『木のミニカー』グループは、端材工房とm i y a b iで車を見て、イメージを膨らませた後、保育園インタビューでの「それを使ってどのように関わるか」の言葉

より、道路や信号を作り、交流することを考えた。まずは、メインの車の製作より取り掛かり、実物大の形を厚紙に描き切り取って、れもん会社（以前から付き合いのある木工作業所）に見てもらった。端材工房が作ったものは小さく、m i y a b iのものは大きかったが、生徒が作ったものは子ども達扱いやすい、大きさに型取っていた。「持ちやすそうだね。」と声を教師がかけると、更に持ちやすさを追求した形を型取った。れもん会社では、まず切り取った車を見せた所、「いいねー。」と肯定的に声をかけ、詳しく聞き取ってくれた。(写真2) またマフラーが描かれているのを見て、教師は「難しいから



写真2 協働先へ相談

やめておいたら。」と言ったのに対して、れもん会社では「マフラーはかっこいいし大事だね。」「他には何かしたいことがある。」とも聞いてくれた。生徒は、俄然やる気を出していた。その他、工程を教えてもらい自分達でできる所と発注する所を整理してもらった。学校で教えてもらった手順どおり、図面を描き、指定の高さに穴をあけ、車体をカットし、車軸とタイヤをはめた。タイヤの取り付けは、早く走らせたいという思いから、急いではめた。その後は、インターネットの車のイラストを参考にフォークリフトに挑戦した。フォークリフトでは、電動のこぎりでもカットした時点で、フォークリフトらしい出っ張りのある形になっていた。上手く切れた瞬間の顔は、手ごたえを感じた顔であった。(写真3)



写真3 完成に手応えあり

4. 今後に向けて

経過報告の場では「ありがとうね」「子ども達、きっと喜ぶわ」と感謝や期待の言葉をかけられることを通して、自分達が必要とされることを実感できた。これは、製作の協働先でも同様で、日頃「どうなった？上手くできた？」と気にかけてもらい、生徒達に期待して関わってもらった。このように、自分達が頑張っていることや上手くできたことを報告することを嬉しく思い、共に喜んでもらう取り組みができれば、今後更なる自発性や自己肯定感に繋がっていくと考える。今後一層、生徒達が自分で考え、やり遂げられる、自発的な活動を仕組み、自己肯定感を育んでいきたい。今回の取り組みでは、「作った物が使われる喜び」の先の「使った人に満足してもらう喜び」を目指すことができた。このことは、将来社会参加した際も、仕事をする意味や、仕事をする楽しさを求めることに繋がっていくと考える。

(若林 千春)

1-25) 幼児の好奇心や探究心を育むための造形表現活動実践

1. 事業名および担当者

- ・事業名：幼児の好奇心や探究心を育むための造形表現活動実践
- ・大学担当者：村田透
- ・連携先機関名：大津市立石山幼稚園
- ・連携先担当者：岸本光香（園長）、岡田美由紀（主任）

2. 事業の目的

幼児期は幼稚園教育要領において「生きる力の基礎（感性、好奇心、探究心、思考力など）」を育む時期と位置付けられている。本研究では、幼児の興味関心や発達などの実態をふまえながら、特に「好奇心と探究心」に焦点をあてて造形表現活動の題材を研究し、可能性と効果を検証する。

3. 事業の概要

3-1. 本事業の取り組み内容

- ① 研究代表者や保育者や学生スタッフを主な研究構成要員として、年間を通して題材を計画・実践し、参与観察やエピソード記録を通して、幼児（年長児、30名程度）の表現行為の実態や「好奇心や探究心」の働き方を分析する。
- ② 上記の計画・実践・分析すると共に、「好奇心や探究心」を伸ばすための題材や指導・援助を研究する。

3-2. 本事業の実践概要

- ① 題材名「紙コップをならべて、つんで、〇〇〇して」（第1～3次）
 - ・場所：石山幼稚園 遊戯室
 - ・実施日：【第1次】2017年6月8日（木）、【第2次】6月26日（月）、【第3次】7月20日（木）
各活動時間は1時間程度。
 - ・スタッフ数：筆者，学生スタッフ（7名）。
 - ・材料：【第1次】紙コップ（150ml サイズ、白色無地、一人につき100個程度）。
【第2次】第1次の材料、短冊状の画用紙、紙製コースター（円形、正方形、白色無地）。
【第3次】第2次の材料、透明プラカップ（275ml サイズ、無色透明、一人につき100個程度）。
- ・子どもの事例：

第1次において、子ども達は個や複数で紙コップを平面的・立体的に並べたり積んだりし始める。子ども達は活動しながら発想・構想が次々と生まれ、「紙コップを積み続けて円柱や壁をどんどん高く大きくしようとする」「自分が入る大きさの円形にしようとする」「スタッキングしたコップの柱を天井まで届けようとする」などの姿があった（写真1）。第2次において、子ども達は紙コップの他に短冊状の紙やコースターも使いながら「異なる材料を組み合わせでできる形を試したり、形を見立て（家、風呂など）たりして楽しむ」「異なる材料が加わることで構造の強度が変わることに気付く」という姿があった（写真2）。第3次において、子ども達はこれまでの材料に加えて透明カップを使いながら「透けることの面白さ・不思議さを感じる」「紙コップと透明カップを組み合わせでできる形を試したり、できた形を見立て（お城、牛乳屋さんなど）たりして楽しむ」という姿があった（写真3）。



(写真1) 円柱、壁などをつくる (写真2) コップと短冊を組合せて積む (写真3) 透明カップを積む

② 題材名「ならべて、つないで、組み合わせて（ジョイントマットを使つて）」（第1～2次）

- ・場所：石山幼稚園 遊戯室、保育室
- ・実施日：【第1次】2017年12月8日（金）30分程度、【第2次】12月11日（月）1時間程度
- ・スタッフ数：筆者，学生スタッフ（3名）。
- ・材料：【第1・2次】ジョイントマット（30cm四方、色：白・緑・茶、約600枚）。
- ・子どもの事例：

第1次において、子ども達は個や複数でマットを平面的・立体的に並べたり繋いだりし始める。子ども達は活動しながら発想・構想が次々と生まれ、「マットどんどん繋いで長く、広く、高くする」「特定の形（四角、輪、立方体など）をつくらうとする」「出来た形を見立てる（家、部屋）」などの姿があった（写真1）。第2次において、第1次の経験や学びを生かし、「マットの表面・裏面では感触や繋ぎ方が異なることや、マットを展開図のように繋いだ後に組み立てた方が立体にしやすいことに気付く」「体のサイズに合わせた形をつくる」「仲間と目的を共有しながら形をつくったり、出来た形を見立て（家、風呂、服など）たりして楽しむ」などの姿があった（写真5）（写真6）。



(写真4) 「立方体」を積み上げる (写真5) 皆で「家、部屋」をつくる (写真6) 「お風呂」に見立てる

4. 今後に向けて

本事業で実践した2つの題材の特徴は、「並べる、重ねる、積む、組み合わせる」という技法・行為を手がかりに、材料と直接かかわり、働きかけていく過程を大切に「造形遊び」の題材ということである。本題材の材料（紙コップ、ジョイントマットなど）は、軽量・無地で数量も豊富であり、子どもが容易に並べる・積むなどができる即時性の特徴がある。さらに子どもが思いのままに様々な技法や形や発想・構想などを試すことができる多様性や、つくり変えややり直しが何度でもできる可逆性の特徴もある。以上の題材の特徴や材料の設定により、子どもの「面白そう、やってみよう」という好奇心が刺激され、様々な技法・行為を試したり造形物の構造・仕組みの不思議さや面白さに気付いたり自分の発想・構想を実現するまで試みる探究心を働かせていたと考えられる。

今後も幼児を対象とした好奇心や探究心を育む「造形遊び」の題材・材料の可能性を検討するとともに、場の効果や保育者や他児との相互関係・相互行為に着目して研究を進めていきたい。（村田 透）

1－26) 中高一貫教育校における発信力を高める授業の在り方

1. 事業名および担当者

事業名は「中高一貫教育校における発信力を高める授業の在り方」で、担当者は以下の通りである。
伴野恭士（滋賀県立水口東中学校・高等学校教諭）（研究代表） 大嶋秀樹（大学担当）
山下泰世（滋賀県立水口東中学校・高等学校教諭）（研究代表）
辻美也子（滋賀県立草津東高等学校校長、滋賀県高等学校英語教育研究会会長）（研究支援・連携担当）

2. 事業の目的

滋賀県立水口東中学校・高等学校は、中高が連携しながら生徒の進路実現を達成することを目指す公立中高教育一貫校である。朝の単語テストやリスニングの実施、英字新聞の購読など、学校全体が協力しながら生徒の英語力を高めようとする体制がある。

一方、中高の6年間を見通した系統立てた英語指導体制はまだ確立しているとは言えない現状がある。これまで中高で情報交換や授業参観を行うなど、中高の連携を図ってきたが、高校卒業時点の英語力をゴールとした系統的な指導が展開される段階に至っていない現状がある。

また、平成29年度授業アンケートによると、「英語の授業を通して、さらに学びたいと意欲・関心が高まった」とする生徒が6割程度に留まり、生徒の学習意欲の喚起が課題として明らかになった。

そこで、本研究では、英語を読む力に焦点を当て、生徒が意欲的に英語を読もうとする態度を育成する取組を行う。朝の読書や国語科の読書課題などを通して本を読む習慣を身に付けている生徒は多いが、英語の読み物を主体的に読もうとする生徒は比較的少ない。多読教材を用いて中高一貫教育校で継続的な取組を行い、生徒が読んだ内容について思考を深め、主体的に英語の読書に取り組む姿勢を身に付けることを目指す。

3. 事業の概要

(1) 研究内容 小学校の読書指導などで実践されている「リーディングワークショップ」や「リラチャーサークル」などの活動にヒントを得て、「水口東版リーディングワークショップ (BookCircle)」を設定した。中学校では、多読教材の学級文庫を作成し、4人グループ単位でのBook Circleを通して、多読教材を読む計画からブックレビューまでを一つの指導サイクルとして取組を行う。一方、高校では、Book Circleの活動を通して多読教材についての理解を深めた後、ミニビブリオバトルの表現活動へとつなげる取組を行う。生徒へのアンケートや読書量の記録、ブックレビューなどを通して生徒の変容を捉え、読むことへの意欲や読む力の高まりを考察する。



興味のある多読教材を選ぶ（中学校）

(2) これまでの取組と成果

<中学校>

Book Circle の活動の主な内容は、①本選び②読書計画③交流④ブックレビュー⑤ブックナビゲーションである。また、ブックトークや本のポップ作りなどを行った。教科書の教材を活用して、読んだ内容をグループでまとめたり、感想を述べ合ったりする活動を行った。

簡単な英語で書かれた読み物であれば、あまり抵抗を持たずに読むことができるようになりつつある。

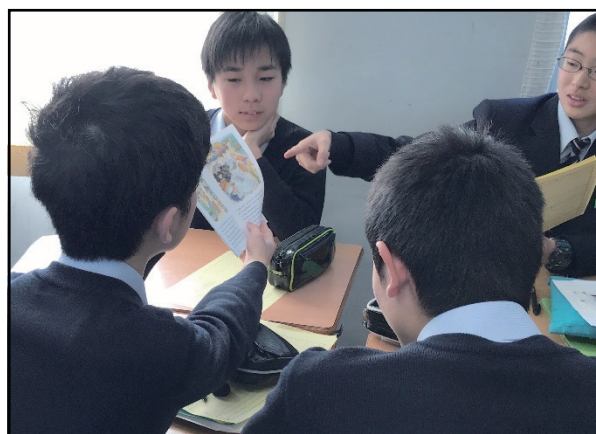
<高等学校>

Book Circle の活動を行い、①要約係②照明係（印象的な場面を話す）③質問係④思い出し係（読んだ内容と自分や社会のつながりを見つける）の役割に基づいて話し合いを行った。さらに、Book Circle で扱った本を使ってミニビブリオバトルを行い、読むことに対する動機付けを試みた。

Book Circle で生徒が書いた振り返りからは、「思い出し係の感想を聞いて、深くまで読み込んでいてすごいと思った」「照明係が話したことを聞いて、自分と同じ視点を持っているんだなと共感した」「hot という単語には魅力的という意味があることを知った」など、様々な気づきが生まれていることが分かった。

4. 今後に向けて

英語のインプット量を増やし、英語を読むことに対する動機付けとして多読教材は効果的であることを実感した。今後は、生徒の読書量を増やすとともに、読んだ内容についてさらに交流を深め、英語で発信する楽しさや達成感につながるような取組に発展させていきたい。



Book Circle で交流（中学校）



Book Circle で理解を深める（高校）



興味のある多読教材を選ぶ（高校）

（伴野 恭士・山下 泰世・辻 美也子・大嶋 秀樹）

1-27) 思考力・判断力・表現力の育成

1. 事業名および担当者

事業名は、「思考力・判断力・表現力の育成」であり、担当者は次の通りである。

豊郷町立豊日中学校：中野泰弘（教頭）、北村 俊（研究代表、数学科教諭）、岩崎 剛（数学科教諭）

高井克徳（数学科教諭）、高尾和樹（数学科講師）

教職大学院：畑 稔彦

2. 事業の目的

豊日中学校では、急速に社会が変化する中、卒業した生徒たちが自らの目標に向かってたくましく生きていくために、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断をし、どのような場面であつても表現できる力を身に付けさせたいと考え、教育活動を展開している。校内研究では、授業の規律を確立しながら、アクティブラーニングの視点を授業に取り入れ、各教科において基礎学力の向上と自ら課題を解決するための思考力・判断力・表現力の育成を図ることを主眼として、授業改善に取り組んでいる。

3. 事業の概要

数学科では、年間3回の研究授業を行い、様々な考えを引き出したり思考を深めたりするような発問や指導の在り方を検証した。豊日中学校で設定している3つの視点

視点1 教材は適切か。ねらいに対してどうだったか。

視点2 生徒は思考していたか。どのような考え方を身に付けることができたか。

視点3 伝えたいような問題設定ができていたか。

をもとにした研究協議を行った。あわせて、事前の指導案検討および先行授業についても大学担当者は指導助言にあたった。

6月16日（金） 指導案検討 21日（水） 研究授業 3年「平方根」

9月14日（木） 指導案検討 27日（水） 研究授業 1年「方程式」、3年「いろいろな関数」

1月26日（金） 研究授業 1年「平面図形」

本稿では、実践された研究授業のうち、2事例示したい。

(1) 1年「方程式」方程式の利用〔9月14日〕習熟別少人数授業

球技大会の進行表をもとに、休憩時間が何分間とることができるか、つくった方程式を解いて求める授業であつた。導入では、1学期に生徒が企画して実施した学年ドッジボール大会の写真を見せた。休憩時間の設定に問題があり、後半3試合の時間が短くなったことを振り返らせ、問題解決の必然性が生まれる工夫が見られた。以下は、標準コースの問題である。基礎コースでは3試合の進行表を提示した。

豊日中学校の第1学年では1学期に、「学級対抗ドッジボール大会」を開催しました。実行委員の海斗さんと葉月さんは、そのときの大会の進め方がうまくいかなかったことを反省し、次回の大会に向けて話し合いをしています。葉月さん「1学期は6試合したけれど、開会式のスタートや休憩の時間が長くなって、後半の試合時間を短くしたね。」海斗さん「同じ6試合でも5、6時間目の時間（110分）を使ったら、うまくできないかな。」

〔海斗さんの考えた進行表〕

← 20分 →		70分										← 20分 →	
開会式 準備運動を含む	①-②	休憩	②-③	休憩	③-①	休憩	①-②	休憩	②-③	休憩	③-①	閉会式 後片付けと着替えを含む	

1 共同研究事業

大会の計画

- 3学級の総当たり戦を行う。
- 1試合の時間はすべて同じ長さとする。
- 試合と試合の間には結果の集計や準備を含む休憩をとり、時間は同じ長さとする。
- 第一試合が始まってから最終の試合が終わるまでは70分とする。

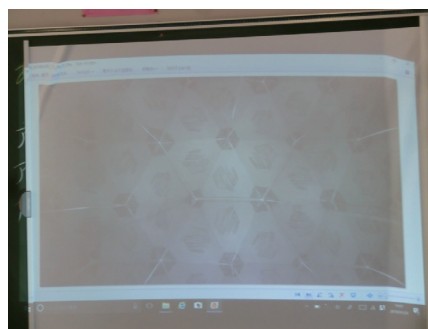
進行表は数量の関係がとらえやすいことから、一元一次方程式をつくりやすく、数学に苦手意識をもつ生徒にとっても適した教材であった。また、試合数がいくら増えても、休憩時間を決めれば、方程式で簡単に試合時間を求めることができることから、方程式を用いるよさに気付かせることができた。

(2) 1年「平面図形」図形の移動〔1月26日〕習熟別少人数授業

本年度実施の全国学力調査B問題にあった万華鏡を題材に、次期学習指導要領で示された算数・数学の問題発見・解決のプロセスをふまえて授業を展開した。基礎コースは万華鏡で見える模様から基となる模様を見つけること、応用コースはさらにどのような関係があるのかを説明できることをそれぞれ目標とした。導入では、実物の万華鏡で模様を確認したり、長浜市にある巨大万華鏡の映像を見せたりすることで、できる模様の美しさから、「万華鏡はどうしてこのような模様に見えるのか」という問題から、「万華鏡に映る模様の関係を調べよう」という課題を生徒とのやり取りで設定できた。

基礎コースでは、単純な図形を基に実験を繰り返しながら対称移動を丁寧に確認した。その後の予想や実験では、1グループに1つ自作した万華鏡を渡した。どのような模様になるのかを伝える際に、対称移動という語句を使って説明することができていた。応用コースでは、単純な模様で対称移動を確認した後、基となる模様が複数考えられる万華鏡の模様を扱った。異なる意見が出ることから議論が活性化した。その図形では模様ができないと主張していた生徒も、自作の万華鏡で確認できたことから、対称の軸に注目して考え直し、図形の大きさを変えてもよいことに気付くこともできた。

今回の授業では、生徒が考えた模様を万華鏡越しにデジタルカメラで撮り、それをスクリーンに映した。生徒のワークシートをもとに正否の確認が全体で瞬時にできたことで、授業の最後まで生徒は集中して学習に取り組んだ。



4. 今後に向けて

全国学力調査B問題を参考に、生徒が問題解決の必然性を感じる課題を設定することで、教師主導の授業から生徒の発言や考えをもとにした授業展開になり、思考・判断したことを表現する場面が増えた。引き続き、算数・数学の問題発見・解決のプロセスを意識した教材の開発が望まれる。とりわけ、D資料の活用(次期学習指導要領では「データの活用」)の実践事例が多領域に比べて少ないことから、重点的に研究を進める必要がある。

(北村 俊・畑 稔彦)

1-28) 若手・中堅教員を育てる美術科教材開発プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名は、若手・中堅教員を育てる美術科教材開発プロジェクトであり、担当者は次のとおりである。

教育学部：新関 伸也

滋賀県中学校美術教育連盟（滋賀中美連）：伊庭照実（委員長）、堤 祥晃（研究部長）、伊丹賞子（事務局長）

2. 事業の目的

○以下の目的で、授業力向上のためのグループ別研究会を行う。

- ・公開授業者だけでなく、多くの教員に学びが共有できるシステムをつくる。
- ・複数の教員で授業づくりをすることで、多角的、客観的な教材研究につなげる。
- ・指導案作りから複数教員が関わることで、公開授業の研究協議が深める。

3. 事業の概要

(1) 研究の背景

中学校現場では、少子化や教科の授業時数削減の影響により、中学校美術科の教員は1校に1名という学校が増加している。また、初任者研修等、研修の機会は数多くあるものの、教科教育や授業づくりに関する研修の時数は限られており十分とはいえない。その結果、経験の浅い教員が身近に相談できる相手もいない状況で授業内容を考えることになり、自身が学生時代に受けてきた授業や、前任の教員がやっていた題材の表面的な再現になっている事例を多く見かける。そのような題材は、時流にそぐわなかったり、養いたい資質能力が明確でなかったりすることも多く、授業の質の低下を招いている。美術科は学習指導要領等で具体的な題材を示されているわけではないため、各教員が教科の目的、養いたい資質や能力、生徒の実態、地域や社会の動向等を考慮して題材を組み立てる必要があるが、前述のような状況では、教員がそのために必要な能力を十分に養える環境が整っているとはいえない。

また、質の高い授業や先進的な取り組みをしている美術教員は全国に数多くいるが、そのほとんどが個人的な研究で、組織的に研究している事例は少ない。そのため、先達の優れた実践やノウハウが次の世代に十分引き継がれないまま世代交代してしまうことも多い。近年、中学校美術科は、授業時数のさらなる削減や教科の選択教科化になりかねない危機的な状況にあり、教科を取り巻く環境は厳しい。そのため、美術教育の衰退を食い止めるためには、上記の問題を解決することが必要不可欠であり、特に若手、中堅教員の育成が重要であると考えている。そこで、若手、中堅教員の実践力を高めることに特化した実験的な研究プロジェクトを立ち上げた。

(2) 研究の概要

滋賀中美連では、年間3回の授業研究会を行っている。今回の研究では、これらの研究会において、滋賀中美連のメンバーの中堅・若手教員で3グループ（各7名）を編成し、研究授業に向けて、それぞれ指導案を考えるというスタイルで授業づくり研究会を組織した。今回のプロジェクト

の趣旨は教員の授業づくりの学びの輪を広げることであることをふまえ、授業者以外の教員をチームリーダーに指名して授業者任せにならないように工夫している。今回のプロジェクトではベテラン教員も参加しているが、あくまでアドバイザーとしてサポートに徹するよう努めた。また、授業づくりを通して学びを共有したり、多角的、客観的な視点から考えたりできるシステムの構築を目指しているため、プロセスを重要視しており、試行錯誤や多少の失敗も学びの場と捉えて、実験的な内容に挑戦している。公的な研究組織であるため、本来は出張で集まり勤務時間内に行うべき内容だが、多忙な学校現場の現状では出張の日程や各自の校務との調整が難しいため、主に休日など勤務時間外に行っている。そのような現状をふまえて、思い切って懇親会とセットにして居酒屋で開催するなど、親睦を深めながら気軽に話し合えるよう工夫した。

(3) 成果と課題

中堅、若手の先生からアイデアが出て、ホワイトボードや付箋を活用したりするなど、飲食店を機能的な会議の場にするための工夫が生まれた。何より、参加教員が教材研究の楽しさを感じながら、自然体で主体的に取り組めたことが最大の成果である。まだまだ、粗削りではあるが、体裁良く授業をまとめるのではなく、コンセプトから丁寧に話し合うなど、授業づくりのベースが定着しつつあり、今後の発展が期待できる。また、居酒屋のリラックスしたムードで話し合ったためか、授業も固くならず、実験的な内容や先進的な内容に積極的に取り組もうという姿勢が生まれ、授業研究会のみに参加した教員に対しても良い話題提供となった。しかし、働き方改革が叫ばれている今日の状況で、休日に研究会を行うことは是非を問われることである。持続可能なプロジェクトという視点で考えたときに、研究会の持ち方については検討する必要がある。これについては、美術科の教材研究自体が教員のプライベートの趣味や活動、教員間のネットワークに支えられている側面もあるため一概に駄目だと言えない部分もあるだろう。参加教員が負担に感じることがない無理のない範囲で参加できるようにバランスをとっていく事が理想的である。



居酒屋での研究会の様子

4. 今後に向けて

若手の美術科教員の指導力向上のためにはフォーマルな研修だけでなく、インフォーマルな中堅教員による指導が功を奏する場合が多い。主体的な教材研究を支援する糸口として「居酒屋」談義による題材開発など、中美連の研究部による取組はユニークである。それらが題材開発にどのように展開して、授業に結びついたのかをていねいに省察していく取組も必要となってくる。また、指導者目線だけではなく、生徒の立場による授業検証や分析も今後の課題としてあげられる。

(新関 伸也)

1-29) 交流及び共同学習のあり方について ー特別支援学級に在籍する児童に有効な支援とはー

1. 事業名および担当者

事業名は、「交流及び共同学習のあり方についてー特別支援学級に在籍する児童に有効な支援とはー」であり、担当者は、教育学部：白石恵理子，草津市立南笠東小学校：山崎賢（校長），岩本宏子（教諭），南佐和子（教諭）である。

2. 事業の目的

草津市立南笠小学校では，身体虚弱児学級が新設され，重度・重複障害があり医療的ケア（経鼻経管栄養）を要する児童が入級した。当該児は学校教育法施行令 22 条の 3 に該当する児童であるが，看護師配置等の教育条件整備を行ったうえで，日々の学習が行われている。担任としては，よりよい教育課程や教育環境を整えていきたい思いをもちつつ試行錯誤の状態であった。そこで，①身体虚弱児学級で学ぶ児童の課題をみとり，実践が児童にあったものであるかを検討していくこと，②障害のある子どもにとっても，通常学級に在籍する児童にとっても有効な交流及び共同学習のあり方を検討すること，を目的とした。

3. 事業の概要

① とりくみ内容

身体虚弱児学級に在籍する児童 A について，アセスメントをふまえ児童の課題を明らかにしたうえで，学習内容の設定，方法，教育課程について検討する。さらに，他の特別支援学級や通常学級に在籍する児童との交流について考察する。

② 経過と概要

第 1 回：平成 29 年 9 月 5 日

研究の進め方についての打ち合わせ。

第 2 回：平成 29 年 10 月 6 日

A の授業場面（特別支援学級，交流学級）の観察。

第 3 回：平成 29 年 10 月 10 日

10 月 6 日授業観察をふまえ，A の教育課題，方法，教育課程について協議を行った。国語，算数などの教科別指導にとらわれず，A の発達課題をふまえた授業づくりを進めることにした。

第 4 回：平成 29 年 11 月 28 日

A の授業場面（特別支援学級）の観察。

第 5 回：平成 29 年 12 月 5 日

11 月 28 日の授業観察をふまえ，より五感に働きかける授業，教材・教具の工夫について協議した。写真は紙芝居，レインスティックを使ったお話あそびの場面である。

第 6 回：平成 29 年 12 月 26 日

1 月の研究授業，2 月の校内研究会に向けて協議した。



1 共同研究事業

第7回：平成30年1月23日

身体虚弱児学級で、通常学級担任を含めた他学級教員による参観授業を実施した。白石も参観し、その日のAの様子について意見交換を行った。

第8回：平成30年1月30日

1月23日の参観授業場面の映像をみながら、授業の改善点等について協議した。

第9回：平成30年2月21日

午前中に、担任、保護者同席のもと、Aの発達診断を白石が行った。また、午後からは、全教員が参加する授業研究会のなかで身体虚弱児学級担任の南教諭が、“自主性・五感・繰り返し”が重要であることを報告した（写真）。



③ 授業研究会での感想より

- ・ 試行錯誤をしながら、1年間、子どもと向き合ってきたことが分かりました。“自主性・五感・繰り返し”を大切にしていくなかで本人らしさを育てておられること、なるほど！と思いました。
- ・ 言葉からだけではなく、表情やちょっとした手の動き、反応から子の様子を見ること、気持ちを読み取るすごさを感じました。
- ・ 交流学級としてどこまで関わる方がいいのか、初めてのことでよく分からなかったことが多かったのですが、クラスの子どもたちを見ていると分かることが多かったです。
- ・ 通常学級の児童との利害、児童の実態に合わせた学習の内容など、今まで知らなかったことをたくさん知る良い機会となりました。また、“自主性・五感・繰り返し”はどの子にとっても大切なことなので、自分の学級でも生かしていきたいです。
- ・ Aさんの笑顔と笑い声が胸をしめつけました。先生の温かいまなざしと対話、信頼関係あってこそだなあと感じました。
- ・ Aさんの小さな変化を見逃さず、自主的な動きをつけていけるか、学校全体でももっとAさんのことを理解していく必要があると感じました。

4. 今後に向けて

インクルーシブ教育において、ただ障害のない子と一緒に学ばせるということではなく、それぞれの教育課題を見極めて授業や交流を行っていくことが重要な課題である。とりわけAのように重度・重複障害をもち医療的ケアも要する場合、どうしても「見かけの重度さ」に目を奪われがちであるが、微細な変化をよみとり、子どものもつ発達要求に応える教育実践のあり方が問われる。しかし、そのなかで見えてきた子どもとの「対話」、教師との信頼関係、主体性を引き出す授業づくり等の観点はどの子にとっても重要な普遍性をもつ。また、自然にAと関わる通常学級の子どもたちから教師が学ぶことも多い。そうした学びあいが、インクルーシブ教育によってもたらされることが明らかになった。今回検討した教育課程づくりの道筋を学校課題に位置付けることが次年度に向けた課題である。

（白石 恵理子）

1-30) 石山っ子わくわく親子で畑体験隊

1. 事業名および担当者

事業名は、「石山っ子わくわく親子で畑体験隊」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部：森 太郎（代表者）、與倉弘子、久保加織、石川俊之

地域ボランティア：内藤京子、石橋克也

大津市石山公民館専門委員：小松文郎

2. 事業の目的

農作物の栽培や観察など実体験を重視して農と食の大切さを理解し、食の安全・安心について考えるような「食農教育」が求められている。しかし、学校現場において、このニーズに対応できるプログラムの確立、対応できる教員の確保は不十分である。そこで、地域の住民と連携（公民館、ネイチャークラブ）して、小学生の親子を対象に畑体験活動を実施し、「食農教育」の地域連携プログラムを開発する。さらに、教育学部の学生がスタッフとして主体的に参加し、教育現場において「食農教育」に対応できる人材を育成する。

3. 事業の概要

1) 活動の概要

本プロジェクトは、石山公民館・地域ボランティアスタッフ・滋賀大学教育学部の3者の共同企画である。公民館は主として参加者の募集業務、地域ボランティアスタッフが畑体験の具体的指導、滋賀大学教育学部教員および教育学部の学生（主として環境教育専攻）が体験活動内容の計画立案、指導を行っている。

本活動は、平成14年4月から始まり、今年度は10家族26名が参加した。3月に石山公民館を通じて石山および南郷学区の幼稚園、小学校の児童と保護者を対象に、「石山っ子わくわく親子で畑体験隊」への参加申込書を配布した。4月上旬から滋賀大学自然環境教育施設の農場にて、毎週水曜日の15時から17時まで食農体験活動を実施し、3月まで39回の活動を行った。

2) 本年度の活動内容

本年度の月ごとの実施内容を以下に示す。

実施月	主な活動内容
4月	開始式、自己紹介、農場見学、野菜の播種（オクラ、カボチャ、キュウリ、バジル、赤しそ、トウモロコシ、エダマメ）・鉢上げ（ピーマン）、野菜の生育をスケッチ
5月	スナップエンドウ収穫、夏野菜（4月に播種した作物、トマト、ナス、ピーマン、トウガラシ類など）の定植・管理（支柱立て、誘引、わき芽取り、草抜き）、サツマイモ挿苗、マリーゴールド播種・鉢上げ、稲のモミ消毒・播種、タマネギ収穫、梅の収穫・梅ジュース・カリカリ梅・梅干し作り、蚕の飼育を開始
6月	ジャガイモ収穫、夏野菜の管理、タマネギ収穫、キュウリ収穫・試食、田植え、田んぼの草取り、田んぼの生き物（ミジンコ、カブトエビなど）観察、蚕が繭を作る部屋を作製
7月	カイコについての講話（公益財団法人 衣笠繊維研究所 古澤壽治 先生）、夏野菜の管理・収穫・試食（トマト、ピーマン、オクラ、エダマメなど）、梅ジュース試飲・カリカリ梅試食、赤しそジュース作り・試飲
8月	夏休みであるが、当番制で畑の管理、水やりを実施
9月	セルトレイに秋冬野菜を播種（キャベツ、ブロッコリー、ハクサイ）、露地に秋冬野菜を播種（ダイコン、ニンジン、ホウレンソウ、コマツナ、チンゲンサイ、ミズナなど）

1 共同研究事業

10月	セルトレイに播種した秋冬野菜の定植、秋冬野菜の間引き・草取り、ナス、オクラ、ピーマンの収穫、稲刈り・稲架かけ、サツマイモ掘り、マリーゴールド染め
11月	稲の脱穀、チューリップなどの球根植え、ポップコーン試食、焼き芋、干し柿作り、カリン収穫・シロップ漬け作り、マリーゴールド種取り、タマネギ染め、タマネギ定植、秋冬野菜の間引き・草取り
12月	干し柿試食、餅つき、しめ縄作り（地域のボランティアの方のご指導）、秋冬野菜収穫、米（白米・玄米）試食、梅干し試食
1月	七草粥・味噌汁作り・試食、秋冬野菜収穫、ソラマメ定植、伐採した梅の木で工作、節分行事（鬼のお面作り・豆まき）
2月	紙漉き、雛人形・雛あられ作り、蚕の糸繰り（公益財団法人 衣笠繊維研究所 古澤壽治 先生）、ジャガイモ埋め込み
3月	修了式：紙漉きした紙で修了証書を作成

本年度も石山公民館、地域のボランティアスタッフ、滋賀大学教育学部の連携により、円滑に本事業を運営することができた。昨年度に引き続き、飼育・栽培から利用（調理・試食、染色など）までの一連の工程を経験することを目的に活動を行った。以下に例を挙げる。

稲の栽培：種もみの播種、田植え、草取り、生き物観察、稲刈り、稲架かけ、脱穀、粃摺り、精米、ご飯の試食、しめ縄作り、餅つき、七草粥作り、雛あられ作り

マリーゴールドの栽培：播種、鉢上げ、定植、マリーゴールド染め、種取り

蚕の飼育：蚕の飼育（家庭で継続して飼育、農場の桑の葉を収穫して餌にする）、専門家から蚕に関する講話を聴く、糸繰り、繭を使った雛人形作り

本事業に参加した子どもたちからは、印象に残っている活動として、ご飯の試食、餅つき、マリーゴールド染め、雛人形作り、焼き芋、ポップコーンの試食など飼育・栽培して得られたものを利用する活動が多く挙げられ、単発の活動で終わるのではなく、飼育・栽培から利用まで一連の工程を行うことが、農場を利用した体験学習を行う上で重要であると考えられた。

また本年度は、滋賀大学教育学部の学生が主体的に本活動に関わるような体制を整え、実施した。稲の栽培、野菜の栽培、蚕の飼育、梅の収穫・利用など学生が各自テーマを持ち、学部教員や地域ボランティアスタッフと連携して、活動計画の立案、準備、実施、評価を行った。本事業での活動に対する感想文から、学生は「活動の事前準備の程度により、活動の流れや子どもの理解・興味が大きく違っており、周到に事前準備をすることの重要性を痛感した」、「学生同士のサポートや地域のボランティアスタッフの方との連携の重要性を感じた」、「自分自身で企画を考え、調べたり準備したりして活動する中で、知識や行動力が不足していると感じ、今後の学生生活での学びに繋がりたい」、「普段関わることができない保護者との関わりを持てて良かった」、「活動を通して、困難や大変さは数多くあったが、それ以上に嬉しさや楽しさがあり、充実した時間であった」などを感じており、本事業を通して主体的に子どもや保護者、地域ボランティアスタッフ、学部教員と関わることで、体験学習において事前準備、他者との協働、専門性などが重要であることが経験的に学べたと考えられた。

4. 今後にむけて

現在、「食農教育」が求められているが、学校現場では十分に対応できていない。本事業は貴重な「食農教育」を行う場であり、今後も地域と連携して「食農教育」を行っていきたいと考えている。また、本事業で新規の体験プログラムを考案・実践することにより、プログラムの有効性を評価し、学校現場に還元したいと考えている。さらに、多くの学生が主体的に参加しており、将来教育現場で「食農教育」の体験活動を行える人材の育成、つまり「未来への食農教育」も積極的に行っていききたい。

（森 太郎）

1-31) 小学校理科天文分野における児童の思考力や活用力を高める教材開発

1. 事業名および担当者

事業名：『小学校理科天文分野における児童の思考力や活用力を高める教材開発』

担当者： 大山 真満（滋賀大学教育学部）

柳 哲平（滋賀大学教育学部附属小学校）

2. 事業の目的

小学校で学習する天文分野の「月の満ち欠け」は空間認識を必要とするため、理解を苦しむ児童や、どのように思考すると良いか悩む児童、学習した知識の何をどのように活用すると良いかを悩む児童も多い。そのため、児童の思考力や活用力を高める教材の開発が必要である。そこで、本研究はその第一段階として、子どもの陥りやすい考え方やつまづく点の把握をすることを目的とする。

3. 事業の概要

(1) 研究方法

研究対象者は、滋賀大学教育学部附属小学校第6学年の児童32人である。

研究方法として、児童の落ちりやすい考え方やつまづきやすい点を把握し、児童の思考力や活用力を高めるため、以下の7つのことを順に行う。

- i) アンケートの作成
- ii) 学習前のアンケート実施
- iii) アンケート結果の集計・検討
- iv) アンケート結果をもとにした教材や授業案の検討
- v) 授業の実施
- vi) 学習後のアンケート実施
- vii) アンケート結果の集計

(2) 作成アンケートの概要

作成したアンケート問題のねらいとその概要を順に述べる。

① 2次元の物体に関して、光源と影との関係に関する調査

地面に立てた棒と光を当てた際に、上空からみたときの影の方角を答える選択問題。

② 3次元の物体である球体表面にできる光の当たる部分と影の部分に関する調査

球体に光を当て、光に対し垂直な方向から見たときの球体表面にできる影のできかたを答える問題。

③ ②の要素に「距離」という概念を加えた場合に関する調査

②と同様に球体表面にできる影のでき方を答える問題。②との違いは、光源から距離の異なる3つ

の球体を置き、それぞれにできる影のでき方を答える点である。

④ 3次元の物体である三角錐表面にできる光の当たる部分に関する調査

②の球体を三角錐に変え、三角錐表面の光が当たる部分について答える問題。児童にとって、球体が理解しやすい物体かどうかを探る。

⑤ ②の球体を任意の方向から見た際の見かけの見え方に関する調査

②の球体を8方向からみたときの見かけの見え方について答える問題。

(3) 結果

学習後の児童の陥りやすい考え方やつまずく点について抜粋して述べる。

i) 問題②において図1のような誤答が得られた。この誤答は、学習前において最も多く見られた誤答でもある。光の当たった球体を真横からみたとき、影がちょうど半分にできることを認識できていない事が分かる。



図1. 球体にできる影の誤答例

ii) ②の問題に「距離」という概念を加えた問題③では、図2のような誤答が得られた。これは、本学部生にもよく見られる誤答である。距離が離れると光の強さが弱くなることに関して、光の弱さと光の当たる面積の理解を混同しているからである。

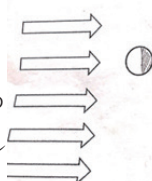


図2. 「距離」の概念を加えた場合の球体にできる影のできかたの誤答例

iii) 8方向から見た見かけの形を問う問題⑤では、いくつかの誤答に分かれた。その内の1例として図3を示す。これは、球体における影の変化も直線的に捉えている例である。これは本学部生にも多い誤答例である。

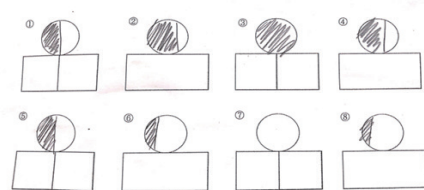


図3. 8方位から見た球体の影の見かけの見え方の誤答例

4. 今後に向けて

本研究において、児童と本学部生の陥りやすい考え方やつまずきやすい点が共通していることが分かった。次の第2段階として、空間認識トレーニングの実施や、本研究結果である陥りやすい考え方を克服するための教材や授業案の検討・開発が必要である。

(大山 真満)

1-32) 3歳児にふさわしい保育環境開発プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名は、「3歳児にふさわしい保育環境開発プロジェクト」であり、担当者は次のとおりである。

附属幼稚園：塩見弘子（代表者）、村井奈津美（3歳児学年主任）

大津市立逢坂幼稚園：井上真矢子（園長）、堤 可奈子

2. 事業の目的

昨年度は大津市より本園の3年保育の視察を重ね、3歳児の実態に合った指導計画・方法の開発に取り組んだ。本年度は大津市立幼稚園でも3年保育が順次スタートした。

3歳児の発達は、4、5歳児の発達とは異なる部分も多く、その特性を踏まえた保育環境が必要になる。実際に3年保育を進めていく中で、本園と共同しながら3歳児にふさわしい保育環境の開発を目指していきたい。

3. 事業の概要

今年度より逢坂幼稚園を始めとして3年保育がスタートした大津市立幼稚園教員が本園への視察研修の機会を年間を通してもつ。また、今年度は本園からも大津市立幼稚園を参観する機会をもつ。そこで幼児の実態から姿を読み取り、協議を重ね、その成長発達に合った環境・援助を明らかにし、実際の保育に生かし検証をしていく。

(1) 事業の日程

○保育及び施設環境の見学、講話、協議

附属幼稚園 6 / 26（8名）、7 / 28（30名）、10 / 5（6名）、2 / 20（9名）

逢坂幼稚園 1 / 24（2名）

○その他 11 / 17 附属幼稚園公開研究会参加

(2) 視察研修での学び

○附属幼稚園視察（大津市立幼稚園教諭）

- ・3歳児専用の園庭があり、見渡せる環境であるとともに、先生や好きな友達と一緒に遊べる小屋などもあり、お気に入りの場所を見つけて落ち着いて遊んでいた。「自分達の場所」が分かりやすいことで、安定して遊べることに繋がると感じた。
- ・靴をはきかえたり帽子をかぶる場所も子供達にとって分かりやすい動線になっていた。身支度の場所を分かりやすく整えることで、子供自ら動き出せるように支えることができると感じた。
- ・遊びの後の着替えや手洗いうがい、水分補給も、自分のロッカーの前でできることで子供にとっても分かりやすく教師も把握しやすくなっていた。着替えたものはテラスに子供が掛けに行っており、自分でできることを自分ですることの大切さを学んだ。そのためには、動線を考えた環境と、十分な広さが必要だと感じ自園の環境を見直した。



- ・砂や水といった素材そのものに触れて繰り返し遊べる環境が十分保障され、道具や環境は子供の発達に合わせ精選されていることが子供の安心感や意欲に繋がるように思った。
- ・教師が子供の思いに耳を傾けたり、同じことを楽しみながらゆったりと寄り添っておられた。また、教師間での情報の共有も保育中、盛んに行われており、みんなで子供を見ていく園の雰囲気の良さが感じられた。
- ・片付けは教師も一緒に楽しんだり、「洗い物」とすることで遊びながら綺麗になっていく楽しさを感じられるようにされていた。毎日の繰り返しの中で、子供達に任せることも増えてきたということ聞き、3歳児なりに綺麗にした気持ちよさを味わわせていくことが明日への期待にも繋がることが分かった。

○逢坂幼稚園視察（附属幼稚園教諭）

今年度より、大津市立幼稚園においても3年保育がスタートした。そのことに伴い、附属幼稚園3歳児担任が逢坂幼稚園を訪問し、参観を通して自分の保育を客観的に見直す機会になった。

3歳児の保育では特に安心して過ごせる場の作り方が大切になると思う。3歳児は個人差も大きく、また年度によって状況が違ふ。保育室での遊びの場の作り方も、遊びごとに区切った方がよいのか、緩やかに混じり合うような作り方がよいのか、その時々で一番合ったやり方を模索していくことが大切であると再確認できた。

3歳児なので材料や用具なども、扱いやすいもの、家庭に近いものから出していつているが、その出し方についても、どの時期にどのような出し方がよいのかを常に考えている。



4. 今後に向けて

大津市は一昨年より3年保育実施に向けて、年間を通じて附属幼稚園3年保育の参観，研修を行ってきた。今年度から大津市も3年保育が順次実施となり、お互いの保育の交流も始めた。園舎や園庭など、それぞれにある環境をどのように生かしていくか、足らないところはどうか、それぞれの園の工夫を出し合い、より3歳児にふさわしい環境を模索していきたい。

また、平成30年度より施行される幼稚園教育要領に示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は5歳児後半に見られるようになる姿であるが、3歳児、4歳児それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことに留意する必要があるとされている。3歳児は個人差も大きく育ちを長いスパンで見えていく必要があるが、「先生に親しみをもち、安心して過ごす時期（4～7月）」「いろいろなことに興味をもち、やりたいことを存分にする時期（8～11月）」「友達と一緒にいる楽しさを感じながら遊ぶ時期（12～3月）」3歳児それぞれの時期にふさわしい指導につながる環境や援助を探り、教育課程及び指導計画の編成に生かしていきたい。

（塩見 弘子）

1-33) 学習言語の力を伸ばす算数科の授業づくりとパフォーマンス評価

1. 事業名および担当者

事業名（研究テーマ）は「学習言語の力を伸ばす算数科の授業づくりとパフォーマンス評価」である。岸本実、神直人、畑稔彦、渡邊慶子（滋賀大学）と平井敏孝校長、研究主任金澤秀太朗教諭、中島大理教諭（長浜市立長浜北小学校）らと共同で研究を進めた。

2. 事業の目的

長浜市立長浜北小学校では、全校児童 804 名のうち、約 1 割を占める 81 名が外国籍児童である。母語の内訳は、ポルトガル語（ブラジル）が 42 名、スペイン語（アルゼンチン、ペルー、ボリビア、チリ）が 36 名、中国語（中国）1 名、ベトナム語（ベトナム）1 名、タガログ語（フィリピン）1 名である。近年外国人労働者も、短期間に転勤を繰り返し流動化している層と、長期間同一地域に住み、日本に定住化する層の二極に分かれる傾向がある。定住化志向の家庭でも、幼児期を日本人と一緒に経験して生活言語としての日本語の習得については不足がないにもかかわらず、学習言語としての日本語の習得における差が、徐々に顕在化し、学力格差につながるという課題も生じている。

そこで、本研究では、学習言語としての日本語能力を伸ばす算数科の授業のあり方を明らかにすることを目的とした。算数科の授業において、パフォーマンス課題に取り組むことにより、学習言語としての日本語を活用して思考力・判断力・表現力等を伸ばす授業づくりを進める。そのことにより外国人児童等の特別な配慮を必要とする児童のつまずきを早期に発見し、すべての児童の学習言語の力を伸ばすための、つまずきを活かして回復する教科指導法の開発を試みた。

さらに、算数科の枠にとどまらず次期学習指導要領でも重視される教科等横断的な指導に取り組むことで、学習言語としての日本語能力を伸ばすことができると考えた。研究のために何か特別な課題を付け足して取り組むというのではなく、これまで算数、国語、社会で行ってきた活動をつなぐことにより、教育効果をこれまで以上に高める方法が、多忙な学校現場においても取り組みやすい方法として提案できると考えたからである。

3. 事業の概要

(1) 主な事業

8 月に共同研究の打ち合わせを行い、校内研究の研究授業と研修会に参加した（6 月 21 日、10 月 25 日）。また、2 学期は定期的に授業参観を行い、3 学期には、1 枚ポートフォリオを活用して、3 年生において、算数「表とグラフ」、社会「昔の道具と人びとの暮らし」、国語「しりょうから分かる小学生のこと」の 3 つの単元を教科等横断的につなぐ指導に取り組んだ。

(2) 1 枚ポートフォリオと板書写真による学級担任と日本語指導教員の連携

1 枚ポートフォリオと板書写真を活用して、学級担任と日本語指導教員の連携を行った。

1 枚ポートフォリオとは、堀哲夫が提唱したもので、A3 用紙 1 枚（裏表）に、子どもの学習の記録や自己評価や相互評価、教師からのコメントをまとめ、学びの履歴や変容を記録したものである。これにより、子どもたちは「学ぶ喜び」や「学ぶことの大切さ」を実感するとともに、教師は自分の授業の振

り返りや評価に活用できるものである。ポートフォリオを1枚という限定を設けることにより、最小限の情報と努力で、最大の効果を発揮するように工夫されたものであり、多忙な学校現場での導入が容易である点が特徴である。(堀哲夫・2004.『1枚ポートフォリオ評価 理科』・日本標準)

3年算数「表とグラフ」の1枚ポートフォリオの構成の概要は次のとおりである。①パフォーマンス課題：毎日の自分の学習時間を記録し、グラフにまとめ、友だちのグラフと比較することによって、気づいたことをまとめよう。毎日の記録表。②～⑦各時間の中心となる問題とグラフ、⑧友だちのグラフ(2枚)からそれぞれ読み取ったこと、3つのグラフを比較して考えたことをまとめる。この単元はちょうど8時間扱いであったため、毎時間4分の1ずつのシートを記入して授業を進めた。

日本語指導に取り出した児童を指導するに際しては、このポートフォリオの学びの履歴と板書の写真を日本語指導教員は活用した。授業でのつまづきや達成度、授業の流れを理解して指導することにより、これまで以上に短時間の相談により、より効果的な補充学習をすることができ、次の時間に進めることができた。また、3年生4クラスでこの取り組みを実施したが、着任後3年以内の新人教師にとっては、単元の全体の流れを把握し、各時間を位置付けて指導することができるという効果もあった。

パフォーマンス課題については、調べた数値からグラフを作成したり、グラフから数値を読み取ったりすることはできても、2～3のグラフを比較して考えたことを、文章で表現することにつまづきが見られるケースが見られた。比較的平日の学習量が多いタイプの児童、土日の学習量が多いタイプの児童や、習い事などの特定の曜日について特に学習量の低下が目立つタイプの児童など、いくつかのタイプの児童がいた。この場合、一つ一つのグラフからそれらの特徴に気づくことができるのだが、複数の尺度を総合して考えるということが難しかったようである。これは日本人児童にも同様の傾向が見られたので、保存の概念が未確立な3年生という発達段階によるものでもないと推察された。

なお、外国人児童の場合、数値をグラフにし、グラフから数値や特徴を読み取る時は日本語で考えているようであるが、読み取った内容を比較して総合して自分の考えを表現する際は、一度母語で考えて日本語に置き換えるのか、それも日本語で考えることができるのかによって、達成度に差が生じると考えられる。この点の検証と指導方法の工夫については今後の課題としたい。

パフォーマンス課題の達成度を伸ばすためには、繰り返しの指導が有効である。そこで、今回は社会と国語においても、表とグラフの力を活用する指導を試みた。社会では、父母の世代、祖父母の世代、およそ100年前のような時代の変化によって、洗濯板→一層式洗濯機→二層式洗濯機→全自動洗濯機のように道具が変化し、それによって生活も変化していくことをとらえる単元において、父母が子どものころ遊びや遊び道具、祖父母の子どものころの遊びや遊び道具をアンケート調査し、その数値をグラフに表す学習を位置付けた。国語では、その資料からわかることを意見文に表し、外国人児童が学級にいるおかげで、社会生活の変化がより多様にとらえることができるという学習をしくんだ。

4. 今後に向けて

今年度は算数の校内研究に継続的に参加することで成果をあげることができた。しかし、1枚ポートフォリオや教科等横断的な指導は3学期の取り組みにとどまった。今後は、1学期から継続的に取り組むことで、外国人児童の学習言語力の向上に効果があることを実証していきたい。

(岸本 実)

1-34) 小学校における予防教育プログラムの開発・実践

1. 事業名および担当者

本事業は小学校における予防教育プログラムの開発・実践に関するものであり、担当者は次のとおりである。

- ・教育学部：芦谷道子（代表者・准教授）・中川栄太（大学院生）
- ・甲賀市立伴谷東小学校：中嶋政二（校長）・村田吉美（教諭）

2. 事業の目的

学校現場において、不登校やいじめ、暴力といった心理的問題は深刻化しており、特に小学校で増加傾向にあることが報告されている。滋賀県における平成 27 年度統計によると、小学校における暴力行為総発生件数は 175 件（前年比 30 件増加）、いじめ認知件数 3442 件（前年より 1718 件増加）、不登校児童数 398 人（前年より 20 人減少、中学校では 71 人増加）と深刻な状況が続いている。こういった問題への取り組みとして、事後対応のみではなく予防教育の必要性が西欧諸国を中心に注目され、日本においても様々なプログラムが開発されてきている。

本事業では、鳴門教育大学予防教育科学センターにて開発され、標準化された CD 教材などを通して比較的教員にも取り組みやすい予防教育プログラム「いのちと友情の学校予防教育」(TOP SELF: Trial of Prevention School Education for Life and Friendship) に注目した。TOP SELF において設定される教育目標は、健康や適応に影響するおおもとの心的特性（性格を中心とし、認知、感情、行動に及ぶ）の改善により、将来の健康や適応上の問題を予防、促進することとされる。本事業においては、滋賀県の小学校において TOP SELF を実践し、全校で継続的に取り組むことのできる、不登校・いじめ問題の予防教育プログラムを開発、実践することを目的とした。具体的な目的は以下の 2 点である。

- ① 鳴門教育大学の指導を受け、対象校の対象学年に合うプログラムの教材づくりを行う。
- ② 作成した教材をもとに、小学 3 年生を対象に、予防教育プログラム実践を行い、効果を検証する。

3. 事業の概要

滋賀県より「生きる力を育むモデル校」に指定されている伴谷東小学校において、「生きる力担当」の教諭と連携し、予防教育プログラムの開発、実践を行った。「TOP SELF」プログラムの開発を行っている鳴門教育大学予防教育科学センターにて、プログラム開発に携わる山崎勝之教授、内田香奈子准教授の指導、助言を仰ぎ、伴谷東小学校の現状に合ったプログラムを開発した。そして、3 年生全員（61 名）を対象に全 4 回の継続プログラムを実施し、効果評価を行った。実施時期は、第 1 回・第 2 回が 2 学期の 10 月～11 月、第 3 回・第 4 回を 3 学期の 2 月であった。効果評価としては、鳴門教育大学予防教育科学センター作成の自己意識評価質問紙を実施した。質問項目の内容は、「自分の良いところを知っていますか。」「友だちの良いところを知っていますか。」「自分のことを大切に思いますか。」など 12 項目で、4 段階評価で回答するものであった。

【プログラムの内容】

今回のプログラムの目的は、「自己信頼心（自信）の育成」とし、授業の内容として、以下の4つの操作目標を設定した。

- ・第1回：正（楽しい、嬉しいなど）の出来後を想起し、正感情を高めることができる。
- ・第2回：自己の長所を探すことができる。
- ・第3回：他者の長所を探すことができ、他者の価値を肯定することができる。
- ・第4回：自分の夢、将来について考えることができる。

【プログラム実施時の子どもたちの様子について】

本プログラムの構成は、子どもたちに考えさせたい内容をキャラクターからの挑戦状という形で設定しており、子どもたちの興味をひく非常に取り組みやすいものであった。学年ごとに標準化されたアニメ教材を用い、子どもたちはアニメの世界に引き込まれ、スムーズに活動に入っていくことができた。考えを発表する活動では、まちがいさがしゲームなどを行い、グループで協力して答えられたら発表するという流れで行った。子どもたちは、ゲームに集中し、見つけた答えを積極的に発表していた。そして、自分たちがカードに書いたことを一生懸命発言していた。中には答えにくい子もいたが、グループの友だちに助けてもらうなどして、自分の考えを友達と共有することができた。

今回のプログラムでは、全体的に良いことを中心に発表し合い、賞賛の拍手や友だちからの励ましの機会も多かったため、授業の雰囲気が温かいものになった。

【子どもたちのふり返り】

授業の最後には、ふり返りとして感じたことや考えたことを発表する時間を設けた。回を重ねるにつれて、「ゲームが楽しかった」「ゲームがおもしろかった」などのゲームに対する感想が減り、プログラムのねらいにせまる感想が増えた。実際の感想として、「自分の良いところに気づけてよかった」「みんなが自分の良いところを見つけて、みんなにはこんな良いところがあるんだなあとと思った」「みんなの前で発表することができてうれしい気持ちになった」「みんなの前で発表するのははずかしかったけど、大きな声で発表することをがんばれた」「友だちに良いところを見つけてもらってうれしかった」「みんなに自分の良いところをいろいろ見つけてもらってよかった」などが出された。

【考察】

本プログラムのアニメやゲームを通して自分や他人を見つめるという授業の形態は、対象校の3年生の実態に合っており、子どもたちは生き生きと夢中になって楽しく授業に取り組むことができ、トップセルフの一つの目標である感情を動かす体験となったことが感じられた。そしてさらに、自分や他人を認めることのできる機会となったことが振り返りシートや授業の様子から伝わり、予防教育としての有効性が確認された。次年度以降もぜひ継続して取り入れていきたいプログラムであった。

4. 今後に向けて

4回目のプログラムが終了していないため、効果検討が本報告には間に合わなかったが、終了後に検証し、それをもとに来年度も継続実施を検討している。今回は、学級活動の時間としてプログラムを実施したが、継続して時間を確保していくためには、学校全体でカリキュラムを考えていく必要がある。また、今回は「生きる力」担当が授業を実施したが、学校全体で取り組みを進めていくためには、担任が授業できるよう研修やサポートを行っていく必要があると考える。

（芦谷 道子）

2 石山プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名は、石山プロジェクトであり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：河口眞佐男（代表者），畑 稔彦

大津市立石山小学校：横山泰史（校長）

大津市立石山幼稚園：岸本光香（園長）

2. 事業の目的

子どもたちの多様化した課題を抱える今日の学校状況から、新規採用教員といえども、即戦力として実践的指導力や教員としての専門性が強く求められるようになっている。本学部では、平成17年度に「石山プロジェクト」を立ち上げ、以後大学近隣の公立小学校と公立幼稚園の協力を得て、学生を恒常的に学校の教育活動に参加させる活動（スクールサポーター活動）に取り組んでいる。この活動を通して、学生が子供や学校の実情を体験的に知るだけでなく、具体の場面における子供の心情の理解や教師として求められる対応の仕方など、実践的な指導力を身に付け、教師としての対応力を高めることをねらいとしている。

3. 事業の概要

本事業は、前担当者の定年退職をもって終了することとされていたが、当該校園および関係者からの強い要望もあり、検討の結果、新たに大学側の担当者を決めて再開することとなった。したがって例年の活動開始時期をずらして、幼稚園は6月から、小学校は11月からとした。

（1）石山幼稚園へのスクールサポーターの派遣・活動期間、事前指導、派遣人数等

春学期：活動期間：6～9月，事前打ち合わせ 6/14（石山幼）

活動開始：6/23，派遣人数：6名（3回生：6名）

秋学期：活動期間：11～2月，事前指導：10/24（大学），10/27（石山幼）

活動開始：11/1，派遣人数：未定

・活動内容：4歳児，5歳児の保育補助

（2）石山小学校へのスクールサポーターの派遣

・活動期間，事前指導，派遣人数等

秋学期：活動期間：11～2月，事前指導：10/24（大学），教員との打合せ 10/30（石山小）

活動開始：11/1，派遣人数：12名（1回生：1名 2回生：3名 3回生：8名）

・活動内容：各教科等で基礎的な内容の習熟を図る指導補助

各教科や総合的な学習の時間，遠足的行事等での校外学習の引率補助，

生活単元学習（特別支援学級）における指導補助

（3）定例省察会の開催

毎月下旬に幼稚園と小学校の校種別に，省察会を大学で開催。

外部講師と開催日は下記のとおりである。

◆幼稚園 ・退職園長で県教委の初任者研修巡回指導員安倍映子先

・省察会開催日 7/28 11/29 1/9

◆小学校 ・退職女性校長会から次の6名の先生方から毎回2名ずつの先生方を派遣

中谷裕美先生 稲垣明美先生 川西信子先生 甲津美紀子先生 西川典子先生

2 石山プロジェクト

窓口として退職女性校長会 諏訪栄子先生にご担当いただく。・省察会開催日 11/28 12/19 1/23

省察会では、学生が当該月の学校園でのスクールサポート活動を振り返り、やり甲斐や感じたこと自信がついたこと、自らの成長を自覚できたこと、課題に思っていること、悩んだり、戸惑ったりしていること、子どもの言動等をどう理解すればいいか分からなかったこと、指導や教育に当たっておられる先生の意図などについて、悩みや疑問点を出し合い、互いに意見を交流する。この場には学校園での経験豊かな外部講師の先生方を迎えている。先生方からは学生の提示した課題について明快な返答や励ましなどの指導助言を受けることで、学生自身が課題を明確にし、子どもたちへの対応改善に意欲を高める機会となっている。

(4) 学期末報告会の開催

実施日 幼稚園：2/5 ， 小学校：2/16 場所 幼稚園：大学 小学校：石山小学校図書室

報告会には、学生や指導助言の外部講師と受け入れ校園の教員が一堂に会する。学生一人一人からは、スクールサポートの機会と指導助言をいただいたことへの感謝を述べ、自らの成長と気づきや発見について順番に発表した。また、個々の学生の担当となって指導いただいた学校園の先生からは、ねぎらいの言葉と成果と課題についてコメントをいただいた。最後に、外部講師からの指導助言をいただき報告会を終了した。後日、省察会や報告会のアドバイザーを務めていただいた先生方から下記のような感想などを報告いただいた。

- ・教職を目指す学生の、誠実で、一生懸命な姿勢に感心し子どもたちを観察する視点の良さなどすばらしいものがあつた。
- ・自分たちのアドバイスが学生さんたちのお役に立てたかという心配はあつた。
- ・学生さんにもいろいろ事情もあつたとは思いますが、参加人数が少なかったこと、コートを脱がない礼儀に疎いところや幼さを感じる質問内容にこのまま現場に出て行って大丈夫かと心配になった。
- ・この「石山プロジェクト」がより一層、教職を目指す学生さんのためになるよう、私どももより良いアドバイザーができますよう努力したいと思います。



石山幼稚園省察会



石山小学校報告会

(文責：河口 眞佐男)

3 学力向上プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名は、「学力向上プロジェクト」であり、担当者は次の通りである。

豊郷町教育委員会事務局学校教育課：成宮弘幸（課長）

豊郷町立豊日中学校：長澤和馬（教務主任），水谷秀昭（教諭）

豊郷町立豊郷小学校：辰巳育子（教務主任），

豊郷町立日栄小学校：安居猛司（教務主任），丸本絵巳（教諭）

滋賀大学教職大学院：大野裕己，畑 稔彦



事業では，学校経営の立場からの専門的な研究支援を大野が担当し，研究の推進と取りまとめを成宮（研究代表）が担当し，研究全般の総括支援を畑が担当した。また，各校における現状の分析と来年度に向けての立案を長澤，辰巳，安居が担当した。

2. 事業の目的

平成 29 年 3 月公示の新学習指導要領では，各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立を改訂のポイントの 1 つとしている。その背景には，次のことが挙げられる。

○ 教科等の目標や内容を見渡し，特に学習の基盤となる資質・能力（言語能力，情報活用能力，問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためには，教科等横断的な学習を充実する必要があること。

○ 「主体的・対話的で深い学び」の充実には単元など数コマ程度の授業のまとまりの中で，習得・活用・探究のバランスを工夫することが重要であること。

そのため，学校全体として，教育内容や時間の適切な配分，必要な人的・物的体制の確保，実施状況に基づく改善などを通して，教育課程に基づく教育活動の質を向上させ，学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントを確立することが求められている。豊郷町教育委員会では，管内の小中学校の教務主任を集め，新学習指導要領に向けたカリキュラム・マネジメントについて研修を実施しており，本事業は学術的側面から支援をすることを目的としている。

3. 事業の概要

本年度は，2 回の研究会を実施し，県総合教育センターの『学ぶリーダー研修』で創ったカリキュラム・マネジメントシートも活用しながら各校の実践の交流からはじめた。教務主任として，内容の改善については，その中身の「連続性」「子どもの資質・能力の育ちの実感（検証）」との関係，その内容を支える「条件面」，とりわけ教員の集団的成熟度を追加して見渡せるようになることを目指した。

（1）第 1 回 教務主任研修 11 月 27 日（月） 15:00 ～ 16:45

各校の教務主任が，自校の教育課程をカリキュラム・マネジメントの視点で書き並べたレポートをもとに説明した。どのレポートもこれまでと大差なく，各校の学力向上の取組に関する特徴的な教育課程が平面的に並べられていた。そのため，カリキュラム・マネジメントの視点をどう取り入れていけばよいかについて，具体的には「旗を立てる」ことで目印をつけること，カリキュラム・マネジメントシートの活用によって，教育課程を全体的に捉えることなどについて，大野が助言した。

3 学力向上プロジェクト

(2) 第2回 教務主任研修 2月19日(月) 15:00～16:45

各校のカリキュラム・マネジメントシートをもとに、第1回研究会後工夫した点について交流し、話合った。主な意見として、

- ・学校のシートにあれもこれも大事だからと多くのことを盛り込みすぎると焦点がぼやけてしまい、「チーム学校」として取り組むにはマイナスである。核となるものを投げ込むことで、そこにみんなでいろいろ肉付けをしていくイメージで学校のカリキュラム・マネジメントを考えていく方が、教科や他の教育活動との関連性がよく分かる。

- ・カリキュラム・マネジメントシートで整理することで、やることが明確になり、行事の精選にもつながる。今学校でやっていることを、さらに効率よくできることが大事だと思った。また、行事がパフォーマンス的になりつつあるので、何を大事にするのかを若手教員に伝えていくことも大切だと感じた。
- ・家庭学習の充実を図るために、小学校では自主学習ノートの展示や家庭への啓発をしているとの報告があった。大野からは、地域の素材を教科学習に取り入れ、学びの中で地域のよさを学校全体で確認する取組を考えられないかという視点が示された。
- ・カリキュラム・マネジメントを取組として捉え、教務主任から学校や地域に『取組によって生まれたよさ』を発信していきたい。

といった内容が出された。

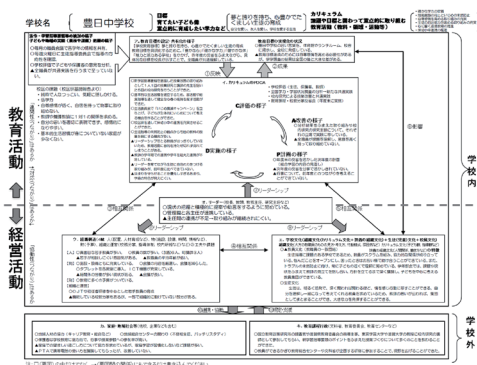
(3) 研修後の振り返り

2回の研修をどのように生かすかについて、ある教諭は次のように述べている。「学校教育目標を実現させるために、教育活動のどこに力を入れていくのかを全教員の共通理解のもと進めていく必要がある中で、カリキュラム・マネジメントを押し進めていく重要性を強く感じた。今後は、今年度の総括から次年度に向けて活動を検討していく際に、カリキュラム・マネジメント分析シートを用いて校務分掌担当者で考えてもらうことを行えたらと考えている。また、次年度は、校内研修の機会を利用し、カリキュラム・マネジメントの推進に向けて教員の意識を高くできるような取り組みを考えていきたい。」このように参加した教諭それぞれが、各学校でのカリキュラム・マネジメントの確立の重要性と全教職員で取り組むことの必要性を確認し、次年度に向けた具体的な展望をもつことができた。

4. 今後に向けて

新学習指導要領では、「何ができるようになるか。」という視点で教育課程を捉えることが求められている。そのことを教員一人一人が意識していくことが大切であり、それは、大野の言葉にあった「自分事として捉える」ということにも繋がると考える。そのことを実践するために、各校において次年度は、「目指す子どもの姿のみ、みんなで作ってみる」ことから始め、そこに全教職員で肉付けをしていくイメージで行事を設定していきたい。教務主任は、学校の教育課程全体の中で、それぞれの教育課程がどのような意味をもつのかをおさえたカリキュラム・マネジメントをしていくことが大切であり、来年度は各校で考えたカリキュラムを実際に運用し、その効果について検証したい。

(文責：成宮 弘幸・畑 稔彦)



4 出前講座

この出前講座は、滋賀県内の学校等における研修や講演会に教育学部教員を講師として派遣する制度である。既に、教育学部教員は県や市町教育委員会や各学校の依頼を受け、研修講師の役割を遂行している。しかし、これらのネットワークが成立していない場合や新任教員の派遣の場合に限っては、本出前講座は有効なものであろう。

平成 29 年度の出前講座については、小学校 2 校、高校 1 校、幼稚園 1 園、特別支援学校 8 校の計 12 の実績であった。他にもいくつか依頼があったが、日程等の関係で成立しなかったケースもある。

多くの教育関係者の方々に、本出前講座を利用していただくために、今年度は出前講座の講座一覧を刷新した。また、出前講座一覧を本学部ホームページにアップロードした。下記がその出前講座一覧である。

国語教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
国語教育	近江国と和歌	井ノ口 史 (いのぐち ふみ)	国語教育講座 (日本古代文学)	児童・生徒(中・高)教員(中・高) 保護者市民一般	古代から近世まで、それぞれの時代背景を踏まえつつ近江国に関連する和歌を紹介。近江国(現在の滋賀県内)には、和歌に詠まれた地名が少なくありません。いかなる風景が描写されているのか、和歌を通じて近江国の魅力を再発見することをめざします。
国語教育	書とその周辺	中村 史朗 (なかむら しろう)	国語教育講座(書道)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者 市民一般	人はどのようにして「書之美」を自覚するようになったのでしょうか。王羲之や空海の筆跡はどこがそんなに上手いのでしょうか。生活の場において「手書き」の機会が減って、書という表現の領域は失われてしまうのでしょうか。書と周辺のさまざまな問題を取り上げます。講義と実習をあわせて実施することも可能です。
国語教育	国語教育における学びの探究	長岡 由記 (ながおか ゆき)	国語教育講座 (国語教育学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特)	近年、さまざまな言語活動を取り入れた国語学習が行われています。国語の学習における学びの手応えは必ずしも得やすいものではなく、言語活動を取り入れた学習の成果と課題も明らかになりつつあります。そこで、演習を交えた講義を行い、国語教育における学びについて具体的な学習材や学習指導法を取り上げながら探究していきたいと思います。
国語教育	唐詩を読もう	二宮 美那子 (にのみや みなこ)	国語教育講座 (中国古典文学)	生徒(中・高)教員(小・中・高) 市民一般	中国古典詩を代表するのが唐詩(唐代に作られた詩)です。唐詩には、古くから日本人に愛されてきた多くの素晴らしい作品があります。この講義では、作品の背景を丁寧に解説しながら、漢字一文字一文字にこめられた意味を大切に唐詩を読み解き、その豊かな世界をご紹介します。
国語教育	方言を考える	松丸 真大 (まつまる みちお)	国語教育講座 (日本語学/方言学)	生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者市民一般	ひとくちに日本語といっても、その内実は人によって、または場面によって異なります。その中でも地域による言葉の違い(=方言)は多くの人が興味を持つテーマです。この講義では日本語の方言をとりあげ、なぜ・どのように方言があるのかを考えていきます。この授業を通して、言葉について考えることの楽しさに気づいていただければ幸いです。

社会教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
社会科教育	地理から考える物語の舞台	安藤 哲郎 (あんどう てつろう)	社会科教育講座 (地理学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	説話などの古典を読むと、いくつか地名が出てきます。こういった地名と物語の内容を手がかりとして地図を作りながら考えると、物語が作られた時代の人々が物語の舞台となった場所についてどのような認識を持っていたのか分かります。地図やパネルを使いながら、地理から物語の舞台について一緒に考えてみましょう。

4 出前講座

分野	題名	講師	講座	対象	内容
社会科教育	地理から考える物語の舞台	安藤 哲郎 (あんどう てつろう)	社会科教育講座 (地理学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・特) 市民一般	説話などの古典を読むと、いくつか地名が出てきます。こういった地名と物語の内容を手がかりとして地図を作りながら考えると、物語が作られた時代の人々が物語の舞台となった場所についてどのような認識を持っていたのか分かります。地図やパネルを使いながら、地理から物語の舞台について一緒に考えてみましょう。
社会科教育	史料を基礎と日本史 (前近代史)	宇佐見 隆之 (うさみ たかゆき)	社会科教育講座 (日本史学／日本中世史)	児童・生徒(小6以上) 教員(小・中・高)	歴史の記述は、すべて史料に基づいて行われています。このため、記述の背景にある史料の理解なしに理解できません。史料と教科書の記述を照らし合わせながら日本前近代史への理解を深めましょう。
社会科教育	古代ローマ史にみる曖昧な「史実」	大清水 裕 (おしみず ゆたか)	社会科教育講座 (西洋史/古代ローマ史)	児童生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	歴史学は、様々な史資料を用いて過去の社会を再構成しようとする学問です。しかし、そこで用いる史資料が互いに矛盾していたり、あるいは荒唐無稽だったりすることは少なくありません。本講義では、古代ローマ史の中から有名な事件を取り上げ、人口に膾炙している「史実」の曖昧さと、「史実」を確定しようとする歴史学の営みをご紹介します。
社会科教育	論理学初歩	齋藤 浩文 (さいとう ひろふみ)	社会科教育講座 (哲学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者 市民一般	論理学への入門として、以下の2つのいずれか、または、両方について講義します。 (1) 形式論理学の初歩について紹介しながら、論理とは何か、そして、論理的であるとはどういうことかを考えます。 (2) 非形式論理学を背景として成立したクリティカル・リズニングについて、その基本の紹介と実践を目指した演習を行います。
社会科教育	滋賀の近代史	馬場 義弘 (ばんば よしひろ)	社会科教育講座 (政治学/歴史学)	市民一般	明治前期に滋賀県の県令(のちの県知事)を務めた松田道之(初代、明治4年11月～明治8年3月)、龍手田安定(二代、明治8年5月～明治17年7月)を中心に、近代国家の形成と滋賀県政について考えます。
社会科教育	景観写真の観賞と教材化	松田 隆典 (まつだ たかのり)	社会科教育講座 (人文地理学)	児童・生徒(小・中・高) 教員(小・中・高)保護者 市民一般	WEB上に多く掲載されている景観写真の観賞の仕方について、実例をもとにわかりやすく説明するとともに、社会科や地歴科・公民科のための教材化の可能性について示します。具体的テーマとしては、視覚的にわかりにくい気候を植生写真で説明したり、国際理解のために必要な社会的コンテクストを都市景観写真などで紹介します。
社会科教育	身近な事件をもとに法裁判の役割を考える	渡辺 暁彦 (わたなべ あきひこ)	社会科教育講座 (法律学/日本国憲法)	生徒(小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者 市民一般	市民も「裁判員」として裁判に関わる時代となりました。憲法改正をめぐる議論も盛んです。法や憲法、そして裁判に対する関心も高まりつつあるようです。本講義では、最近の身近な事件や話題を取り上げ、実際の判決文なども活用しながら、日本国憲法や裁判についての理解を深めていきたいと考えています。

数学教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
数学教育	正多面体とその数理	篠原 雅史 (しのはら まさし)	数学教育講座 (離散幾何学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・高・特)保護者 市民一般	正多面体はプラトンの多面体として古くから知られていて、正四面体、正六面体(立方体)、正八面体、正十二面体、正二十面体の5種類があります。実際に正多面体を作ったり、展開したり、計算したりすることを通して、正多面体の対称性やその美しさを体感してもらうことを目標とします。
数学教育	無限の考え方	神直人 (じんなおんど)	数学教育講座 (解析学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者 市民一般	私たちは小学校の頃から無限の考え方を利用しています。無限の考え方を利用すると多くのことが明らかになる一方で、無限のパラドックスというものも存在します。この無限の持つ二面を紹介することで算数・数学の面白さ、考えることの楽しさに気づいてもらえればいいと思います。
数学教育	非線形現象の解析	鈴木宏昌 (すずきひろまさ)	数学教育講座 (解析学)	生徒(高) 教員(中・高)	私たちの身の回りで見られる様々な非線形現象は、しばしば数理モデル方程式で表されます。本講義では、数理生物学における生物個体群のモデルや、化学反応のモデル方程式の解析を通じて、数学と自然科学との関わり的一面を紹介します。モデル方程式にもとづいた計算機シミュレーションも紹介する予定です。
数学教育	算数・数学教育の理論と実際	高澤茂樹 (たかざわしげき)	数学教育講座 (数学教育学)	教員(小・中)	算数・数学科の教授・学習過程について、理論的研究を教育実践にどのようにいかすかを検討する。特に、教師として子どもたちの数学的認識をどのように捉え、それを基にしてどのように指導するべきかについて考えたい。

分野	題名	講師	講座	対象	内容
数学教育	正多面体とその数理	篠原 雅史 (しのはら まさし)	数学教育講座 (離散幾何学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小高・特)保護者 市民一般	正多面体はプラトンの多面体として古くから知られていて、正四面体、正六面体(立方体)、正八面体、正十二面体、正二十面体の5種類があります。実際に正多面体を作ったり、展開したり、計算したりすることを通して、正多面体の対称性やその美しさを体感してもらうことを目標とします。
数学教育	無限の考え方	神直人 (じんなおんど)	数学教育講座 (解析学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者 市民一般	私たちは小学校の頃から無限の考え方を利用しています。無限の考え方を利用すると多くのことが明らかになる一方で、無限のパラドックスというものも存在します。この無限の持つ二面を紹介することで算数・数学の面白さ、考えることの楽しさに気づいてもらえればいいと思います。
数学教育	非線形現象の解析	鈴木宏昌 (すずきひろまさ)	数学教育講座 (解析学)	生徒(高) 教員(中・高)	私たちの身の回りで見られる様々な非線形現象は、しばしば数理モデル方程式で表されます。本講義では、数理生物学における生物個体群のモデルや、化学反応のモデル方程式の解析を通じて、数学と自然科学との関わりの一面を紹介します。モデル方程式にもとづいた計算機シミュレーションも紹介する予定です。
数学教育	算数・数学教育の理論と実際	高澤茂樹 (たかさわしげき)	数学教育講座 (数学教育学)	教員(小・中)	算数・数学科の教授・学習過程について、理論的研究を教育実践にどのようにいかすかを検討する。特に、教師として子どもたちの数学的認識をどのように捉え、それを基にしてどのように指導するべきかについて考えたい。
数学教育	江戸時代の数遊びから見る現代数学	長谷川 武博 (はせがわ たけひろ)	数学教育講座 (代数学)	教員(中・高) 児童生徒(高)	江戸時代の和算家 吉田光由(みつよし)によって書かれた和算書「塵劫記(じんこうき)」に収録されている文字遊び・数遊びに「目付字(めつけじ)」・「継子立(ままこだて)」などがあります。これらの遊びを紹介し、その背後に隠れている数学を考えます。具体的にはn進法や数列などが隠れています。
数学教育	数学的ジレンマを使った対話による算数・数学科授業	渡辺慶子 (わたなべけいこ)	数学教育講座 (数学教育学)	教員(小・中・高)	「算数・数学科の授業で先生と児童・生徒たちが如何にして対話をし、新たな知識を作り上げていくのか」について、具体的な教材(学習・指導の内容、具体的な問題)をもとに議論します。対話型授業の構造と展開を探索した上で、「話し合い」を取り入れた授業における教師の役割についても議論したいと思います。

理科教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
理科教育	コミュニケーショントレーニング	加納 圭 (かのう けい)	理科教育講座 (科学コミュニケーション)	児童・生徒(中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	滋賀大学に通う大学生が授業に求めていること第1位(滋賀大学キャリア通信:サンクス 2013 年 1 月 7 日号より)であった「コミュニケーション能力」の向上を目指したトレーニングプログラムです。科学の内容について「伝える・伝える・分かち合う」ができるようになります。
理科教育	細胞をつくっている物質・脂質	糸乗 前 (いとのり さき)	理科教育講座 (生化学)	生徒(中・高)	生物を形作っている細胞は脂質でおおわれた袋で、その外側には特有の成分が含まれています。その成分を調べることは、細胞にとつてあるいは生物にとって重要な情報を与えてくれます。本講義では「セラムド」などの、どこかで聞いたことのある脂質を含め、色々な生き物の脂質の話とどのように調べるかなどの話をします。
理科教育	①太陽の科学 ②天体観望会 (夜間実習)	大山 真満 (おおやま まさみつ)	理科教育講座 (太陽物理学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(小・中・高)	①太陽は、宇宙に浮かぶ平凡な星の一つに過ぎない。しかし、地球に直接的に影響を与え、その姿を詳細に観測できる唯一の恒星である。この太陽に焦点をあて、最新の画像や動画も用いながら、太陽の素顔を紹介する。
理科教育	物理学におけるシミュレーション方法	神山 保 (こうやま たもつ)	理科教育講座 (物理学)	生徒(高) 教員(高)	自然科学の研究は観測と実験を基礎にしていますが、両方とも難しい場合や、現象を理解するためにたてられた理論の検証にシミュレーションが使われます。液体気体の相変化をはじめとする物質における様々な相転移に対するコンピュータシミュレーションの方法を紹介します。エクセルを使った誰でも簡単にできる方法もお話しします。
理科教育	物性物理学入門	恒川 雅典 (つねかわ まさのり)	理科教育講座 (物理学／物性物理学)	生徒(高) 教員(高)	「物性」といってもなじみが薄いかもしれませんが、実は「物性物理学」は素粒子・原子核・宇宙物理学と並ぶ分野の1つです。最新の科学技術を根拠から支えている物質科学の中でも物質の成り立ちや現象などを、量子力学や統計力学などの物理的な考え方・手法の立場から研究するのが「物性物理学」です。本講義では、身近な例をあげながら「物性物理学」についてお話しします。

4 出前講座

分野	題名	講師	講座	対象	内容
理科教育	私たちの化学	徳田陽明 (とくだようめい)	理科教育講座 (無機化学/ 物理化学)	教員(小・中・高)	化学が私たちの暮らしをいかに豊かなものとしているかについて講習します。また、小中高での学びがどのように大学に接続するのかについて酸とアルカリをテーマに説明します。準備や片付け(廃棄を含む)の簡単な化学の実験を体験して頂き、生活用品を使った実験についても紹介します。
理科教育	遺伝情報とは何か?	古橋 潔 (ふるはし きよし)	理科教育講座 (生物学)	生徒(高)	生命科学は近年目覚ましい進歩を遂げていますが、DNAと遺伝子の違いはおわかりでしょうか?この講座では遺伝情報がどのようなもので、どのように使われているかについて、身近な例を挙げて、しかし最先端の技術によって得られた知見も盛り込みながら説明します。

音楽教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
音楽教育	ピアノ演奏法	犬伏 純子 (いぬぶし すみこ)	音楽教育講座 (器楽/ピアノ)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	合唱や独唱の伴奏について、歌とのアンサンブルとしての役割を認識しながら、どのように音楽を組み立て、表現の可能性を広げるかを受講者の演奏をおとして考えたいと思います。
音楽教育	現代社会と音楽	杉江 淑子 (すぎえ よしこ)	音楽教育講座 (音楽科教育)	教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	現代社会における音楽の多様な姿について、若者文化、世代、地域社会、マスメディアといった視点からとらえらるとともに、文化政策や教育との関連について考えます。
音楽教育	オーボエ演奏法/ 木管アンサンブル	中根 庸介 (なかね ようすけ)	音楽教育講座 (オーボエ/ 木管合奏)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	オーボエの経験者を対象に、基本的奏法を学び、練習曲集などを用いて音楽的な表現を学びます。木管を中心としたアンサンブル(木管四重奏、五重奏、ピアノと管楽の五重奏、六重奏、など)を通して、より高度な音楽作りを学びます。
音楽教育	楽しい音楽づくり	林 睦 (はやし むつみ)	音楽教育講座 (音楽教育)	教員(幼・小・中・高・特)	音楽づくり、創作のワークショップをします。教師向けのワークショップや講習会、児童・生徒向けの授業のデモンストレーションもします。楽器がなくても、ピアノが弾けなくても、おもしろい音楽を作る方法があります。楽しく音楽をつくり、子どもたちが自らの表現に目覚める瞬間を一緒に体験できたらと思います。
音楽教育	音による表現を めぐって	若林 千春 (わかばやし ちはる)	音楽教育講座 (作曲/音楽理論)	教員(中・高・特)保護者 市民一般	お芝居の台詞に、その場に適した演技があるように、音楽にもそれぞれ適切な表現の方向付けがあります。「ここで音楽はどんな台詞を演じているの?」という問題を、一緒に考えてみましょう。楽譜に書かれていない「とても大切なこと」を見つけたり、簡単な音楽文法のおさらいや、創作の実践などを通して、音による表現を共に深めてゆく場を体験してみましよう。
音楽教育	本当の「声」と出会う～ ヴォイストレーニング～	渡邊 史 (わたなべ あや)	音楽教育講座(声楽)	児童・生徒(小4年～中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者市民一般 その他(企業社内研修、マナー講座等)	人間の表現ツール、コミュニケーション手段として「声」は重要な役割を担っています。みなさんの「声」の可能性を見つめなおしてみませんか? 発声ストレッチ、呼吸トレーニングを経て、身体を芯から使いながら「声」と向き合う時間です。歌に、そして朗読にも、ちょっとしたコツで生まれる大きな変化を楽しみにご参加ください。

美術教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
美術教育	西洋絵画鑑賞入門 ー「絵を見る」から 「絵を読む」へー	谷田 博幸 (たにた ひろゆき)	美術教育講 (美術理論/美術史)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特)保護者 市民一般	絵というものを単に感覚的・主観的に「見る」のではなく、一步作品に踏み込んで客観的に絵を「読む」。その方法をスライドを使ってやさしく解説します。
美術教育	子どもの絵の見方、描かせ方、造形遊びの すずめ方	新聞 伸也 (にいげき しんや)	美術教育講座 (美術教育)	教員(幼・小・中)	子どもの絵の見方や描かせ方、また「造形遊び」の具体的な指導方法について、各学校の先生方の課題に応じながら講義や演習を行います。

分野	題名	講師	講座	対象	内容
美術教育	入門アート～ラクガキからアール・ブリュットまで～	藤田 昌宏 (ふじた まさひろ)	美術教育講座 (彫刻／現代美術)	児童・生徒(小4以上・中・高) 教員(幼・小・高・特) その他(福祉関連作業所など)	ラクガキを描くことから始めます。ラクガキを見せあいっこし、ラクガキの名作を鑑賞？し、そこから見えてくる表現の楽しさ・不思議さを感じてみてください。そこからの展開は、「アールブリュット」「速写クロッキー」「エガオ絵」「目隠し彫刻」などなど、受講してくださる願ふれやリクエストでアレンジします。
美術教育	グラフィックデザインの世界	世ノ一 善生 (よのいち よしお)	美術教育講座 (グラフィックデザイン)	生徒(中・高) 教員(小・中・高) 保護者 市民一般	グラフィックデザインでは、ポスターや新聞広告などの広告物、パッケージ、雑誌、書籍装丁など様々なものを対象としますが、これらの多くは大量生産されて消費されてゆきます。しかしそのようなものだから、漫然と作られた価値の低いものという訳ではありません。ここでは図版資料を提示しながらその素晴らしさについてお話ししたいと思います。

保健体育教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
保健体育教育	ストレスって何？ —「こころの健康」を考える—	大平 雅子 (おおひら まさこ)	保健体育講座 (衛生学／健康科学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	誰もが聞いたことがあるストレスという言葉。その言葉の本来の意味を解説しながら、「こころの健康」について様々な視点から考えていきます。
保健体育教育	できる・わかる・かかわり合う体育授業の理論と方法	加登本 仁 (かどもと ひとし)	保健体育講座 (体育科教育)	教員(小・中・高)	子どもたちが学び合い育ち合う体育授業はどのように実現できるのか。いま教師に求められる考え方や指導性はどのようなものか、協同的な学びをどのようにデザインし、評価していけばよいのか等、学習集団づくりの理論と方法について考えていきましょう。
保健体育教育	スポーツと国際交流・異文化と理解	平井 肇 (ひらい はじめ)	保健体育講座 (体育学／スポーツ社会学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・中・高・特) 保護者	・スポーツの果たす社会的、文化的役割について、各国のスポーツ事情を通して紹介します。 ・スポーツを通じた国際交流や異文化理解の意義と実際について紹介します。
保健体育教育	生理学の基礎に基づいた効果的な運動・トレーニング	松田 繁樹 (まつだ しげき)	保健体育講座 (体力科学／生理学)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	運動・トレーニングを行う際には、ヒトの生理的特徴や科学的知見に基づいた合理的なトレーニングをするべきです。本講義では、運動生理学の基礎を踏まえたうえで、効果的な運動・トレーニングについて考えていきます。

技術・情報教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
技術・情報教育	金属材料のこれから	磯西 和夫 (いそにし かずお)	技術教育講座 (金属加工学／粉末冶金)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	金属材料は最も多く用いられている材料の一つである。最近、既存の金属をしのぐ材料特性が求められている。このような材料は溶解－塑性加工－切削による従来の加工が不可能な場合が多い。その一解決法が粉末を用いた素材製造・加工・成形法である。粉末冶金法による材料開発と加工について解説する。
技術・情報教育	教育工学的手法を用いた教育環境の改善	岩井 憲一 (いらい けんいち)	情報教育講座 (認知科学／教育工学)	生徒(中・高) 保護者	教育環境は、慢性的な人材・予算不足等の問題から、これまで以上に質の高い教員の採用や情報ネットワークの導入による資源の共有、および、新しい教育手法の検討が求められています。本講座では、これまで行ってきた学習指導案の電子化や情報ネットワーク環境等の ICT 導入事例を通じて教育環境の電子化について提案します。
技術・情報教育	一本の木から椅子をつくる	岳野 公人 (たけの きみひと)	技術教育講座 (技術教育／環境教育)	教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	森林環境の有効利用の観点から、伐採から製材、椅子作りのプロセスをすべて人間の手でおこなう方法を紹介します。米国では、グリーンウッドワーキングといい、日本の木地師が山にこもって、器づくりをしていたころの技術と同様の伝統的な手法である。作業できる場所が確保できれば、実際の作業を体験するワークショップを開催することもできる。
技術・情報教育	多様な生物と生態的ネットワーク	服部 昭尚 (はっとり あきひさ)	情報教育講座 (生態学)	生徒(高) 保護者	生産者と消費者、分解者から構成される生態系に、なぜ多様な生物が存続しなければならないのでしょうか。具体的に何種、絶滅すると、生態系は崩壊するのでしょうか。観光地として人気のサンゴ礁に焦点を当て、多様な生物が構成する好循環のシステムを紹介しながら、生態系と生物多様性、そして絶滅の意味を考えます。

4 出前講座

分野	題名	講師	講座	対象	内容
技術・情報教育	宇宙の誕生と進化	穂積 俊輔 (ほづみ しゅんすけ)	情報教育講座 (天体物理学)	市民一般	宇宙はビッグバンという大爆発から始まったとされています。では、なぜそのような大爆発があったことがわかったのでしょうか。さらに、「大爆発」とはガス爆発のようなものなのでしょうか。このような宇宙の誕生から始めて現在の私たちが見ている宇宙の姿を、人類の宇宙観の変遷とともに解説していきます。
技術・情報教育	動物の行動を真似るロボット	右田 正夫 (みぎた まさお)	情報教育講座 (認知科学／ロボット工学)	生徒(高)	外界からの情報に応じて、自ら適切な行動を選択できるロボットを総称して「自律ロボット」といいます。自律ロボットが動作する環境はとても複雑ですが、さまざまな動物の行動様式を真似てロボットの行動をデザインすることでうまく対処できる場合があります。本講義では、そのような自律ロボットの研究事例を紹介します。
技術・情報教育	複雑系入門 ーフラクタルとは何だろうー	水上 善博 (みずかみ よしひろ)	情報教育講座 (コンピュータシミュレーション)	生徒(高)	海岸線や川の流れ、雲の形や木の枝ぶりなど、自然の造形には複雑な形をしているものが多く見られます。複雑な形をした図形の特徴を表す方法にフラクタルがあります。本講義では、フラクタルという考え方を分かりやすく解説し、形の複雑さを知るための指標としてのフラクタル次元の求め方を学びます。

家庭科教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
家庭科教育	何をどう食べる？ ー自分のための食べ物、食べ方ー	久保 加織 (くぼ かおり)	家政教育講座 (食物学)	教員(小・中・高・特) 市民一般	誰もがいつでも食べたいものを食べられる現在であるからこそ、どの年代の人も自分の健康のためには何をどれだけどのように食べるのがいいか、きちんと理解しておくことが大切です。様々な情報と食品表示が氾濫する中で、自分のための食材選びと食べ方について考えます。(具体的にどのような点に重点をおくかは、対象者に応じて相談させていただきます。)
家庭科教育	くつろぎの住まい	田中 宏子 (たなか ひろこ)	家政教育講座 (住居学)	児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	住まいは、雨や風、暑さ・寒さや様々な過酷な自然現象から人々を守る役割があります。また、そこで暮らす人々がゆつくりと休養し、エネルギーを蓄えるなど、住まいは人々の心身の健康を維持する役割ももっています。これらの役割を果たすためにはどのような工夫が必要でしょうか、ともに考えてみたいと思います。
家庭科教育	家族の機能	平松紀代子 (ひらまつ きよこ)	家政教育講座 (家庭経営学)	児童・生徒(幼・小・中・高) 教員(幼・小・中・高) 保護者市民一般	家族の存在はどのような機能を果たしているだろうか。社会で一番小さい組織(システム)である家族について、客観的に振り返り、時代、国、あるいは同じ時代に同じ地域に暮らしていても異なる家庭の文化にも目配りしつつ、それぞれの価値観の違いをふまえ、それぞれの価値観を尊重することの大切さについてお話しします。
家庭科教育	衣生活と環境	與倉 弘子 (よくら ひろこ)	家政教育講座 (被服学)	教員(小・中・高・特) 市民一般	環境問題に配慮した衣服の着装行動について解説します。衣服による気候の調節と省エネルギー(暑さ寒さに応じた着方、クールビズ・ウォームビズなど)、有害紫外線と健康の関わりや衣服による紫外線対策について、衣服のリユース・リサイクルなど、環境保全に関わる衣生活の問題について考えてみましょう。

英語教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
英語教育	人間の言葉の能力について:母語の獲得、外国語の習得と脳のはたらき	大嶋 秀樹 (おおしまひでき)	英語教育講座 (英語科教育／言語心理学)	児童・生徒(小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	ことばの能力は、生き物の中で、人間だけが持つ能力です。人間は、ことばを覚え、ことばを使ってコミュニケーションをします。ことばの能力には、音声、語彙、文法、意味の領域で、脳の活動が大きく関わっています。講義では、人間の持つことばの能力、ことばの能力と脳の働き、母語の獲得、外国語の習得について、最新の言及の知見にも触れながら、話を進めようと思います。
英語教育	アメリカ小説を読む	林 直生 (はやしなお)	英語教育講座 (アメリカ文学／アメリカ文化)	市民一般	詩や小説などの文学作品は、それ自体が独立して存在するのではなく、作家が作品を執筆した当時またはそれ以前の時代の社会や文化と密接な関わりを持っています。この講義では、主に 20 世紀前半のアメリカで書かれた小説を取り上げて、作品とその背景について見ていきます。
英語教育	言語学への招待	板東 美智子 (ばんどうみちこ)	英語教育講座 (言語学)	生徒(高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	・なぜひととはことばをもっているのか(言葉の起原) ・なぜひととは3歳ぐらいになるとことばをしゃべり始めるのか(普遍文法) ・アメリカ人の子供のように学習すれば日本人も英語がべらべらになるのだろうか(言語臨界期仮説) ・ことばのかたち・いみ・ならび(形態論・意味論・統語論) ・会話の意図は会話に出てこない(語用論) などについて紹介します。

学校教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
学校教育	教育法規を読み解く	藤村 祐子 (ふじむら ゆうこ)	学校教育講座 (教育制度学)	教員(小・中)	教育法規は、教育の枠組みとなる重要な要素です。様々な教育改革が進められる中で、教育法規に目を通し、教育に何が求められ、どの方向に進もうとしているのか、改めて考えてみたいと思います。
学校教育	『エミール』を読む ～生きるための教育と 大人の役割について	三輪 貴美 (みわ きみえ)	学校教育講座 (教育学・教育哲学)	保護者	ルソーによって書かれた『エミール』は、人が教育をまさに「生きるために」必要とした時代のものであり、その思想は時代や文化の違いを越えて現代の私たちにも「生きること」の意味を考える材料を提供してくれます。それが書かれた時代状況等にも触れながら、「生きるための教育と大人の役割」について考えます。
学校教育	記憶のしくみと 効果教授・学習	井上 毅 (いのうえ たけし)	学校教育講座 (認知・学習心理学)	教員(小・中・高・特)	認知心理学の観点から人間の記憶システムに関して概説したうえで、効果的な学習につながる教授・学習上の工夫についてお話しします。
学校教育	他者理解の コミュニケーション 心理学	蔵永 睦 (くらなが ひとみ)	学校教育講座 (社会心理学)	教員(幼・小・特) 保護者 市民一般	人間は、他者とたくさんのコミュニケーションをとりながら生活する生物です。本講座では、対人コミュニケーションのメカニズムとつまずきのポイント、人間が持つコミュニケーション能力の基盤である「他者の気持ちを理解する」力について、心理学の観点からお話しします。
学校教育	キャリア教育の 理解と推進	若松 養亮 (わかまつ ようすけ)	学校教育講座 (キャリア心理学)	教員(幼・小・中・高・特)	進路指導や就職指導と混同されがちなキャリア教育について、その出自や必要性、中教審答申に示された内容について解説し、具体的な推進方法や運営上の課題について、これまでの実践例にふれながらお話しします。
学校教育	子どもが「こころ」 に気づく時	渡部 雅之 (わたなべ まさゆき)	学校教育講座 (発達心理学)	教員(幼・小・特) 保護者 市民一般	幼い子どもたちは、自分自身の中にある「こころ」という存在を、十分に意識することができません。他の人間にも「こころ」があり、それが自分の「こころ」と同じ働きをしていることに気づくことで、他者への共感や理解が深まります。こうした「こころ」への気づきの発達過程についてお話しします。
学校教育	カウンセリング マインドを育む	芦谷 道子 (あしたに みちこ)	学校教育講座 (臨床心理学)	教員(幼・小・中・高) 市民一般保護者	さまざまなこころの問題が起こっている現代において、どのように人と関わればよいか、どのように子育てや子どもの心理的援助をすればよいか、悩みを抱えておられる方も多いと思います。自己理解や他者理解のヒントとなるよう、カウンセリングの基本的な概念や、カウンセリングマインドについて、絵本や教材、体験を通して学んでいきます。
学校教育	教師－生徒関係 の変容とこれから	太田 拓紀 (おおた ひろき)	学校教育講座 (教育社会学)	教員(幼・小・中・高・特) 保護者 市民一般	現在、教師と児童生徒との関係性における危機が広く叫ばれています。では、過去の教師と生徒の関係は良好だったのでしょうか。そもそも、問題視されはじめるのは、いつ頃からでしょうか。この講義では、わが国における教師－生徒関係の歴史的变化を概観し、その上で、今後の望ましい関係性のあり方について考えてみたいと思います。

幼児教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
幼児教育	子どもの育ちと絵本	菅 眞佐子 (すが まさこ)	幼児教育講座 (幼児心理)	児童・生徒(幼・小・中・高) 教員(幼)	絵本を読み聞かせてもらうことで、子どもは自らの内面世界を豊かに作り上げていくとともに、周りの人とつながることの楽しさやその大切さを感じとっていきます。子どもの育ちとの関連で注目される絵本をいっしょに楽しみながら、子どもの育ちと絵本の関係について考えてみましょう。

4 出前講座

障害児教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
障害児教育	障害の原因と最近の話題	江原 寛昭 (えはら ひろあき)	障害児教育講座 (小児神経学)	教員(幼・小・中・高・特)	近年、遺伝医学などの研究の急速な進展により、病気や障害の原因の解明が急速に進展しました。 この講義では、それらの研究の成果を中心に、障害に関するトピックスを概説します。
障害児教育	ちよつとたちの発達と教育	窪田 知子 (くぼた ともこ)	障害児教育講座 (特別支援教育)	教員(幼・小) 保護者	私たちの身のまわりにいる“ちよつと気になる子どもたち(主に、発達障害の子どもたち)”のことをどう理解すればよいのか？家庭や学校でどのような関わりをすれば、彼らの健やかな育ちを支え励ますことができるのか？保護者とうまく連携するには…？などのテーマについて、一緒に考えてみたいと思います。
障害児教育	障害のある子の発達と教育	白石 恵理子 (しらいし えりこ)	障害児教育講座 (障害心理／障害児教育)	教員(幼・小・中・高・特) 保護者	主として知的障害や発達障害をもつ子どもたちの発達と教育について考えます。 (発達の時期等については、ご相談に応じます)。
障害児教育	支援の必要な子どもと教育	羽山裕子 (はやま ゆうこ)	障害児教育	教員(小・中)	通常学校に在籍する支援の必要な子どもたちは、学校生活のどこにつまずきを抱えがちなのか。どのような支援が可能なのか。一緒に考えていきたいと思っています。
障害児教育	「気になる」児童・生徒の発達の理解と支援	松島 明日香 (まつしま あすか)	障害児教育講座 (障害児心理)	教員(幼・小・中・高・特) 保護者	友達とトラブルになる、じっとしていられないなど、対人面や行動面において「気になる」児童・生徒の存在が注目されています。その支援と対応には彼らの困難さを発達の理解に理解していくことが重要です。本講義では、この時期の発達を通して「気になる」児童生徒の困難さをどのように理解し、対応していけば良いのかについて考えます。

環境教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
環境教育	湖沼の生態系	石川 俊之 (いしかわ としゆき)	環境教育講座 (湖沼生態学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	湖沼の水の中には一見すると何もみえないように見えます。しかし、そこには目に見えない小さな生き物が活躍する実に豊かな世界があります。琵琶湖を例に生物と生態環境の関係について考え、自然環境を大切にするためにできることを考えます。
環境教育	食料生産と環境	森 太郎 (もり たろう)	環境教育講座 (園芸学/植物病理学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	私たちの生活に欠かせない食料生産と環境との関係について、食料生産は環境にどのような影響を与えているのか？一方、食料生産は環境からどのような影響を受けているのか？の観点から講義し、持続可能な食料生産について考えます。

教職大学院担当教員関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
教職大学院	幼児の健康と生活	奥田 援史 (おくだ えんじ)	幼児教育講座 (健康教育)	教員(幼) 保護者	幼児の健康と生活の関連について概説します。 また、「幼児期運動指針」(文部科学省)を解説します。
教職大学院	学校の危機管理	河口 眞佐男 (かわぐち まさお)	教育実践総合センター (学校管理)	教員(幼・小・中・高・特)	今日、学校をとりまく環境には様々な危機が存在します。児童生徒の安心安全を守ることが何より最優先課題です。最近の国の動向をふまえ、近年の事例から、事件・事故の発生前、発生直後、発生後の学校管理について取るべき対応について分析・検証し、安全教育、安全管理、組織対応の内容や課題について考えていきます。
教職大学院	社会科の学力とパフォーマンス評価	岸本 実 (きしもと みのる)	社会科教育講座 (社会科教育)	教員(小・中・高)	社会科の思考・判断・表現の学力を身につけさせるために、パフォーマンス評価の指導と実践が求められています。授業中の15～20分の中心活動、1時間として1単元の授業など、生徒の思考・判断・表現のパフォーマンスをどのように指導し、評価すればよいのか、ワークショップ形式で考察します。

分野	題名	講師	講座	対象	内容
教職 大学院	体育授業における 指導と評価の一体化	辻 延浩 (つじのぶひろ)	保健体育講座 (体育科教育)	教員(小・中・高)	子どもたちが学び合い育ち合う体育授業はどのように実現できるのか。いま教師に求められる考え方や指導性はどのようなものか、協同的な学びをどのようにデザインし、評価していけばよいのか等、学習集団づくりの理論と方法について考えていきましょう。
教職 大学院	自然景観と自然災害／ 防災教育と学校安全	藤岡 達也 (ふじおか たつや)	理科教育講座 (科学教育／防災教育)	児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特)市民一般	本講義では、次の3つのテーマを取り扱っています。テーマの選択等は可能です。 ① 自然と人間との関わり(持続可能な社会とこれからの環境教育) ② 自然景観の形成・活用と自然災害(国立公園・ジオパークと近年発生した自然災害など自然の二面性について) ③ 防災教育と学校安全・学校危機管理(子供を事件・事故災害から守るために)
教職 大学院	授業実践の事例研究	堀江 伸 (ほりえ しん)	学校教育講座 (教育方法学)	教員(小・中)	学校で授業研究を実際にされることを前提に引き受けることにしています。ひとりの教師や何人かの教師が、ある目的で授業研究されるのを参観し、その後の検討会に参加させていただくという形式です。 その目的は、問いませんが、以下の教科に限らせていただきます。国語科、社会科、図工・美術科、道徳、総合の授業です。授業を改善するという目的でも、校内研究のテーマに即した授業研究でもかまいません。進め方などは相談に応じます。
教職 大学院	メディアと教育	松原 伸一 (まつばら しんいち)	技術教育講座 (メディア情報学)	教員(小・中・高)市民一般	①「メディアの本質を科学する」、②「メディアの利用を実践する」、③「メディアの内容を吟味する」という3つの視点から、メディア教育の在り方について講義する。①では、いろいろなメディアを取り上げ、②では、コンピュータやインターネットなどの情報メディアや、e-Learning/WBL(ネットワークやホームページ利用の学習)などの教育メディアを取り上げ、③では、メディアリテラシーを取り上げて、講義を行います。
教職 大学院	家庭科教育の理論と実際	矢野 由起 (やの ゆき)	家政教育講座 (家庭科教育)	教員(幼・小・中・高・特)	生涯にわたって自分らしく豊かな生活を送っていくためには、家庭科において何をどのように学べばよいでしょうか。ともに考えてみたいと思います。
教職 大学院	算数・数学科の授業づくり	畑 稔彦 (はた なるひこ)		教員(小・中)	新学習指導要領で目指す「主体的・対話的で深い学び」について、事例をもとにワークショップ形式で考えます。
教職 大学院	学校のビジョン形成と 評価の手法	大野 裕己 (おおの やすき)		教員(主に小・中・高校)	今日の学校経営改革下で各学校に求められるビジョン形成やその評価の考え方・手法について、学校組織開発や内外連携構築と関連して整理・検討します(講義・演習・コンサルテーション)。 ※学校関係者評価や学校第三者評価実施への関わりについても、本務に支障のない範囲(年度数件程度)で対応できます。

5 教職探究講座

教職探究講座は、主に滋賀県内の高校生を対象として、教員の仕事や子どもの発達特徴を理解することを通じて、教職への意識高揚を図ることを目的として実施されるものである。

平成 29 年度は、草津東高校、長浜北高校、安曇川高校の 3 校の依頼を受け、教職関係の講座を実施した。

- ・草津東高校：太田拓紀准教授（学校教育講座）
- ・長浜北高校：大野祐己（教職大学院）
- ・安曇川高校：奥田援史（教職大学院）

また、この講座の重要なプロジェクトとして例年実施されている教職探究講座（東大津高校及び水口東高校）を平成 29 年 12 月 19 日・20 日の 2 日間に渡り、本学部大会議室で実施した。高校生約 60 名と本学部在学学生で各高校 0B の参加があり、多角的に教職への意識を高める機会であった。具体的なプログラムは以下のとおりである。

<平成 29 年度地域教育支援室連携講座「教職探究講座」実施要項>

- 1 目的 教職に対する理解を深めながらモチベーションを高め、進路（教職）に対する視野を広げ、その希望を確実なものとするために、東大津高等学校、水口東高等学校と連携して開催する。
- 2 対象 滋賀県立東大津高等学校、水口東高等学校、1・2 年生
(希望者 64 名)
- 3 主催 滋賀大学教育学部・滋賀県立東大津高等学校・滋賀県立水口東高等学校・
- 4 期日 平成 29 年 12 月 19 日（火）・20 日（水）
- 5 会場 滋賀大学教育学部 本館 2 階 大会議室（2 日とも）
- 6 日程

(1) 1 日目：12 月 19 日（火）

◆開講式（14:30～14:40）（司会：畑 稔彦 准教授）

◆第 1 講（14:45～15:15）「教職への志が拓く教師の道」（担当：河口眞佐男 教授）

○教職とは

- ・人を教えること、人に教えることについて考える。
- ・教職を志す上で大切なこと

◆第 2 講（15:20～16:20）「学校における心理的問題への教師による対応」

（担当：芦谷道子 准教授）

- ・現代の子どもたちが抱える心理的問題
- ・仲間関係の発達の变化
- ・教師による関わりと支援

◆第 3 講（16:30～17:30）教育学部で学ぶとは（担当：奥田援史 教授）

○教育学部とは

- ・各学校種の免許取得方法
- ・他学部との違い（教育学部の独自性）
- ・教育学部の可能性（就職）

○「先輩に学ぶ」

東大津高校、水口東高校、石山高校の卒業生OB・OGとの懇談交流会

- ・「私が滋賀大で学んでいること、感じていること」（先輩からの話）
- ・「先輩への質問と応答」（高校生からの質問）

(2) 2日目：12月20日（水）

◆第4講（14:40～15:45）「授業とICT」（担当：岩井憲一 准教授）

○教育におけるICT活用とは

- ・ICT活用の重要性
- ・ICT活用の効果

○教育の情報化にむけて

- ・ICT活用の取り組み

◆第5講（15:45～16:50）「教師力の形成」（担当：大野裕己 教授）

○今なぜ教師力が求められているのか

- ・教師力とは
- ・求められるコンピテンシー

○教師力を高めるために

- ・教師力の形成と大学での学び
- ・学び続ける教師と教師力

◆閉講式（16:50～17:00）・・・修了認定証授与（代表）（司会：畑 稔彦 准教授）

◆Tea Party With Cake set & OB・OG（17:10～17:40）



（講義の様子）



（Tea Partyの様子）

6 教育臨床研究

1. 教育相談領域

これまで同様、非公開での相談業務を継続した。相談場所としては主にカウンセリング室と研究室(芦谷)を用いた。現地に赴いての緊急相談もあった。今年度の相談延べ件数(2月末まで)は98件であった(下表参照)。

今年度は、個人のみならず外部相談機関からのグループ・スーパービジョンの依頼が増えており、出張してスーパービジョンを行うこともあった。

平成 25 ～ 29 年度 教育臨床研究部門 教育相談数 (件)

	教員相談 コンサル	スーパー ビジョン	本人・ 保護者相談	学生相談	計
25 年度	17	54	10	30	111
26 年度	17	81	21	21	140
27 年度	17	79	9	40	145
28 年度	23	78	5	25	131
29 年度 (2 月まで)	17	58	3	20	98

2. 大津少年鑑別所との連携事業

2014 年度より開始した、大津少年鑑別所と連携事業を引き続き実施し、鑑別所に入所している少年を対象とした学習教室に大学院生を派遣し、教養講話を行っている。時間は一回 30 分～1 時間ほど、頻度は1ヶ月に一度程度で、今期 11 回実施し、通算 35 回の実施となった。必要に応じて筆者が関係者と枠組みについて検討し、担当院生にスーパービジョンを行っている。鑑別所からは子どもたちに貴重な体験になっていると好評を得ており、また派遣講師にとっても貴重な学びの機会となっている。以下は担当大学院生 (M3 中川栄太、M2 田中瞳) からの実施報告である。

① 教養講話実施状況

第 1 回	4 月 11 日	受講者 3 名	第 2 回	5 月 23 日	受講者 3 名
第 3 回	6 月 13 日	受講者 3 名	第 4 回	7 月 25 日	受講者 1 名
第 5 回	8 月 8 日	受講者 2 名	第 6 回	9 月 12 日	受講者 2 名
第 7 回	10 月 10 日	受講者 1 名	第 8 回	11 月 28 日	受講者 4 名
第 9 回	1 月 16 日	受講者 3 名	第 10 回	2 月 13 日	受講者 3 名
第 11 回	3 月 13 日	(予定)			

今後の課題としては、対象者の状況や構成に合わせて、臨機応変に内容を合わせていくことが挙げられる。終了後のコメントからは、“難しかった”という記述も散見された。なるべく簡単な言葉で、視覚教材を用いて講話を行ったが、内容自体を詰め込みすぎていた可能性が考えられる。反応を見ながら、最も理解を要するであろう入所者のレベルに合わせていくことが求められる。また、「“注意”の機能の実感～絵を描く～」、「盲点を知る」「脳が視覚情報を補正していることを知る～目と頭を動かして～」など、身体の動き（体験）を取り入れた内容も行っていたが、対象者の反応は非常に良かった。なるべく入所者が身体を使いながら学べるよう、ワークショップ形式の内容を取り入れることが重要であると考えられる。

最後に、筆者にとっても教育的示唆に富む体験であったことを付記しておく。機会を与えて下さったことに感謝の意を表する。

（文責：中川 栄太）

② 教養講話概要

【言葉を育む】

＜内容＞季節の話（手作りの今月の貼り絵を使用）、手作りプリント（詩やエッセイ、歌詞、新聞記事など）、朗読タイム（エッセイ、コラム、歌詞や詩など）人生訓（今日の振り返り）。

＜所感＞約2年間にわたり大津少年鑑別所においての実践（教養講話）を振り返れば、常に試行錯誤の中、不安で手探りの実践ではあったが、以下の7点の留意点に至った。①手作りのもの（プリントや貼り絵など）、② シンプルでわかりやすい提示、③ 彩りや季節感を取り入れる、④ 「質問してもよろしいですか？」という確認をとってから声掛けをする、⑤ 自分の言葉で答えられるよう、優しくゆったりとした声掛けをする、⑥ 空間・時間を全員で共有できるように配慮する、⑦ 答えやすいように、選択制（三択）やヒントなどを与える。

その結果、こちらの朗読に合わせて、小さく体でリズムをとっていたり、他者の言葉を味わうようにしていたり、拙くても自分の言葉で伝えようとしていたりといった姿が見られた。他者の言葉を聞き、少しずつ自分以外の気持ちや思い、感じ方などに触れることで、今までとはまた違った体験（体感）となったと思われる。偶然、一期一会で出会った彼らが、同じ空間におり、同じ時間を共有することで、人とつながることの大切さや面白さなどに気づくことができた。また、言葉に詰まっても、うまく言えなくても、別の子が、言葉で助けてくれる場面にも遭遇した。あたたかい雰囲気が、彼らを包んでいるように感じられた。「言葉を育む」、「情緒を育む」ということは、長い成長の中で育まれていくものであり、一朝一夕になされるものでないと言われている。その発達段階において、適切にきちんと大人が関わっていくことができたのであれば、思われることが多くあった。生まれた時から、非行に関わる子どもたちは、一人もいない。どうして、どのようにここに至ったのかを彼らの背景や家庭環境などを鑑みれば、一目瞭然のことであり、実感される。実践を通して、やはり子どもたちへの「入口支援」（家庭、地域、学校など）、「中間支援（トンネル支援）」（矯正施設など）、「出口支援」（出所後の社会など）での更なるあたたかい見守りと支援の充実が肝要であると言える。いつも、そばに見守ってくれる大人がいることが、大きな支えとなり、自信を持って頑張れることに繋がる。

最後に、子どもたちには、過去に囚われることなく、更に未来を憂うことなく、確かな歩みで一步一步、自分らしさを忘れずにしなやかに生きていってほしいと切に願いたい。一期一会の出会いを通して、何か学びの一助となったのであれば、私にとってはこの上ない幸せである。

（文責：田中 瞳）

【脳の構造的特徴と機能】

＜内容＞人＝自らは産まれたときから、死ぬまで（話しをしている、“今このとき”も）、脳を使い続けており、本来であれば脳は非常に身近な臓器である。脳は知的好奇心を惹起させるに十分な臓器であり、脳への関心の高まりは、人＝自らの身体への科学的感興の扉を開くことも期待でき、少しでも入所者の子どもたちの心に引っ掛かるように講義を行った。

＜所感＞対象者の学力的背景や発達段階にはバラつきが大きい。そのため、プリントにはルビを振る、絵や写真などの視覚教材を積極的に使用するなどの工夫を行った。また、生物学的知識、理科的知識が乏しい入所者がほとんどであることを考慮し、わかりやすく説明することに注力した。この場では何を言っても、間違っても何ら恥ずかしくないことを強調し、話し易い空気と場を作るよう心掛けた。更に、なるべく入所者の言葉を紡ぎながら講義を進め、一方向的な講義とならないように気を付けた。

対象によって反応は様々であったが、概ね積極的に講義に参加している様子が窺えた。入所者同士での話し合いや、関わりは禁じられているため、学び合うことは難しい。しかし、なるべく問いを投げかけ、考える時間を作ることで学びの体験になるよう心掛けた。そして、たとえたとどしい言葉遣いではあっても、自分なりの考えを言葉にしていた入所者の様子からも、自分なりに考え、学びを得ていたことが想像できる。更に、講話後のコメントからは、“脳のことを学んだのは初めてだった”、“知らないことばかりだったが、面白かった”などの感想が多かった。このようなコメントからも、多少なりとも入所者の感興を喚ぶことに本講は寄与したのではないだろうか。

3. SKC キッズカレッジ（滋賀大キッズカレッジ）2017 年度連携活動報告

① 教育学部との連携

2017 年度は、SKC キッズカレッジと滋賀大学教育学部の連携の中で連携協定書を締結するという大きなイベントがあった（下調印式写真）。今後さらに良好な協力と連携を発展させたいという思いを一層強くした。現在、教育学部では発達障害の相談・アセスメントを相談準備室（旧 207 研究室）、心理教育相談室（旧動物実験室）で行っている。最近では、附属小学校・中学校の保護者からの相談も含めて、毎週のように、就学前から成人まで、地域的にも、彦根、京都などから発達障害に関する幅広い相談がある。



連携協定書調印式（6 月 21 日、於学部長室）

② 子育てサロンぽかぽか

「子育てサロンぽかぽか」は、子育て中のお母さんのおしゃべり沙龙的な居場所づくりとしてほぼ毎月第 4 月曜日または第 4 水曜日の午前中にプレハブ校舎や清流荘で開いている。予約なしで自由に参加できることが特徴である。参加者が全くいないこともあります、継続して開いている。最近では、若いお母さんたちが子育てについて案外と相談する機会がないということで数人の参加がある。ボランティアとして参加してくれているお母さんもあり、小さい子どもの世話や先輩お母さんとして会話に参加してくれたりしている。新聞記者が関心を持ってきて、何回か参加してくれている。



（朝日新聞 2017. 3. 21）

③ キッズカレッジ学習室への学生大学院生ボランティアの参加

キッズカレッジは発達障害のある子どもたちの学習支援と保護者の相談機関であるが、ボランティアとして学生、院生が参加してくれている。キッズカレッジとしては、学生、院生の論文執筆に協力したり、時にはゼミのような検討会を開いたりしている。

今後も、さまざまな形で教育学部との連携・協力が発展することを願っている。

(文責：窪島 務・堀口 真理子)

4. 滋賀県公立小学校との予防教育開発実践事業

2017年1月より、滋賀県において「生きる力を育むモデル校」に指定されている公立小学校にて、予防教育開発実践に取り組んでいる。昨年度は6年生を対象に認知行動療法心理教育プログラム的一种であるマインドフルネスの小児版である「.bプログラム」を実施し、今年度は3年生を対象に、鳴門教育大学予防教育科学教育研究センターが開発した「いのちと友情の学校予防教育」(トップ・セルフ、TOP SELF: Trial of Prevention School Education for Life and Friendship)を実施している。

毎回子どもたちが生き生きと楽しんで授業に取り組む姿が観察されており、また子ども達のフィードバックを受け、プログラムの修正をしながら実践を重ねている。

【プログラム実施状況及び操作目標】

第1回 10月25日・10月27日

「正(楽しい、嬉しいなど)の出来後を想起し、正感情を高めることができる」

第2回 11月27日

「自己の長所を探すことができる」

第3回 2月16日

「他者の長所を探すことができ、他者の価値を肯定することができる」

第4回 未定

「自分の夢、将来について考えることができる」



(文責：芦谷 道子)

1. 今年度の取り組み

教育の情報化および最新技術普及推進の観点から、今回は「JSON (JavaScript Object Notation)」の紹介を行います。

2. JSON について

「JSON (JavaScript Object Notation) [1]」とは、ネットワーク通信で用いられる軽量のデータ交換フォーマットです。シンプルな構造から人間にも読み書きが容易で、マシンにも簡単にパース（構文解析）や構造の生成を行うことができます。それまでのデータ交換フォーマットの代表的なものには XML (eXtensible Markup Language) というものがありまして、今でも主流の一つとして用いられてはおりますが、JSON と比べますと扱いが難しいことから、現在では POC (Proof of Concept ; 概念実証) など素早い開発 (RAD : Rapid Application Development) を必要とする場合では、支援環境が充実しているために JSON に主流が移りつつあります。JSON は元々 JavaScript の仕組みを流用したもので、当然ながら JavaScript での利用を念頭に置いています。オープンで有用性の高い構造であることから、他の言語での利用も可能となっています。例えば小学校のプログラミング教育では、ビジュアルプログラミング言語として Scratch[2] が有名ですが、国産の同種の言語としては MOONBlock[3] が有名で、これはプログラム内容を JavaScript で表示することも可能です。このように JSON というデータ交換フォーマットはすでに教育分野にまで浸透しようとしています。

3. JSON の構造について

JSON をご覧いただく前に、CSV 形式について少し説明致します。CSV とは Comma Separated Values の略で、図 1 のように各データがカンマで区切られたテキストです。これについては Excel でもなじみがあると思います。

	“No.” , “Name” , “Score”
“1” , “佐藤” , “90”	“1” , “佐藤” , “90”
“2” , “鈴木” , “68”	“2” , “鈴木” , “68”
“3” , “山田” , “72”	“3” , “山田” , “72”

図 1(a) CSV 形式の例（項目名なし）

図 1(b) CSV 形式の例（項目名あり）

このテキストを例えば「score.csv」という名前でファイルに保存して Excel に読み込ませると、そのまま Excel 上での編集が可能です。これを図 2 のような形式で保存したものが JSON です（細かく言いますと元データの形式により表現形式も多少異なります）。JSON はご覧のように何らかのデータを「{ }（中カッコ）」で囲った形式のテキストです。

Excel には PowerQuery というアドインをインストールすることで直接 JSON を扱うことが可能となりましたが、Excel 2016 では最初から PowerQuery が「取得と変換」という標準機能として搭載されていますので扱いが一層容易になりました。

図 2 に「score.csv」を JSON 形式に変換したファイル「score.json」の内容を示します。図 1 図 2 において (a) が項目名なし、(b) が項目名ありのものです。(b) では項目名（キー）が含まれることにより、少し専門的になりますが、図 2(b) は例えば「No.」:「1」や「Name」:「佐藤」のように、「キー:値」の組み合わせからなる「連想配列」という形で表されています。項目名がない場合は「[]（大カッコ）」

で括っており、項目名がある場合は「{ } (中カッコ)」で括ることになっています。(専門的にはオブジェクトとして扱う際には「{ } (中カッコ)」で括ることになっています [1].)

ちなみに Microsoft の Windows Store には「CSV to JSON Converter[4]」というアプリケーションがありますので、これを利用して変換すると便利です。

[	[
[“1”, “佐藤”, “90”],	{ “No.” : “1”, “Name” : “佐藤”, “Score” : “90” },
[“2”, “鈴木”, “68”],	{ “No.” : “2”, “Name” : “鈴木”, “Score” : “68” },
[“3”, “山田”, “72”]	{ “No.” : “3”, “Name” : “山田”, “Score” : “72” }
]	]

図 2(a) JSON 形式の例 (項目名なし)

図 2(b) JSON 形式の例 (項目名あり)

JSON は配列のような様なデータ構造だけでなく、C 言語における構造体やデータ構造における木構造のように階層化されたデータの扱いも可能としています。さらにはこの JSON をサポートするプログラミング言語は、部分構造のみのデータ編集を可能とする関数や命令が用意されていますので操作が大変容易になっています。例えば JavaScript のみならず、Java 言語や PHP 言語でも扱えますので、自前でのサーバだけでなく、外部レンタルサーバでの運用も容易に行えます。

4. おわりに

今回の JSON のサンプルは配列を基にした内容だけでしたので大変シンプルなものとなっており、もしかすると CSV からわざわざ変換するだけの意義がわかりにくいかもしれませんが、逆に高い可読性を持った大変読みやすい形式であることから、これまでも様々な Web アプリケーションやスマートフォン・タブレットアプリケーションにおけるデータ構造として採用されています。教育現場でもこれらのデータ構造を意識しておくことで、アプリケーション開発を依頼する際の仕様書に活かす場面や、あるいは近年行われている動きである「システム内製化」という自前でのアプリケーション開発に踏み切るきっかけとなるかもしれません。

参考文献

- [1] JSON の紹介, <http://www.json.org/json-ja.html>, (2017 年 10 月 1 日アクセス).
- [2] Scratch, <https://scratch.mit.edu>, (2017 年 10 月 1 日アクセス).
- [3] MOONBlocks, <http://www.moonblock.jp>, (2017 年 10 月 1 日アクセス).
- [4] CSV to JSON Converter,
<https://www.microsoft.com/en-us/store/p/csv-to-json-converter/9wzdnrcrdhjt>,
(2017 年 10 月 1 日アクセス).

(文責：岩井 憲一)

8 教育実習支援（その1）

教育参加カリキュラムは平成17年に始まり、今年で13年目を迎える。1年次の教育参加プランニング・事前観察、2年次の基本実習事前学習・交流実習、3年次の基本実習（教育実習）・教育実習中間指導、教育実習終了後（3年次の秋学期と4年次）の発展実習、自主参加体験という滋賀大学のすべての教育参加カリキュラムを、原則として4年間、積み上げ式に体験するプログラムである。特に、地域実習（平成17年から始まった栗東実習、平成25年度から始まった守山実習）では「地域の公立学校における教育支援活動を通して実践的力量を高める」という目的に則り、実習校、教育委員会、大学とが連携して行っている。

1. 教育参加プランニング

1回生の教育参加プランニングは、グループ学習を通して、将来の目標を設定し、これから4年間の学びを計画させるものである。プランニング作業は、個々の学生の立場から、教育参加カリキュラムにおけるそれぞれの実習の位置づけを明確にし、目的意識をもって実習に取り組むことを容易にしていると考えられる。

2. 事前観察

事前観察は、交流・基本実習の事前指導として附属学校での授業参観等（事前観察）を行う、1回生の活動である。交流・基本実習を行う前に附属学校の日常に触れ、教員としての心構えや、学校の現状を体感する機会になっている。この事前観察の事前指導は次の項（教育実習支援 その2）で述べる。

3. 交流実習

交流実習は、学校行事等における準備や運営に指導者の立場から体験的に関わる実習である。今年度の2回生は、小学校では校外体験や運動会、中学校では体育祭や合唱コンクール（文化祭）の指導補佐を行った。児童生徒とのふれあいを通して、先生方が学校行事等をどのように準備し、どのような配慮をしながら実施しているのかを実践的に学んでいる。

4. 基本実習

3回生になると、交流実習を行った学校で4週間の基本実習を行う。具体的には、児童生徒の生活指導、授業観察、（研究）授業、一日担任などである。基本実習では、個別の児童生徒の対応にとどまらず、クラス全体を視野に入れて、児童生徒との関係を作っていくこと、授業を進めていくことが求められる。また、公立学校での実習においては、多様な児童生徒や様々な課題を抱えた児童生徒と向き合うことで、より具体的な対応を学ぶことができる。この基本実習の事前指導は次の項（教育実習支援 その2）で述べる。



地域実習校での教育実習

5. サポーター活動（発展実習）

地域実習では、基本実習の事前・事後指導の一環として、基本実習の配属校で3年次の3月まで原則として週1回のサポーター活動を行う（栗東実習3回生は全員必修、守山実習3回生は希望者のみ）。基本実習前の活動は、児童生徒や先生方との関係をつくることに重点を置き、6月から10月までの実習期間中は、児童生徒との信頼関係の形成、担当教員との授業の打ち合わせ、授業構想・指導案の確認等のために欠かすことのできない活動となっている。そして、基本実習修了後の活動は、基本実習で学んだ成果をいかして、児童生徒や先生とより深く関わり、学校の教育活動に積極的に参加することを目的としている。なお、基本実習前と実習期間中のサポーター活動は自主参加体験として、実習後のサポー

ター活動は発展実習として単位申請することができる。また、学生が希望すれば、基本実習の配属校で4年次になってもサポーター活動が続けられる。

6. 大学の支援体制

学生への支援体制は多岐にわたっているが、以下の3つについて述べる。1つ目は、実習中の支援である。地域実習では、栗東守山実習担当の学部教員が学生の授業を参観したり、学生から実習の様子を聞いたりして、技術面、精神面への支援を行っている。また、基本実習を行う3回生には、第1ステージ（6月）と第2および3ステージ（9・10月）の間に、教育実習中間指導を実施している。教育実習中間指導では、それぞれの実習校での経験を語り、共有することで、前ステージの課題を見つけ、次ステージに向けての目標を明確にすることを目指している。

2つ目は、実習後の支援である。基本実習と教育参加プランニングが終了する頃に、各専修専攻毎に教育実習報告会を開催している。3回生が基本実習の成果を発表し、それぞれの経験を振り返る機会を提供している。また、1回生や2回生は、上回生の発表や彼らとの意見交流を通して、次に行う実習の情報を得ることもできる。

3つ目は、サポーター活動への支援である。週1回のサポーター活動による学びを充実させるため、3年次の基本実習履修前の段階から発展実習のプログラムへの参加を認めている。具体的には、学生たちが日々の活動を記録し、公開、共有するためのウェブ掲示板SULMS（滋賀大学・学習管理システム）の利用を行っている。SULMSは、学生一人一人が日々の実践を整理し、振り返るために活用されている。さらに、学部教員が、SULMSに書かれた学生の記録を閲覧し、アドバイスを書き込むことで、学生の振り返りがより有意義になるよう手助けしている。このように大学が学生のサポーター活動の振り返りを支援する取り組みを充実させることで、学生が目的意識をもってサポーター活動に臨みやすくし、活動が続ける動機づけを見出しやすくしていると考えられる。



小学校でのスクールサポーター活動

7. 今後に向けて

今後、重点的に取り組むべき課題は、次の3点である。第1に、教育参加カリキュラムの運営や改善について、大学と実習校がより密接に連携して行うシステムを充実させることである。

第2に、学生のニーズを踏まえつつ、協力自治体・協力校の受入体制や大学のサポート体制を洗練させ、サポーター活動がさらにしやすい環境を整えることである。

第3に、これからの4年間を考えるために必要な情報を提案するなど、学生がプランニングをしやすくなるためのきめ細やかなサポートを行うことである。

（文責：宮嶋 國彦）

9

1. 事前観察のための事前指導 8 月 23 日

小学校：9月1日、中学校：9月7日、幼稚園：10月11、12日、特別支援学校：9月2日＋0.5日

1	9 : 0 0 ~ 9 : 4 0	求められる教師・メモの取り方
2	9 : 4 0 ~ 1 0 : 0 0	授業を見る視点と観察・記録及び分析の仕方
3	1 0 : 2 0 ~ 1 2 : 0 0	DVD 視聴による授業観察・記録・分析
4	1 3 : 0 0 ~ 1 4 : 0 0	授業分析・グループ協議
5	1 4 : 0 5 ~ 1 4 : 3 5	まとめ
6	1 4 : 4 0 ~ 1 6 : 0 0	観察実習オリエンテーション
	1 4 : 4 0 ~ 1 4 : 5 5	各学校担当者の紹介
	1 4 : 5 5 ~ 1 5 : 0 0	観察実習の諸注意
	1 5 : 0 0 ~ 1 6 : 0 0	校種別学校説明

A. 本指導について

B. 「教育実習基礎」の指導について

①授業づくりと教材研究についての講義

(授業の構想と授業のイメージ：指導計画と授業過程)

②指導案の大切さと指導案の様式、指導案の書き方の具体についての講義

(指導後、指導案作成に係る課題を提示・・・中学校は各教科)

③模擬授業の学習指導案および教材等の作成（各グループごとに集まって作業）

④模擬授業の実施と指導Ⅰ（模擬授業および指導案に関する指導）

⑤模擬授業の実施と指導Ⅱ（ ）〃（ ）

指導者 平成 29 年度実施日

A	来学指導 1	・・・①と②を指導	附属教員	8月 1 日 (火) 9:00 ～ 12:00
B	グループ 作業	・・・③の活動	大学教員	8月 17 日 (木) 9:00 ～ 12:00
C	来学指導 2	・・・④を指導	附属教員	8月 24 日 (木) 9:00 ～ 12:00
D	来学指導 3	・・・⑤を指導	附属教員	小 : 10月 26 日 (木) 14:30 ～ 17:00 中 : 10月 5 日 (木) 19 日 (木) 11月 2 日 (木)

3. 基本実習後事後指導 11月16日、30日

【テーマ】 実習を通じた成果を振り返り、改善と協働できる教師を目指す

【内容】・教育実習を手掛かりに振り返り思考と改善の態度ができるようになるよう

・仲間と協働し、仲間同士で育ちあう機会にしよう

【日程】 14:30～14:40 はじめに

14:40～15:10 自己評価書への記入

15:20～16:50 「実習を終えて」グループ協議

課題1:「教育実習で何を学び、何が自分の課題になったのか」

課題2:「実習を終え、教職への志向・迷いと これからの自分の生き方」

16:55～17:25 グループ別協議の報告 キーワードで

大講義室 : 1班から20班

中講義室 : 21班から40班

4. 教育実践演習 11月9日、12月7日

教職を目指す4回生の指導として具体的な教育活動を想定とした演習をおこなった

【内容】

11月9日 14:30～児童・生徒の救急対応

15:30～4月8日を迎えるために

学級開き

親身になること

愛着ある学級づくり

12月7日 15:00～授業の基本

16:00～懇談会・親対応

電子黒板の利用の仕方

これからの道徳教育



本年度1回生から4回生まで教育参加プログラムを見据えた事前指導や事後指導を行ったが、何よりどの指導も学生に意欲を持たせること、ビジョンや見通しを持たせることに配慮した。演習方式を取り入れたり、指導案を実際に作成させてのぞませることで机上の議論にはならないように工夫した。グループ協議などで課題についてそれぞれの卒業までのスパンの中で何をすればよいのかも感じさせることができた。課題として個々の学生によって思いや捉え方が違うのもう少

し人数を少なくしたり、いつでも相談できる教育相談的な機会も学生にはサテライトとして必要と感じた。次年度も指導の内容の更新と指導の工夫改善に留意していきたい。

(文責: 狩野 秀樹)

10 キャリア支援の取り組み

1. 事業名および担当者

事業名：キャリア支援事業 担当者：学部教員 松岡尚文

2. 事業の目的

面談による助言などをおして学生一人ひとりが充実した学生生活を送り、将来の職業人としての資質向上が図れるよう支援する。また、教員採用試験受験に備えた助言や指導を行う。

3. 事業の概要

1) 主な取り組み

①グループ・ガイダンス

1 回生全員が対象。3～5名のグループを編成し、5月の連休明けから7月中旬までに授業の空き時間を利用して研究室で実施。ガイダンスの時間は約45分。キャリア支援の内容紹介のほか、大学生活を送るうえでの助言や卒業生の進路状況の説明などを行う。いつでも気軽に相談できるという安心感を与えることを第一目標にしている。また、本学へ入学した理由、大学生活の満足度、教職を目指す気持ちなどについてアンケート調査（下に結果の一部を掲載）を実施し、個人相談などを行う際の基礎資料としている。

②進路相談

学部生・院生の希望者が対象。教職に就くことへの不安、教職以外の就職、大学院への進学、教員採用試験の校種や受験する自治体の選択、自治体主催の教師養成塾などに関する個人相談を行う。

③採用試験対策の指導

主に3・4回生と院生の希望者が対象。出願書類の添削や論作文、面接試験の対応などを指導している。希望者が一定期間に集中するため、時間確保が課題となっている。

④フォローアップ・ガイダンス

教員採用試験の不合格者のうち希望者が対象。今後の進路希望について十分に話を聞き、場合によっては進学や講師登録などについて助言するとともに、次年度の採用試験に向けた具体的な対策などについても助言している。

2) アンケート調査結果の一部

①「あなたが本学へ入学した理由は何ですか」（1つ選択）

- 1 教職を目指しているから 2 入試難易度や受験科目などが自分にあっていたから
3 国立大学法人だから 4 親や高校の教師などが勧めたから
5 特に理由はない 6 その他

回答 年度	平 2 4	平 2 5	平 2 6	平 2 7	平 2 8	平 2 9
1	6.0.2%	6.8.4%	7.0.4%	6.5.3%	6.8.7%	7.1.9%
2	8.8%	7.2%	6.4%	1.0.5%	9.6%	8.7%
3	1.8.3%	1.2.0%	1.2.4%	1.4.9%	1.3.7%	1.1.6%
4	7.2%	5.6%	4.4%	4.8%	4.4%	4.1%
5	1.2%	1.2%	0.4%	0.8%	0.4%	0.8%
6	4.4%	5.6%	6.0%	3.6%	3.2%	2.9%

②「あなたは本学での大学生活に満足していますか」（１つ選択）

- 1 大変満足している 2 ほぼ満足している
3 やや不満である 4 大いに不満である

回答 年度	平 2 4	平 2 5	平 2 6	平 2 7	平 2 8	平 2 9
1	27.1%	28.8%	24.8%	37.1%	25.7%	24.8%
2	63.3%	66.4%	66.4%	57.7%	69.5%	67.8%
3	9.8%	4.4%	7.6%	4.4%	4.8%	7.4%
4	0.8%	0.4%	1.2%	0.8%	0%	0%
1 + 2	90.4%	95.2%	91.2%	94.8%	95.2%	92.6%
3 + 4	10.6%	4.8%	8.8%	5.2%	4.8%	7.4%

③「現時点であなたの教職を目指す気持ちはどの程度ですか」（１つ選択）

- 1 ぜひ教職を目指したい 2 できるだけ教職を目指したい
3 教職以外を目指したい 4 どうするか決めていない

回答 年度	平 2 4	平 2 5	平 2 6	平 2 7	平 2 8	平 2 9
1	55.8%	59.5%	58.8%	58.9%	66.3%	66.9%
2	26.7%	23.8%	30.0%	32.3%	23.7%	26.9%
3	6.4%	6.8%	2.8%	3.2%	2.8%	2.1%
4	11.2%	9.9%	8.4%	5.6%	7.2%	4.1%
1 + 2	82.5%	83.3%	88.8%	91.2%	90.0%	93.8%
3 + 4	17.5%	16.7%	11.2%	8.8%	10.0%	6.2%

④「あなたは週１日以上定期的にアルバイトをしていますか」

- 1 している 2 していないが、する予定である 3 していないし、する予定もない

回答 年度	平 2 9
1	66.1%
2	28.5%
3	5.4%
1 + 2	94.6%

*「１」と回答した者のアルバイト従事は、週あたり約２．６日、
１日当たり約４時間が平均値。

⑤「あなたは奨学金を受けていますか」

- 1 受けている 2 受けていない

回答 年度	平 2 9
1	28.1%
2	71.9%

*「１」と回答した者の１か月当たりの奨学金の額（金額を
記入した者の平均値） 約５２，０００円

4. 今後に向けて

明確な職業意識、適切な教育観や使命感の形成に寄与するとともに、将来の職業人としての資質向上が図れるよう支援していく。また、厳しさを増す採用試験についても自信を持って臨めるよう指導していく。

（文責：松岡 尚文）

11 業務報告

(春学期)

	教職キャリア教育支援	教育実習支援	石山プロジェクト	共同研究・パイディア
4月	・新入生対象グループガイダンス諸準備 ・実施時間希望調査・日時連絡等 4～5月) ・大学推薦選考面接(4～5月) ・進路指導(通年)	・実習担当教授と打合せ ・教育実習委員会 ・守山・栗東市教委挨拶 ・教委打合せ(栗東・大津) ・実習連協(栗東・守山・附属) ・守山実習オリエンテーション ・京都発展実習説明会 ・守山・栗東スクサポ登録(サクセス) ・交流実習・基本実習オリエンテーション ・開始式(守山・栗東) ・京都サポートセミナーオリエンテーション	・年度当初の打合せ	
5月		・京都セミナー会議 ・実習校挨拶(栗東・守山・大山崎小・宇治中) ・滋賀県採用大学推薦面接 ・宇治中に学生と挨拶 ・教育実習訪問(守山・栗東) <事務> ・実習資料作成	・退職女性校長会への協力依頼	・研究の応募受付に係る業務
6月	・採用試験対策指導(小論文・面接) ・模擬集団討論指導	・教育実習訪問(守山・栗東) ・学生面談 ・3回生実習中間オリエンテーション	・石山幼稚園事前訪問	・研究応募一覧の作成と結果通知 <事務> ・研究応募業務(同上) ・共同研究事業関係(資料作成)
7月	・採用試験対策指導(小論文・面接) ・1回生・4回生面談	・学生面談 <事務> ・志望調査データまとめ、グラフ作成 ・実習基礎資料作成 ・旅費申請	・石山小学校事前訪問 ・石山幼稚園省察会	<事務> ・研究紀要案内・印刷・発送
8月	・新入生アンケート調査集計 ・採用試験対策指導(自己PR文・面接) ・フォローアップ	・実習基礎 ・学生面談 ・観察実習事前指導 <事務> ・観察実習事前指導、資料作成、印刷他		
9月	・採用試験対策用資料の見直し ・フォローアップ	・小学校観察実習 ・教育実習訪問(栗東・守山・附属) ・教育参加ガイダンス(9～10月) <事務> ・実習関係(旅費申請)	<事務> ・石山プロジェクト応募者受付、一覧表作成、連絡	

	教職実践演習・教職探究講座	出前講義・校内研究	HP 更新作業	学力向上プロジェクト
4月		・講師依頼について担当者に連絡・ファイリング（通年）		
5月				
6月				
7月	＜事務＞ ・高大連携の準備		・業者との打合せ	
8月		＜事務＞ ・出前講義 ・講師依頼について担当者に連絡・ファイリング		
9月			・コンテンツの移行を業者に依頼（9～12月）	

(秋学期)

	教職キャリア教育支援	教育実習支援	石山プロジェクト	共同研究・パイディア
10月	・フォローアップ ・教員養成研修講義 ・京都府教師力養成講座受験対策指導 (10～12月)	・実習基礎【中】(10～11月) ・学級担任実践演習 ・栗東教育実習訪問 ・学生面談 (10～11月) ＜事務＞ ・実習事後指導でサクセスでのアンケート実施の為、経済学部へ研修	・石山小学校事前訪問 ・石山幼稚園事前訪問	・パイディア原稿募集 ・パイディア原稿審査 ＜事務＞ ・パイディア原稿募集 ・パイディア応募者一覧作成 ・パイディア原稿審査 (審査担当準備と配布)
11月	・教職大学院生対象小論文指導 ・京都府教師力養成講座受験対策指導 (11～12月)	・教育実践演習 (11～12月) ・学級担任実践演習 (11～12月) ・事後指導 (3回生) ＜事務＞ ・実習事後Ⅰに関わる資料作成・印刷 ・事後指導Ⅰでのアンケート結果、意見をまとめ実習事後Ⅱの資料作成・印刷		・パイディア、業者と打合せ ＜事務＞同上
12月	・教職大学院生対象小論文指導 (12～3月)	・附属実習連協 ・守山実習連協		＜事務＞ ・パイディア初稿依頼配布と同時にメールでも依頼
1月		・教育実習委員会 ・平成29年度実習のまとめ	・石山幼SS省察会 (実践センター)	＜事務＞ ・パイディア初校締切り
2月		・実習基礎 (補講) ・平成30年度実習計画立案 (2～3月) ＜事務＞ ・実習事後Ⅰレポート返却学生へ連絡	＜事務＞ ・石山SS報告会の出欠について確認 ・石山幼SS (実践センターにて)	＜事務＞ ・年報原稿依頼 (共同研究、センター業務) ・パイディア再校返却 ・パイディア発行 ・パイディア発送準備
3月	・次年度新入生対策グループガイダンス用資料作成			＜事務＞ ・パイディア発送

	教職実践演習・教職探究講座	出前講義・校内研究	HP 更新作業	学力向上プロジェクト
10月				
11月	・教職実践演習			・豊郷町教務主任会 (大野先生指導助言)
12月	・教職実践演習 (12月19日・20日) ＜事務＞ ・教職探究講座の準備 (資料印刷・来校へ連絡) ・模擬授業に関する連絡		＜事務＞ ・HP 更新について講習会	
1月		＜事務＞ ・出前講義一覧（変更後） と出前講義派遣依頼票、校内研究 HP 掲載前の確認	・HP リニューアルに伴う確認作業	
2月		＜事務＞ ・出前講座担当教員、教職探究講座担当教員及び学生ボランティアの方の確認連絡	＜事務＞ ・年報原稿依頼 (共同研究、センター業務) ・年報原稿締切り	・豊郷町教務主任会 (大野先生指導助言)
3月			＜事務＞ ・年報 HP 掲載前の確認 ・年報 HP 掲載 ・パイデディア HP 掲載	

教育実践総合センター年報 第1号

2018年3月発行

滋賀大学教育学部 教育実践総合センター

〒520-0862 大津市平津二丁目5番1号

TEL 077-537-7993 (直通)

FAX 077-537-7909

<https://www.edu.shiga-u.ac.jp/cerp/>



SHIGA UNIVERSITY